
予定調和を乱すもの

虚言の騙り手

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

予定調和を乱すもの

【Nコード】

N8616V

【作者名】

虚言の騙り手

【あらすじ】

ある日、突然襲われた主人公。危機に陥ったときに現れたヒロイン。彼女は未来からやってきた……。迫る命の危機。主人公は生き延びることができるだろうか。

起 1

まず、一つ聞きたい。自分の未来について、日頃から考えているか？

俺、尾形おがた 廻まわるは考えてないし、そんな奴はいないだろうと思っている。日頃からずっとそんなことを考えていたら、毎日がつまらないだろうし、きっと面倒だ。

未来について考えるのは、中学、高校、大学、それぞれにおいての卒業間近、進学や進級を考えなければならぬときだけで十分だ。

「ぐへっ！」

だから、特に深いわけがあるわけでもなく、絡まれたから、という理由だけでこうして拳を振るうこともある。別に教師からの評判なんて元から低いんだから多少、素行が悪いからと言って、今更何か失うものもない。

「ち、畜生！調子に乗りやがって！」
「ぶっ殺してやる！」

先に倒した二人が何か吼えているが、全く怖くない。というか、反応がワンパターンすぎて呆れている。

「まだ、やるか？」

自分で言うのも空しいが、俺は目つきが悪い。どれくらい悪いかって言うと、街を歩いていると、皆がやや避けるくらいに目つきが

悪い。

それがいい具合に、普通の人から見れば、危険な人に見え、悪ぶっている奴等にはちょっと生意気だと思われるくらいらしい。

「お、覚えてるよ!」

むしろ、お前等がな。

劣勢になっていた奴等を俺が一睨みすると、その中の一人、赤い髪が捨て台詞を吐いて逃げ出し、それを追いかけて残りの二人、青い髪と黄色い髪の奴もそいつに続いて逃げていく。

こいつらに絡まれたのは一度や二度ではない。俺がこの町に引越してきた初日に絡まれて以来、大体二週間に一度は絡まれる。

頭がとても残念なあの三人組は二週間もすると、絡んだ上に返り討ちにされた相手のことを忘れるらしい。ちなみに、理由は毎回「目つきが気に入らないから」だ。

三人の見慣れた後姿を見送ると、その辺に放り投げた鞆を回収する。

学校帰りの途中で偶然であつた三バカに連れられて、この人気のない工業地帯に来るのもこれで何度目になるのかと溜息をつきながら家に帰るべく、足を進めていく。

夕飯をどうするか、と考えながら角に差し掛かった。

「どわっ!?!」

「がつ!!」

角を曲がる寸前に、目の前を人が飛んでいき、壁に叩きつけられる。

俺は驚いて、一步後ずさり、崩れ落ちる人に視線を向けていると、耳に足音が聞こえてきたのでそちらを振り向く。

「げ」

そこにいたのは、いかつい顔に右頬を縦断する切り傷、目つきも俺と比べても恐ろしい男。いかにも、ヤクザといった感じの男がいた。

「ひ、ひい。ゆ、許してくれ!もうしない!もう帰る!だから、みのお!」

飛ばされていたやや肥満体型の男が許しを請うが、ヤクザは殴り倒した上で首根っこを掴み、こちらに視線を向ける。

「・・・・・・・・」

俺は無言で道を譲った。

事情が分からないことに首を突っ込む必要もないし、正義感が強いわけでもない。何より、ヤクザは怖い。

俺が譲った路をヤクザは男を引きずりながら歩いていく。

「た、助けてくれ!頼む!たすげえ!」

男は俺に助けを求めたが、ヤクザに殴られて黙らされる。

俺はその姿を黙って見送り、二人が角を曲がり、姿が見えなくなるとそれを見なかったことにした。

それにしてもあの男は一体、何をやらかしたんだか。

一瞬、そんなことが頭をよぎったが、考えても意味の無いことだし、首を突っ込みたくも無いので頭から振り払い、男達が来た方向へと足を踏み出す。

チャリ。

「ん？」

足元を見ると、十字架を模ったらしいシルバーアクセサリーが落ちていたので、拾い上げる。

「——あの男のか？」

先程、ここで壁に叩きつけられた男のものだろうと推測した。

十字架には輪が取り付けられていた、輪の大きさからして手首にかけるものだろう。あの男には似合わないものだが、ヤクザのものではないだろうし、それ以外に持ち主に心当たりがない。

「……………もらつとくか」

男達が去った方向に目を向けたが、あの男達に関わりたくないの

で、そのまま拾い、ズボンのポケットに突っ込んだ。

俺が自宅である木造二階建てのアパートに戻ると、丁度、トラックがアパートの前から発進したところだった。

車体に某大手引越し会社の絵が書かれていることを、すれちがう時に目にして、首を傾げる。

「あ、お兄ちゃん！」

去っていくトラックを目で追っていると、アパートの入り口から声をかけられた。

声をかけてきた主は、小さな体でトテトテと奔り寄ってきて、俺の腰に飛びついてきた。

「お帰りなさい、お兄ちゃん」

「おう。帰ったぞ、命」

抱きついてきたのは、天理^{あまり} 命^{めい}。このアパートの大家の一人娘であり、くりつとした瞳とぴよこぴよこと動きに合わせてはねる黒いツインテールが特徴的な人懐っこい少女だ。ちなみに、義理の妹とかではない。

「命、さっきのトラックは引越し業者のだよな？誰か引つ越してきたのか？」

「うん！すごーい綺麗な女の人だよ。それに優しそうだったし、お

姫様みたいな人」

「へえ」

そんな人がこんなところに来るのか？

大家の娘である命の手前、声には出さないが、はつきり言っているの。アパートはぼろい。ついでに、駅から遠い上に商店街やコンビニなども離れた場所にある。つまり、あまり良くない物件だ。

俺がここに住んでいるのは、家賃が安かったという一点に尽きる。

仕送りをもらっているし、バイトも行っているが、とても裕福とは言えないぐらいの金銭しかないので、安いという一点に絞って物件を探した結果、このアパート『止まり木荘』に辿りついた。

住んでいるのは俺と大家の一家だけであり、その人気の無さが伺え、その新しくやってきた女性を含めても三つの部屋しか埋まっていな

い。

町のほうにはこのアパートより好条件名物件が幾つもあるので、当然といえば当然の流れなのかもしれない。

そんな物件に命が言うような女性が引っ越してくるだろうか？もしかしたら、見た目はよくても、家系が貧しいなどの事情があるのかもしれないが。……考えたところで、分かるわけないか。

「お部屋はお兄ちゃんの隣の部屋だよ」

「一応、後で挨拶しとくか。ほら、もう離れる」

「えー」

渋る命を無理矢理引き離す。

「あ、そうだ。お兄ちゃんの部屋のテレビ、ちゃんと直しといたからね」

「お、サンキュ」

「えへへ」

頭を撫でてやると、嬉しそうに頬を緩ませる。

どうにも俺は機械類が苦手で、ああいったものはよく理解できない。その一方で、未だ小学生の命は機械類に強く、こっちに引越してきたからそれ関係で命に助けてもらったことが何度かある。

「んじゃ、俺は部屋に戻る」

「あ、待ってよ。まだお金貰ってないよ」

「っと、そうだったな」

財布から千円札を一枚取り出すと、両手の掌を差し出している命に渡す。

「毎度あり」

幼いながらも自分の家が貧しいことを理解している命は自分の特技を活かして、こうして小遣い稼ぎをして家に収める随分と出来た子だ。

「今日は遊んでくれないの？」

「また今度な」

不満そうな命を残し、二階へと登る階段を上がっていく。

古びた階段を鳴らしながら上がり、通路の一番奥まで進んだ所が俺の部屋だ。

ガチャ。

通路の真ん中まで来たときに、俺の部屋の一個手前の部屋、命の言う通りなら、今日引越してきた女性の部屋の扉が開かれていく。

その日までの俺は何処にでもいるありふれた人間の一人だった。

開かれた扉からまず見えたのは、ドアノブを握る小さい手。シミ一つない新雪のように真っ白な手は既にそれだけで育ちの良さが伺え、この時点で俺は命の前評判が間違っていないと感じていた。

だけど、その日からそれが変わってしまった。

手の次に映ったのは、腕を包む白い衣服、それは清楚さを象徴するような純白の長袖で踝まで隠すほど長いワンピースだった。ゆったりした感じの服越しにも豊かな胸、くびれた腰などの抜群のスタイルを判別できた。

これから長い付き合いとなる『彼女』との出会いは俺の未来の方向性を決め付けた。

純白のワンピースに対するように彼女の背中には黒真珠のように人を魅了する黒い色をした髪が腰の辺りまで伸びている。その髪の艶は見事なもので、丹念に手入れをされてきたことが分かる。

俺は自分のために否応なしに未来を捻じ曲げなければならないと知った。

最後に目に入ってきた顔は、目はやや垂れ目であるが、ふっくらした唇、スツとした鼻とバランスよく配置されていて、それらの調和が温かな雰囲気をもし出していた。はつきり言って、俺がこれまで会った人間の中で最上級の美人だった。

そして、それは同時に世界の未来を捻じ曲げることに繋がった。

「あら？」

俺を見た女性が発した声は正しく鈴の音になったように澄んだ声で、聞くものに安らぎを与える。俺は一瞬、この声が声であることに気付けないくらいに、その音に聞き惚れた。

その結果、俺の日常は非日常が付きまとうことになった。

「お隣の方、ですか？」

ふわりと女性が首を傾げるのにつられて黒髪が揺れる。俺は彼女に見惚れて、反応するのが遅れた。

「あ、ああ。その奥の部屋に住んでる尾形 廻だ」

でも、俺はそんな日常を悪くないと感じるようになった。

「初めまして。今日からこの部屋に住む雨潟 あまがた つむぎと申します。これからよろしくお願いいたします」

そう言っで微笑む彼女は今まで出会ったどんな女性よりも美しく、俺はまたしてもぼうつと見惚れてしまった。

彼女、つむぎと出会った日のことを俺はきつと死ぬまで忘れないだろう。

起 2

『未来ノ市』。近年、業績を急激に伸ばしてきた大企業『三ツ傘工業』の本社がある街であり、俺が現在の住居と通っている学校が存在する街だ。

現在の市長は『三ツ傘工業』の息のかかった人間であり、彼が市長に当選したのも『三ツ傘工業』のバックアップがあったからというのは公然の秘密だ。

市長を始め、街の有権者達も従えた『三ツ傘工業』はまず手始めに、それまでの市名から『未来ノ市』に改名し、周辺の市町村を吸収合併、更には増大した市の面積の三分の一を自分達の会社の工業地域へと様変わりさせた。更には持っていた潤沢な資金を用いて交渉を行い、新たに路線も引つ張ってきて、俺が引越してくる一年程前に開通した。また、『三ツ傘工業』の発展力や新たに路線を引つ張ってくることで知った業者たちが金の臭いを嗅ぎつけ、こぞつて『未来ノ市』に進出してきて、『三ツ傘工業』が有名になり始めて十年もしないうちに『未来ノ市』は急激に発展した。

所々で急激な発展に取り残された面影が見えるが、それも後十年もすれば完全に消え去るだろう。

そんな『未来ノ市』で大きく変わったものの一つに学校が挙げられる。

工業地域を作ったところには小学校や中学校も含まれており、それを潰すと同時に資財を投入して、保育園から大学院まで一貫した学園『未来ノ学園』を創設した。

それには『三ツ傘工業』の社長の一人娘であり、発展の原因とも言える天才少女に充実した環境で学んで欲しいという社長の親馬鹿も多分に含んでいるものであったが、設備は文句なしに最上級であり、学費も安いということで周辺の小中高学校は軒並み閉鎖、吸収され、今や世界最高峰の学園となっている。

かといって、難易度が高いかと言われるば、そうでもない。

『未来ノ学園』で求められる能力というのは平均やや上といったところであり、毎年、多くの入学者が学園に通うことになる。しかし、学園は怠惰を許さない。規律自体は厳しくはないのだが、中学生からは特別な生徒でない限り、それまでの成績や性格、行動、発展性を考慮したうえでテスト毎に規定点が各生徒に到達され、それを満たすことが出来なければ学園から追い出されてしまう。

実は入学者も多いが、退学者も他の学校よりダントツで多い。成長をしない、向上心がない者には厳しいのだ。

そんな学園に高等部から入学した俺は入学して最初のテストを乗り切り、一ヶ月程が過ぎ、六月の下旬の今日も真面目に勉学に勤んでいる。

自分で言うのもなんだが、俺は素行が悪いし、態度も悪いし、喧嘩っ早い。しかし、勉強にもある程度、真面目に取り組んでいる。

真面目に勉強して、しっかりと成績を出さなければ、素行が悪い俺はあっさりと学園から追い出されてしまうからだ。

面倒な勉強をしなければならぬが、それがあってもこの学園は居心地が良いし、学費も安い。

俺は故郷から家族の反対を押し切って、こっちに引っ越してきた。別に親子仲が悪いわけではない。むしろ良好と言えるだろう。

しかし、何とか思春期特有の反発や自立心から親元を離れて自立したいと思った俺は家族の反対を押し切り、『未来ノ市』へ引っ越してきた。

そして、親に出来るだけ頼りたくないと思った俺は高校ではバイト先を見つけ、出来るだけ自分で生活費や学費を稼ぎ、払うことにした。そのため、必要な金が少なくなるようにとにかく安いということ念頭にアパートや進学先の学校も決めた。

「はあ」

放課後、学園の図書室で椅子に座り、ペンを弄びながら、溜息をついた。

溜息の原因は昨日、つむぎに一目惚れしての恋煩い……、というわけではない。

昨日、つむぎが挨拶をした後、見惚れていた俺に彼女が訝しげに声をかけてきたことで再起動をして、当たり障りのない会話をした後、つむぎは大家に挨拶に行ってしまった。

確かに、つむぎは今までに出会ったことのない美人であったが、惚れる惚れないというのはまた別問題だ。

「溜息をつくとは何か嫌なことでもあったか、三号？」

「待ちくたびただけっす。遅いっすよ。先輩」

後ろから声をかけてきた人物に首だけ向ける。

茶髪を短く切りそろえていて、鋭い目の上に眼鏡をかけ、茶色を基調に赤と黒を使用した女子用の制服を身に包んだ上にヨレヨレの白衣を纏い、右手に分厚い紙の束を、左手にはノートパソコンを持っている一つ上の先輩、三ツ（つ）傘（かさ）知恵（ちえ）は俺の言葉を氣にとめず、隣の席へと座る。ちなみに、彼女も相当な美人に分類される。

「ふむ、勉強か、三号。お前は相変わらず顔や素行に似合わずクソ真面目だな」

「こうでもしないとついていけないんすよ」

「三号は馬鹿だからな。だが、私に泣きつけば配慮するように言っ
てやつてもいいんだぞ？」

「遠慮します。金銭面で先輩に世話になってんのにこれ以上、迷惑
をかけられないっすよ」

先輩の声は平坦で、台詞には毒が混じっているが表情は感心したり、心配そうな表情になったりとところと変化する。

名前で分かるが、先輩はあの『三ツ傘工業』の社長の一人娘にして天才少女だ。

何でそんな学園の宝とも言える人物が俺とこんな親しげかと言え
ば、単純に先輩が俺の行っている二つのバイトのうち、片方のもの

の雇い主であり、先輩は差別や人によって態度を変えるなどのことを無駄な労力と断じ、ほとんど全ての人に同じ態度で接するからだ。つまり、この態度は特に俺が特別ということではない。

「そうか。だが、どうしようもなくなったら私を頼れ。三号は顔に似合わず真面目だからそれぐらいは便宜を図ってやろう」

三号という呼び名は、俺より前に先輩に雇われ、アルバイトをしていたのが二人いたかららしい。三番目だから三号。実に安直だ。

「ふむ」

「なんすか？」

先輩がおもむろにじつと俺を見つめると、溜息をついた。

「いやなに、表面上は悪そうに見えるが、中身はなんてことはない真面目で礼儀正しい好人物だというのに表面にとらわれて誤解する者達が多いのは非常に嘆かわしいことだと思ったのだ」

「別に特別俺が真面目で礼儀正しいってわけじゃないっすよ。先輩が相手なら誰だってかしこまるんじゃないんすか」

「それも一理ある。良くも悪くも私は有名だからな。学園の者は教員も含め、皆が私に敬意を払ってくる。私が父に溺愛されているのは周知のことだからな、父の怒りを買うのが怖いのだろっ。一号や二号もそうだったところがあつた」

「それもあると思いますけど、単純に先輩が凄いからじゃないですかね。つつつか、俺も先輩の親父さんの怒りを買うのは勘弁したいんですけど」

「ふむ……。三号、お前は何故私が凄いと思う？」

「そりゃ、先輩、尋常じゃなく頭がいいじゃないっすか。それなのに特にそれに驕ってるって感じでもないですし、性格も、まあ、い

いかは分かりらないっすけど、悪くはないですから」

「性格うんぬんはともかく、お前の言うとおり、私は頭がいい。尋常ではなく、な。．．．．．しかし、人間、自分の理解を超えるものは避ける傾向がある」

「先輩は別にはぶられてないじゃないっすか」

実際、先輩のファンクラブなんてものも存在するし、話しかける生徒もいる。

しかし、ゆるゆると先輩は首を横に振る。

「物理的にはそうだ。しかし、精神的な距離は果てしなく遠い。皆にとつて私は皆と違う存在なのだよ。賢いのが当然であり、理解が及ばないのも当然であり、畏怖や崇めはすれど肩を並べる者ではない」

「そこまではないんじゃないっすか？アイドルとか芸能人に接するのと同じ感じだと思いますけど」

「ふむ．．．．．。三号にとつて、私はアイドルなどのような存在なのか？」

「は．．．．．？いや、まあ」

ニヤニヤしながら俺に問いかける先輩の問いに俺は考え込んだ。

容姿的に言っても文句なしで美人である先輩はアイドルとしても十分に通用するだろう。しかし、俺が先輩に感じているのはそういうものではない。

「そうっすね．．．．．。アイドルとかそういうんじゃないって、何て言うか、金の面倒も見てもらってますし、すげえ人だと思っますし、ただ漠然と尊敬の出来る人って感じっすね」

「ふむ。三号にとって私はそういう存在か。なるほど。まあ、それはともかく、この学園の者達にとって私は雲の上の更に向こう側の存在なのだよ。私の周りで私をちゃんと見てくれるのは両親と研究仲間、それと三号ぐらいなものだ」

「俺もっすか？」

「そうだ。お前くらいなものだ。この学園で私にそんな気の抜けた言葉を向けるのは。皆、私と話すときは常に身構え、当たり前障りのない言葉を奏上してくるだけだ。何より、私に対して真っ向から意見をぶつけてくるなどこの学園ではありえないぞ？」

「いや、あのときはいきなりあんなもの見せられたらつい口が滑りますって」

「一号や二号は苦い顔はしたが、私の『作品』に対してあんなにはつきりとは言わなかったぞ？それもタメ口で問い詰められるとは思いましなかった」

「ほぼ面識のない相手に自分を題材にしたBL本を読まされれば、動揺してタメ口にもなりますよ」

先輩のもとで行うバイトは不定期的で、たいした体力を使うわけでも、特別な能力が求められるわけでもないのに、得られる報酬は大きい。が、募集しているわけではなく、先輩の目になった人物に打診される。

先輩の気分次第ではあるが、基本的には高待遇であるため、打診され断った人物はいないそうだ。

肝心なバイトの内容だが、先輩が作り、持ってきた『作品』、BL本を読み、感想や意見を述べることに『作品』製作のための協力だ。

最初にバイトの話を持ちかけられたときに、それまではあの三ツ

傘の娘さんだということ失礼のないように接していたのだが、自分が登場する『作品』を読まされて、ついいつもの調子で先輩に問い詰めてしまった。

「まあ、その後はまた堅苦しくなったが、徐々に今のような崩れた態度になったが、それでも礼儀を守り、真面目に仕事にも取り組んでいる。私はそんなお前をそれなりに評価しているぞ」

「接してる中で先輩が尊敬できる人だと分かったから自分なりに敬意を表したらこんな調子になっただけっすよ。特別評価されるようなことはしてないんですけどね」

「背景にとらわれず個を個として見れるのは三号のいいところではあるが、同時に背景を顧みずの後先考えない言動は三号の欠点でもある。私が驕り昂った女だったらどうなっているか分かったものではないぞ？」

「あゝ、小難しく考えるのは苦手っす」

先輩の指摘にやや思い当たる節があるので視線を逸らす。

「三号の美德であるがゆえに無理に改善しろとは言わんよ。それにしても、三号のように多少、捻くれながらも好人物がいるというのに、まともそうに見えて変な輩がいるということは嘆かわしいことだ」

「何のことっすか？」

「ああ、いや、昨日、ストーカーらしき妙な男にあったことをふと思いだしてな。SPが対応するより先にヤクザらしき男に連れて行かれたので妙に記憶に残ってしまった」

もしかして、昨日、俺が遭遇したあの二人だろうか。

そんなことを思ったが、口には出さなかった。

「っと、妙に話し込んでしまったな。では、これが今回の新作だ」

そう言つて、手渡されたのは先輩が右手で持ってきた分厚い紙の束で俺はその紙の束を差し出されて顔を引きつらせた。

「これ、ですか？」

「うむ。三号もそろそろ慣れてきただろうからな。今回からは基本的にこの量を読んでもらう。」

「マジっすか？」

「本気と書いて、マジだ。いつも通り、私は論文を作成しているから何か分からなかったり、疑問に思った部分、意見があれば遠慮なく聞いてくれ」

先輩はパソコンを立ち上げると、論文の作成に取り掛かり始める。

俺は渡された紙束を目の前に心の準備を整える。

目の前にある紙束の一番上、つまり表紙にあたる紙の中央にでかでかところ書かれている。

『 イケナイ保健室

　　不良生徒と淫らな保険医

作　三ツ傘　知恵　』

先輩の『作品』はエロい内容の小説であり、バイトに誘われる人間は先輩が自身の『作品』のモデルにしたいと思った人物だ。つまり、自分をモデルとした人物が登場するエロ小説を読まされるということだ。

内容も中々濃くなっていて、先輩の非凡な才能が文才にまで及ん

でいることを伺わせる。

しかし内容は、『B L 小説』。

……自分をモデルにした人物が登場する濃い内容のB L 小説を読み、それに対して感想や意見を述べ、更に相手はいないとはいえ、イメージを膨らませるためと一部シーンの再現をさせられる。これには思った以上に、精神的にダメージを受けた。

今回の『作品』は題名から察するに、不良生徒が俺で、保険医と絡ませられるのだろう。

「三号、何をしている。早く読め。今回は中々の自信作だぞ」
「そうっすか」

「うむ。三号はネタに事欠かないからな。攻めてよし。受けでよし。和姦も陵辱もいける。今後も期待できそうだ」

そんな先輩の弾んだ声を聞きながら、表紙をめくり、内容を読み始めるのだった。

……どうでもいいことだが、この作品中で俺は受けだった。

起 3

学校からの帰り道、夕焼けに染まった道を俺は歩いていた。

その後、『作品』を読みきることが出来ず、持ち帰って読め、と言われたので『作品』を鞆に入れ、帰路についた。

途中までしか読んでないが、それでも先輩の『作品』によって与えられた精神的ダメージにより、げんなりしながら歩き、手に持ったものを見つめる。

「何すか？これ」

「この前、隣の市のテーマパークがリニューアルしただろう。その経営者から私に送られてきたチケットなのだが、生憎、私はその手のものにあまり興味がない上に暇も取れない。なので、報酬の一部として、お前に譲ろうと思ったのだ。もちろん、それとは別にいつも通り、報酬をだすぞ」

「俺も興味ないんですけど」

「そうか。まあ、いらぬなら換金するなり好きにするといい。どの道、私には全く必要のないものだ」

そんな会話を帰り際に先輩としながら渡されたチケットをどうしようか考えていると数日前のことを思い出した。

「そっぴや、命が行きたいって言ってたな」

遊んでやっていたときに、CMがチラシでテーマパークがリニューアルオープンしたのを知ったらしく、遊びに行きたいと零していた。しかし、あまり自分の家庭が裕福でないことを知っている命が

その眩きを零したのはそれっきりだった。

「・・・・・・・・あいつにやるか」

チケットをよく見てみると、テーマパークの経営者は先輩を含む、『三ツ傘工業』社長一家が訪れることを期待していたのか、有効人数が三人分になっていた。

命の家も三人家族であり、ますます、命にプレゼントしたほうがよさそうだと思いつつ、ポケットにチケットを突っ込んだ。

「ん？」

前方を見ると、人混みの中に昨日、撃退したばかり三バカのうちの一人、髪が赤い奴が俺の進む先に立っていた。

昨日の今日でまたかと溜息をついていると、右後ろと左後ろに残りの二人、青い髪の奴と黄色い髪の奴が立っていることに気付いた。

「・・・・・・・・おい」

何時もの三人組なのだが、何か違和感を感じ、声をかけるが無言のまま何も答えない。

もう一度、声をかけようとしたときに前方に立っていた奴が俺に背を向けて進みだした。それと同時に後ろの奴等も俺との距離を詰めてくる。

「黙ってついてこいつてか」

後ろの二人は答えないが、いつもとは違う無言の迫力がそう俺に訴えかけてきていた。

それを薄気味悪く感じながらも、人の多いこんなところで暴れる気にもなれず、素直についていくことにした。

連れて行かれた先はいつもと同じ、工業地域の中でも人気のない廃工場の一つだった。

「まったく、面倒だな。さっさとかかってこいよ」

持っていた鞆を適当に放り投げ、俺を中心にした三角形の頂点に立って、囲っている三バカに対して、いつもより強めの語気で声をかけた。

正直な話、いつもは口やかましく喚いているこいつらが、今日は一切口を開かないことに薄気味悪さを感じていた。そんな気持ちを振り払うべく、強めの語気で言葉を発した。

「「「「「「「「「「」」」」」」」」」」」」

「「「「「「「「「「「今日は妙に静かだな、テメェら」

こちらの声に何の反応もしない三人に余計に嫌な感じが増していった。

「まあ、いい。やるなら早く、——って、お前、何してんだよ？」

困っていたうちの一人、黄色い髪の奴が俺が放り投げた鞆に向かって歩き出した。

「おい！聞いて」

俺がそいつを止めようと一歩踏み出した瞬間に声を止めざるを得なかった。

強烈な衝撃を脇腹辺りに感じたと思ったら、一瞬の浮遊感の後、右半身に衝撃、更にその後背中に衝撃を感じながら大きな物音を聞いていたからだ。

「があっ！？」

意識するより先に苦悶の聲が吐き出された。続いて、脇腹からの激痛とそれには負けるがそれでもかなりの痛みを右半身と背中が訴えてきた。

「ごぼっ！げぼっ！？」

何が起こったか分からない中で、脇腹を押さえつつ状況を確認してみると、三バカのうち髪が黄色の奴は俺の鞆をひっくり返していて、青い髪の奴は変わらずに突っ立ったまま、最後の赤い髪の奴は拳を振り切った体勢になっていた。加えて、俺がうずくまっている場所はさっき立っていた場所ではなく、壁際だった。

「……信じたくないが、俺はあいつに殴られた壁まで転がされたい。」

それを認識すると、俺の中にあつた奴等を感じていた嫌な感じが

一瞬で、困惑と恐怖に変化し、膨れ上がっていった。

どう考えたって、今の衝撃は人に殴られたものじゃない。

まだ車かバイクに撥ねられたって言われたほうがまだ説得力がある衝撃だった。それを何の変哲もないただの人が繰り出したということに困惑し、その力を俺に向けられているということに恐ろしさを感じてしまう。

俺がそんな風に混乱しているうちに、俺を赤い髪の奴がこっちに向かって歩いてきた。

困惑や恐怖を必死に押さえ込み、脇腹から伝わってくる痛みを堪えながら片手で体を支えながら立ち上がる。

最早、こいつらはいつもの三バ力ではなく、同じ姿をした別の『何か』だと考えることにした。

逃げる、と俺の本能が警鐘を鳴らし続ける。

出口のドアを伺ってみるが、そこに辿り着くには青い髪の奴のすぐ傍を通らなければならない。

どうやら、逃げるとしてもこいつらと多少はやりあうことを避けられそうになさそうだ。

「ちつ。冗談じゃねえよ」

不意打ちとはいえ、殴っただけであんなに人を飛ばせるような奴とやりあうなんて御免こうむる。だが、やらなきゃどうにもならな

い。

「それに、どうにも無事に帰れそうにないし、な！」

こちらに向かってきていた奴に対してこちらから距離を詰め、勢いをのせた右拳を顔面目がけて放つ。

その拳は距離を詰めた勢いに加え、奴等から感じる不気味な雰囲気によって与えられる緊張感でいつもより気合が入り、油断もなくした渾身の一撃だと言えた。

「なっ！」

しかし、俺の渾身の一撃をあつさりと僅かに横に横にずれることだけでかわしたそいつは、そのまま俺の胴体目がけて拳を放ってきた。

それを急いで左腕を体と拳の間に割り込ませることで防御する。

「ぐうっ！？」

今度は先程の不意打ちのときと違い、攻撃が来ることが分かっていたので、踏ん張っていたのだが、それでもかなり後退させられるほどの威力を有していた。

まともに打ち合っていたらすぐに捻じ伏せられる。

そう判断し、空いてしまった距離を無理に詰めずに、カウンターを狙うことにした。

「——っ！」

歩いて近づいてきた奴は自分の拳の間合いに入ったと同時に拳を振るってくる。

鋭く俺に向かってきたその拳を何とかかわし、右足で脇腹を蹴った。

「ぐっ!？」

しかし、蹴った足から伝わってきたのは痛み。蹴った足は確かに相手の脇腹をとらえている。なのに、そこから伝わってきたのは人の肌とは思えない岩のような硬い感触。

その事実思考が停止してしまった。

「しまっ」

驚いているうちに右足を脇に抱え込まれた。

それを振りほどこうと力を込めようとした直前。

「な——!ぐわあ!」

軽々と体を持ち上げられ、投げ飛ばされる。

またしても浮遊感の後に半身に衝撃を感じ、勢いがなくなるまで地面を無様に転がるはめになった。

「くっ、そ」

勢いがなくなると出来るだけ素早く立ち上がった。

あの三人がえたいが知れない『何か』だと思っていたが、今の蹴りで人以外の『何か』だと確定した。

どんなに鍛えようがあんなに硬くなるわけがない。そういえば、威力にとらわれがちだったが、拳もいやに硬かった気がする。

出口のドアを見ると、投げられたことが幸いし、だいぶ距離が近くなり、走っていけば何とか逃げ切れそうだ。

三人の様子を伺い、未だに沈黙を保ったまま俺に歩み寄ってくる髪が赤い奴と突っ立っている髪が青い奴、鞆の中身を漁っている髪が黄色い奴の様子を見て、逃げ切れると判断した俺は出口に向かって駆け出した。

この廃工場から出れば、この付近の工業地域は入り組んでいるので撒けるはず。そう思い、全力で出口に走っていた。

「がはっ！？」

が、突如、脇腹に衝撃を感じ、倒れる。

「げほっ！はあ、はあ」

最初に殴られたところに近い部分からの衝撃に痛みを堪えながら、何が起ったのが周りを確認すると、俺の近くに鞆が落ちていた。

さっきまで鞆を漁っていた奴を見ると、何かを投げたような姿勢になっていた。

やっぱり、あいつもいつもの奴とは違う『何か』か、と思いながら、逃げるために急いで体を起こし、出口のほうを見る。

「…………マジかよ」

ドアの前には、さっきまで突っ立っていたはずの奴が立ち塞がるように立っていた。

逃げる事が出来なくなったことに呆然としてみると、足音が響いてきた。

そちらに視線を向けると、さっきまで鞆を漁っていた奴と俺を相手にしていた奴が一緒に俺に向かってきていた。

えたいが知れない一方的に人を捻じ伏せられる『何か』かが静かに歩み寄ってくるその姿に恐怖がどんどん増していき、叫びだしそうになったとき。

ズドン！！

轟音が鳴り響き、その振動が俺の身を震わせた。

「今度は何だよ！」

半ばヤケになって俺が叫んだ。

ドシャ！

俺が叫んだ後に、ドアの前に立っていたはずの青い髪の奴とドアが奴等の向こう側の地面に落ちてきた。

「は？」

その光景を俺は完全に思考が停止した状態で見ていた。

「じゃ無事ですか、廻さん？」

この場にそぐわない柔らかな声が俺の耳に届き、そちらに振り返る。

声が聞こえてきたのはあつたはずのドアの向こう側、廃工場の外からであり、声の人物は突き出していた掌をおろし、白いタートルネックのブラウスと白いロングスカートを身に纏った彼女が中に入ってくる。

「雨潟、さん………？」

俺の呟きに微笑で応える彼女、昨日、俺の住んでいる部屋の隣に引越してきた女性、雨潟 つむぎがゆっくりとこちらに歩いてくる。

何故、こんなところに彼女が、という疑問が湧いてくるが、今の状況を思い出し、彼女に向かって叫ぶ。

「来るな！逃げるんだ！」

えたいが知れない『何か』がいるこの危険な場所から遠ざけるべく、危険を訴えるが、彼女は微笑を崩さずに声を返す。

「大丈夫です。廻さんこそ、少し下がっててください」

ズドン！

言い終わると同時に彼女の姿がぶれたかと思えば、背後でまたしても大きな音が響く。

振り返ると、微笑ではなく引き締まった表情で掌を突き出した彼女と壁に叩きつけられている黄色い髪の子。

その光景の意味を理解する前に赤い髪の子が彼女に向かって突進してくる。

「速い！」

俺を殴っていたときは段違いの速さで彼女に向かい、拳を振るう。

しかし、彼女はその拳を左手で軽々とさばくと、右手を相手の腹に添える。

ズドン！

右手の掌が一瞬、青く光ったと思ったら、相手は吹き飛ばされて壁に勢いよく叩きつけられた。

俺は目の前で起こった現象に理解が追いつかず、少しの間呆然とその光景を見ていたが、思考が回復してくると目の前に立つ彼女に詰め寄る。

「お、おい。何だよ、今の」

「質問にお答えするのは構わないのですが、もう少々、お待ちいただけませんか？彼らを掃討しないといけないので」

彼女の視線の先、倒れていた三人が立ち上がろうとしていた。

「なっ。何で立てるんだよ!？」

傍目から見ても、尋常ではない力で叩きつけられたはずなのに、三人はたいしたことがないかのように平気で立ち上がる。

「情報通り、単純な衝撃ではダメージはほとんどないようですね」

それが当然といった感じで彼女は奴等の状態を平然と受け止めていた。

「コネク
ト
開口」

彼女が言葉を発し、彼女の横空間が掌と同じくらいの大きさで歪んだかと思うと、歪みが発生した空間に穴が空いた。

彼女は手首までその空間に右手を入れるとすぐに引き抜いた。

引き抜いた彼女の右手は長い棒状のものを掴んでいて、棒の片方の先端には反り返った長い刃が取り付けられていた。

俺の知識が正しければ、それは一般的に薙刀と呼ばれるものだ。
た。

「^{リンク}起動」

刃の周りに青い光が纏わりつき、左手も柄を握り、左手をやや前にし、刃先を下げた状態で構える。

「『葉切』、正常に稼働。——いきます」

彼女が軽く膝を曲げたかと思つた次の瞬間には弾丸のように飛び出した。

俺が彼女の一連の動作を見ていた間に奴等もこちらに向かつてきていたようで、さっきまで奴等がいた場所と俺達がいた場所の中間地点辺りで交錯する。

「はっ！」

彼女から見て、右斜め下から薙刀、おそらく『葉切』という名称のものを正面の相手に切り上げる。

切りかかられた相手、黄色い髪の奴はかわそうとするが、回避が間に合わずにその身を『葉切』で切り裂かれる。

振り上げた状態で器用に『葉切』を回し、刃を止めることなく、今度は右斜め上から先程の軌跡と直角になるように斜めに振り下ろす。

綺麗に？の字に切り裂かれたそいつは血を流すことも無く、バラバラに崩れ落ちる。

俺がそのことに対して何か思うよりも早く、彼女は次の相手に移る。

踏み込んでいた足を軸に体を回し、向きを変えながら移動し、左からの青い髪の男の攻撃をかわし、彼女の右側から接近し、やや遅れて攻撃をしかけてきた赤い髪の男に向き合い、柄頭を半回転させて顎を強打する。

続けて、『葉切』を水平回転させて、赤い髪の男の首を切り飛ばす。しかし、血が吹き出ることになった。

その隙に背後から彼女に青い髪の男が蹴りを放つ。

しかし、それは彼女が跳躍したことで回避され、彼女はバク宙で青い男の上を飛び越え、男を飛び越えた辺りで上下逆さになっている中、回転しながら自分の頭上から一気に股下まで振り切ることによって男の股下から頭上までを切り裂く。

彼女が膝を曲げ、着地すると同時に青い髪の男の二つに裂けた体が地面に落ちる。が、何故かその体からは先に倒された二人同様、血が流れていない。

「掃討完了」

彼女が立ち上がり、『葉切』の柄頭を地面につける。

同時に俺は、助かったと思い、それまで張り詰めていた緊張感が

弛緩し、痛みが強烈に主張し始めたのを感じながら意識を手放した。

起 4

「・・・・・・・・知らない天井だ。・・・・・・・・いや、知っているよ
うな？」

目が覚めた俺は何となく言わねばならないような気がして言葉を
発してみたが、微妙に知っているような気がして首を傾げた。

「お目覚めになりましたか？」

声が聞こえたほうに視線を向けると、微笑を浮かべた女性がこちら
を見ていた。

「あゝ。えっと、海潟さん？」

「はい」

寝起きのせいか、どうも頭の回転が遅く、彼女の名前を思い出す
のにも少しの間が空いた。

そして、ゆっくりと回り始めた頭で俺がベッドで寝ていて、彼女
がそれを見ているといった状態に気付き、慌てて身を起こした。

「いつっ！」

慌てて身を起こすと体、特に脇腹から痛みを感じ、顔をしかめな
がら痛む場所を押さえる。

「治療はしましたが、まだ傷に響きますから安静にしてくださいださ
い」

「傷？ いったい何の——っ！」

傷という言葉に何でそんなものを負っているのか一瞬、疑問に思ったが、俺が倒れる前に何があったかを思い出し、辺りを見渡す。

しかし、俺がいる場所が何処か見覚えがあるような畳敷きの部屋であり、あの廃工場でないことに気付き、若干警戒心を下げた。

「ここは？」

「私の部屋です。あの後、廻さんが気絶してしまいましたので、治療するために運びました。ちなみに、あれから4時間程経っています」

「海潟さんの部屋？」

なるほど。通りで見覚えがあるはずだ。

俺の隣に住んでいる雨潟さんの部屋ならば、俺の部屋と似ている部分があつて当然だろう、とさつきから感じていた感覚に納得した。

納得すると、次々と疑問が浮かび上がってくる。

浮かんできた多くの疑問の中で、まずこの疑問について聞くことに決めた。

「あいつらは、殺した、のか………？」

えたいが知れない奴等とはいえ、彼女は人の姿をした相手を容赦なく切り捨てていた。

聞くまでもなく、あれは間違いなく殺していたと分かっていたが、

俺はそれを否定して欲しいのか、何か理由があつたと言って欲しいのか、自分でも分からなかったが、ともかく、返答によっては彼女も危険と判断しないといけないかもしれない。

「殺したのか、と聞かれれば、殺しました。」

その返答に警戒を強め、距離を少し開ける。

「しかし、廻さんも感じたと思いますが、彼らは人間ではありません。そもそも、彼らに意思があるのか、どうかも判っていません。分かっていることは機械のよう『ある目的』のために行動するということです」

「あいつらが何なのか知ってるのか？」

警戒しながらも俺の知らないことを知り、今のところ俺を害そうとする気配を感じないので、聞けることは聞いておくことにした。

「はい。……そうですね。元々、何もなくても今日か明日には説明するつもりでしたから私が何者か、ということも含めて色々説明させていただきます」

何だか長い話になりそうだと思い、ふと未だにベッドの中にいることに気付き、ここが雨漕さんの部屋である以上、これは彼女の布団であるということに思い至った。

「その前に、ここから出てもいいか？」

「先程も言いましたが、傷に響きますのでベッドから出ないで欲しいのですが」

「いや、何か落ち着かねえんだよ」

「まあ、暴れなければいいですよ」

許可が出たので、ベッドから出て、畳の上に座る。もちろん、彼女とは距離を開け、彼女に遮られずに出口に駆け出せる位置に座る。

「では、色々信じがたいことを話しますが、これから私が話すことは全て事実ですので、それをまずは信じてください」

「とりあえず、聞くだけは聞く。というか、あんなわけの解らないことがあつたんだ。むしろ、何かしらの突拍子のない理由がない限り、納得できねえよ」

そう言いながら、何を言われてもいいように心構えをする。

「まずは、そうですね……。あなたを襲った彼らについて話しましょう」

俺がこの妙なことに巻き込まれたのはそもそもあいつらが原因だからな。

雨潟さんのことも気になるが、こちらもかなり気になる。

「先程も言ったとおり、彼らは人間ではありません。私達は『調整者^サ』と呼んでいます。生態などの詳しいことは分かっていますませんが、人よりも高い戦闘能力を保持し、現れる時間帯、何をするかなど僅かですが、解っていることもあります」

「姿は人間、っていうか、俺の知っている奴の格好だったんだが？」
「それは擬態です。あなたを人気のない場所に連れ出すのに都合のよく、騒ぎにならない姿がああ姿だったというだけです。彼らに触れたなら分かると思いますが、人とは思えない感触でしたよね？それに私が斬ったときに血も流していなかったでしょう？」

「そつえば……」

あの岩のように硬い感触とあいつらが倒されたときのことを思い出しながら答える。

「そもそも、彼らに決まった形があるかどうかも分かっていません。人型もいれば、それ以外の姿の個体も確認されています。今まで確認された全ての個体がプログラムに沿った機械のように淡々と『ある目的』のために行動をしているだけで、意思の有無も分からず、意思の疎通が全く取れていません」

「その『ある目的』ってというのは？」

俺が襲われたのも、その『ある目的』に関係があることは明白だ。知らず知らずのうちに、緊張のため拳を強く握り締め、唾を飲み込んだ。

「『歴史の修正』です」

「『歴史の修正』……？」

いきなり大きくなり過ぎた話にすぐに理解が追いつかなかった。

「正確に言えば、『歴史を出来るだけ正しく進める』ですね。違う結果になってしまった歴史を本来の歴史に近くなるように行動します。特定の人物の殺害だったり、逆に助勢だったり、色々なパターンがありますが、全ての目的は一致しています」

「ちょ、ちよっと待て！」

「はい」

俺が混乱している思考を何とか整理して、疑問を搾り出す。

「歴史を正しく進めるって言うが、何をもって正しい歴史なんて言

うんだ？まさか、未来は全て決まってるってことか？」

「いえ、人の意思や行動というのはそれこそ千差万別です。私達は観測できていませんが、未来もその分、枝分かれしているという説が信じられています」

「だったら、何で」

「ですが、有り得ない因子による介入によって起こされた事象は正しい歴史と判断されずに『調整者^{リバーサー}』によって修正されます」

俺の言葉を遮るように雨瀉さんが言葉を発する。

「有り得ない因子？そんなのがあるのか？」

「はい。その時、その場所にいるはずがない存在、『時間逆行存在^{イレギュラー}』。彼らが有り得ない因子です」

「……まるで未来から来たみたいな感じの名前だな」

「みたいも何もその通りなんです」

俺が名称を聞いて、真っ先に思いつき、あり得ないと思いながらも口にすることが肯定され、混乱に拍車がかかる。

よく分からない状況に巻き込まれ、混乱している中でそんな突拍子もないことを言われ、混乱に拍車がかかったところでカッと頭に血が上った。

「そんな馬鹿なことがあるか！未来から人が来るなんてことあり得ないだろ！未来ではタイムマシンなんて空想の産物が完成したって言うのかよ！」

「はい。完成しました」

しかし、俺の混乱から出た叫びがあっさりと肯定されて、更に混乱が増し、逆に思考が停止する。

「今から二十八年後にある科学者が時間を遡るための理論と機器を完成させました。そして、初めての時間逆行を成功させ、その約三年後に『調整者^{リバーサー}』の存在が初めて確認されました」

まるでそれが既に起こってしまった事実のように語る彼女。まるで彼女が……………

「そして、私はその更に六年後の未来から時間を遡ってきた『時間^{タイム}逆流^{ギョウライ}存在』です」

俺は呆然とその言葉を聞き、彼女は俺のその様子をジッと真剣に見つめ待っている。

「し、証拠は？あんたが未来から来たっていう証拠はあるのかよ！」「そう仰ると思っていました。そう簡単に自分の常識を覆すことを認められませんよね。証拠は色々ありますが、そうですね……………。廻さん、あなた、傷の直りが異常に速いと思いませんか？治療する前は肋骨に罫が入っていたんですが、今ではそこまで痛まないでしょう？」

確かに、脇腹はやや痛むが動きに支障が出るほどではない。

「気絶している間に治療用のナノマシンを投与しました。ナノマシン自体が完成したのは今から十五年後ですが、廻さんに投与したの

は三十七年後の最新ナノマシンの中でも最高級のものです。明日には痛みも感じなくなっていると思います」

「き、傷がたいしたことなかっただけかもしれないだろ」

「それなら、先程の『調整者』^{リバーサー}との戦闘時に見せた四次元空間技術や『葉切』、私が使っていた武装も未来の物なのですが……。言っても信じてくれそうにありませんので、一番説得力のあるものを見せましょう」

そう言うと、雨潟さんは右腕の袖を肩までまくる。

「何をする気だ？」

「見ていてください。右腕 ^{ライトアーム} ^{バージ} 点検」

言葉と同時に、晒されていた右腕の肌の表面に線が走り、内側からせりあがるように腕の中心から離れていき、線が走っていたところが境目となり、腕が分解されていく。

その内側から見えたのは、複雑に絡み合い無数に伸びているコードや機械、肌の断面の上部は肌のようにになっているが、下部は金属で出来ていた。

「改めて、自己紹介させていただきます。私の名前は雨潟 つむぎ。機種識別名称、特殊戦闘型汎用アンドロイド『つむぎ』と申します」

今日、何度目か分からない思考停止状態になりながら彼女、アンドロイド『つむぎ』の機械的な部分を晒している右腕をただただ呆

然と見ていた。

「もう、よろしいでしょうか？」

「あ、ああ」

ライトアーム セット
「右腕 着装」

分解したときの巻き戻しのように元の状態へと戻っていく。

戻りきった右腕はどう見ても人工的な物には見えなく、今の出来事が夢だったのではないかと思ってしまう。

「……今日はこれ以上、話すのは止めて、残りの話は明日にしましょう。『調整者』リバーサーに襲われたり、こんな話を聞かされたりで、これ以上はあなたの頭に入っていないと思いますから」

雨漣さんは俺の様子を伺い、そう言葉を発した。

「ですが、最後に私の目的だけは告げさせていただきます」
「目的？」

そうだ。彼女はわざわざ時間を遡り、俺に何か用があるようなことを言っていた。一体、それは何なのか、あまりに大きな現実味を伴わない話に俺は何の関係があるんだ。

「私の目的は『尾形 廻の命を護る事』。……歴史が正しく進めば、あなたは明後日、死亡します。それを阻止し、歴史を歪めるために私はこの時代にやってきました」

「――以上が本日の出来事です」

『リバーサー 調整者』が動き出した、か』

「原因は恐らく、私が彼に接触したことだと思われます」

『だろうな。今日、廻を殺すのはあっちとしても望むところじゃないだろう。お前の妨害にあい、歴史が狂うことを避けるために、その時がくるまで監禁して、頃合をみて逃がし、予定されていた場所で殺害、つてとこだろ。となると、あちらさんはお前のスペックのある程度把握しているとみるべきか？』

廻が部屋に戻り、夜も更けた深夜、灯りが消えた暗いつむぎの部屋で話し声が響いていた。

「私のスペックの把握はしていません。私のスペックを把握しているとしたら、今日の『リバーサー 調整者』は弱すぎます。それならば、私のスペックを把握するための様子見ではないでしょうか」

『しかし、報告だと武装は『葉切』程度しか使っていない。これだと明日、もう一度、襲撃があるぞ』

現在、部屋の中の光源はつむぎの目の前にある画面からの光のみになっている。

『分かっていると思うが、明日は廻に張り付いている。死亡予定日じゃないとはいえ、『リバーサー 調整者』が動き出した以上、油断は出来ない。』

まあ、『処置』も施したから滅多のことでは廻を殺せないと思うがな、念のためだ』

「了解。報告どおり、『隠れ家^{ラボ}」の設営も本日行いましたので問題ありません」

画面は掌に収まるほどの小さな機械から空間に投影されている。これも未来から持ち込んだ物の一つだ。

「明日、残りの説明を行います、何か伏せておくべき事柄はありますか？」

『前もって言うておいたとおりだ。私のことは出来る限り伏せる。』

「了解。———そういえば、確か明日は『未来ノ学園』にあの方が編入してくるはずですが、彼と接触するのを妨害したほうがよろしいでしょうか？」

『……いや、妨害する必要はない。あれと廻が会うのも歴史の一部だ。下手に干渉して『調整者^{リバーサー}』を必要以上に刺激しないほうがいい。』

投影された画面には会話の相手である人物と相手がいる場所、機材や配線が乱雑している部屋が映っている。

『だが、お前は間違ってもあれと接触するなよ。万が一にもお前のことがバレたら干渉どころの話ではなくなる』

「解っています。私のことがバレたらどれだけの規模の『調整者^{リバーサー}』が送り込まれてくるか全く予想が付きませんから」

画面の向こう側でつむぎと会話しているのは、真つ白な髪をボサボサにしたまま後ろに長く伸ばし、目つきが悪く、目の下に隈を作った女性。身嗜みに気を使っているとは思えないのだが、それでも元の素材がよく、なおかつ美しさが損なわれてない。

『ともかく、頼むぞ。廻を死なせるな。そのためにお前を創って、危ない橋を渡ったんだ』

「了解。必ず私の使命を達成します、博士」

その言葉を最後に画面が消え、部屋は暗闇に閉ざされた。

承 1

俺が歩いていく先、人がどんどん避けて通路の端によっていく。

朝になって、学校に登校しているときから、街の中でもそうだったし、学校に着いてからは通路がそんなに広くない分、俺との距離が近くなってしまい怯えが大きくなる。

避けられたりするのはいつものことなのだが、今日はそれに輪をかけて、恐れられ、距離をとられている。

「・・・・・・・・」

それというのも、俺が今日はピリピリとした空気を纏っているからに他ならない。ただでさえ、目つきが悪い俺が剣呑な雰囲気振りまいていたら自然とそうなる。

じゃあ、何で俺がこんな状態かと言えば、当然、昨日聞かされた海潟さんの話が原因に他ならない。

「ちっ」

俺がそのことを思い返し、舌打ちをすれば周りの生徒は更に怯えて距離をとる。

その様子を気にする余裕も無く、足を進める。

「——歴史が正しく進めば、あなたは明後日、死亡します。——」

—」

普通ならただの戯言として聞き流すのだが、それを聞かせたのが未来から来たと言う人物、いや、アンドロイドであり、それを証明するようなあり得ない技術を見せられた直後のことなのだからただの戯言と聞き流すことが出来ない。

仮に、仮にだ。もしも、彼女の言っていることが事実なら、

俺は明日、死ぬ運命にある。

「——」

そう考えてしまうと、途方もない恐怖に襲われる。

ただの戯言と誤魔化すことが出来ないことで、常に恐怖が俺をさいなみ、昨日は寝られなかった——、ということはなかった。

自分の部屋に戻りしばらくすると猛烈な眠気に襲われ、そのまま眠気に逆らえずに見事に朝まで快眠してしまった。

恐らく、雨瀉さんが何かしらしたのだろう。彼女が持つ未来技術ならそれぐらい出来そうだ。

そのことに関して問い詰めるためと昨日の話を聞くために、起き

てからもう一度、隣にある彼女の部屋を訪ねたのだが

「とりあえず、学校に行ってください」

「は………？何言つてんだよ？あんたの言うことが確かなら、俺の命が狙われてんだろ？それなのに学校なんか行つてられるかよ」

「廻さんの不安も最もですが、学校には行ってください。それに昨日、少しだけ言いましたが、『調整者^{リバーサー}』の出現する時間帯は分かっています。彼らが現れるのは夕暮れ時から夜まで、朝と昼に現れることはないので安心してください」

「けどな！」

「それに万が一に備え、私も廻さんの護衛につきますので大丈夫です。廻さんにご迷惑がかからないようにするために隠れながらの護衛ですが」

その後も俺は食い下がったが、彼女は全く折れる雰囲気を見せず、押し切られてしまったため、彼女に言われるがまま登校することになった。

しかし、そう簡単に安心できるわけもなく、警戒したり、ストレスなどが重なり、剣呑な空気を振りまく結果になっている。

ガラガラ。

教室に辿り着き、ドアを開けると一瞬、注目が集まり、すぐに皆が視線を逸らした。

荒々しく、窓際の一番後ろの席に座ると俺の雰囲気がいつにも増して悪いことをクラスメイト達が察したのか、こちらをちらちらと

気にしながら、話をしている。

「あ、兄貴？どうしたんですか？」

そんな中、話しかけてきたのは俺の前の席に座る男にしては低い身長に、丸眼鏡と没個性的な顔立ちをして、制服を纏ったクラスメイト、六車^{むくるま} 徹也^{てつや}だ。

徹也と知り合ったきっかけは、街中を歩いているときに、人通りの少ない場所で三バ力が徹也に絡んでいる現場に遭遇し、こちらに気付くや否や、俺に絡んできた三バ力を叩きのめしたところ、何故か俺を兄貴と呼び、慕うようになった。

ちなみに、クラスメイトだと気付いたのは、その翌日、学校に登校し、俺にあいつが近寄ってきたときだった。

「……………別に何でもねえよ」

「それにしてもだか雰囲気か」

「何でもないって言ってたんだろ」

「そ、そうみたいです」

俺が一睨みすると徹也は追求するのを諦めた。

「そ、そうだ！兄貴、知ってますか？今日、編入生が来るらしいですよ」

「編入生？この時期にか？」

「そうです。それも僕らと同じ、一年生らしいです」

六月下旬である今、一年生に編入とは随分、おかしい話だと思う。普通なら俺たちと一緒に入学しているはずだろう。しかも、今日は

月曜日ならまだしも、金曜日であり、明日と明後日は学校は休みだ。

「これは噂なんですけど、編入生は女子で、かなり可愛いみたいです。職員室に編入生らしき女子を見かけた人の証言ですけど」

「まあ、可愛かるうとなんだろぅと俺には関係ない話だろぅけどな」
「兄貴」

やれやれといった感じで徹夜が首を振る。

「何だ？」

「今の言葉はフラグですよ」

「フラグ？」

「兄貴、そっち方面の知識はないんですね」

何のことが聞こうとしたとき、

「はい。みんなー、席についてねー」

妙に間延びした声が教室の前の方のドアが開くと同時に響いてきて、クラスメイト達が自分の席に戻っていく。

「みんな席に着いたかなー？」

言いながら、クラスを見渡している女性が俺ら１－Ｆのクラスの担任、しぐく四国 まろこ真知子だ。

ウェーブのかかった茶色いロングヘアーに、細目、高めの身長で、ある体を落着いた色の私服で包み、足首まで伸びる薄い桃色フレアスカートも彼女の雰囲気にあっている。まさしく、優しいお姉さんという言葉がピッタリ合う女性だ。

「今日は、みんなに嬉しいお知らせがありまーす。知ってる子もいると思いますがー、このクラスに今日から新しいお友達が増えまーす。拍手ー。パチパチパチー」

四国先生の宣言でクラスにざわめきが広がる。

ついでに、徹夜が「さすが、兄貴」と、わけの分からないことを呟いていた。

「先生。編入生は男ですか？女ですか？」

「可愛い女の子ですよー」

一人の男子生徒の問いに四国先生が答えると、男子のテンションが上がっていく。

「ではー、今から呼ぶけど、みんな温かく拍手で迎えて上げてねー」

「ーはーい」

クラスメイト達が元気よく返事をする。

「じゃあ、どうぞー。入ってきてー」

四国先生がドアに向かって呼びかけると、自然とクラスメイト達の視線がドアに集まる。

俺もどんな奴が来るのか気になり、ドアに目をやると、僅かにドアが開き、何か球体の物が複数投げ込まれた。

何だ、と思うよりも早く、それらが突然、破裂した。

「――っ」

俺は破裂音に反応して思わず立ち上がり、身構えてしまった。

いきなり、爆発物を投げ込み、攻撃（？）を仕掛けてきたのだから、俺の命を狙った奴等がここに来たのかと過剰に反応してしまったのはしょうがないことだろう。

爆発物は爆竹のような音を出しながら様々な色の煙を発生させ、教室内に煙を充満させる。

クラスメイトは煙で咳き込みながら、混乱している。

煙にまぎれて攻撃を仕掛けてくるつもりかと、煙を逃がすために窓を開けて、身構えていると、他にも誰かが窓を開けたようですぐに煙が晴れていく。

煙が晴れていくと先程まで誰もいなかった先生の隣に一人の女性との姿があった。

「ちゅーもーくっ！」

その生徒が声を張り上げると、クラス中の視線がその生徒に集まる。

「ミステイリーネ・アンミリス！今日から皆と一緒にクラスだよ！ミステイのことはミスチーとか、ミステイとか好きに呼んでいいからね！よろしくー！」

腰に手を当てて、胸を張り、金髪をツインテールにして、こつこつとゴーグルを目に付けている女生徒が高らかに叫んでいた。

一瞬、沈黙がおりたが、

「……うおお——！！！！」

男子生徒達の歓声が轟いた。

アンリミズは間違いなく、美少女と呼べる美しさを備えており、今の挨拶の仕方からしてかなり、人懐っこい感じである。

それがいたく男子生徒の心を捉えたらしい。

「はいはい！みんな、静かにー。静かにしてねー」

四国先生がみんなに呼びかけて、少しずつ鎮静化していった。

その間に、俺も席に座る。

「アンリミズさん。あんなことをしたらだめですよー」

「大丈夫ですよ。有害性のなく、すぐに散る特別製でしたから」

「それでも、めー、です」

「………はい」

男子生徒が静まると、奇行に走っていたアンリミズを嗜めた。

若干、不満そうではあるが、四国先生の言葉を受け入れ、頷きながら、ゴーグルを頭へと押し上げた。

「ではー、気を取り直して、彼女が新しいお友達になるミステイリ
ーネ・アンリミズちゃんです。彼女はお家の事情でこの学園に来
るのが遅くなっちゃいましたけどー、みんな、仲良くしてあげてね
ー。はい、拍手ー。パチパチパチー」

みんなが拍手をして、アンリミズを迎え入れる。

「それじゃあー、アンリミズさんの席は」

「先生」

「何ですかー？」

「ミステイは窓際の一番後ろの席がいいです！」

それまでの和やかな雰囲気なくなり、気まずそうな空気へと早
変わりする。

窓際の一番後ろの席とは俺の席のだ。

加えて、今日の俺はいつもより剣呑な空気を振りまいていた。

クラスメイト達にしたら、何故いきなり地雷を踏みに行く、とい
う気持ちなのだろう。

「えつとー、尾形君、いいかなー？」

怖々とクラスメイトの視線が俺に集まる。

「……………別に構いません」

「ありがとー。じゃあ、尾形君は席を横にずらしてねー。アンリミ
ズさんの席を誰か運んでくれるー？」

別の位置に用意されていた机と椅子を近くに座っていた男子生徒

が率先して運んできた。

俺も席を横に移動させて、場所を空ける。

「どいてくれてありがとつ。これからよろしくね！さっきも言ったけど、ミステイはミステイリーネ・アンリミズ。ミスチーとか、ミステイとか好きに呼んでいいよ」

「尾形 廻だ」

隣の席に座ったアンリミズが笑顔で握手を求めてくるが、俺は名前だけ言って握手はしなかった。

「……………えっと、よろしくね？」

「……………」

「……………よ・ろ・し・く・ね？」

「……………よろしく」

言葉だけ返して、握手には応じない。

アンリミズは俯いたかと思うと、プルプル震え始め、

「うなー！違うでしょう！」

顔を上げたかと思うと、いきなり奇声をあげて怒鳴りだす。

「美少女が、握手を求めているんだよ！？そこは爽やかに笑顔で挨拶を返して握手でしょう！」

……………めんどくさい奴だな。

「あー！今、めんどくさい奴だとか思ったでしょう！」
「思ってたない」

「嘘だー！絶対に、めんどくさい奴だって思ったね！」

「じゃあ、それでいい」

「投げやりだよ！それにミスティはめんどくさい奴じゃないよ！」

「アンリミズさん。静かにしてねー」

「にゅっ………。すみません」

四国先生が注意すると、アンリミズも騒ぎすぎたことに気付いたのか、声量を下げる。

それを確認した四国先生は他の連絡事項を話し始める。

「わるきち」

「………」

「無視しないでよっ、わるきち」

「………。まさかとは思うが、俺のことか？」

「君に決まってるじゃん。君以外の誰がわるきちなんだい？悪っぽくて、名前の最後もわるだからわるきち。どう？いいあだ名でしょ」

何故、そんな自信満々なのか分からないが、ない胸を張って自信満々な様子の彼女に残念な人を見るような憐れみの視線を送っている。

「な、なに？」

「………」

「何か文句あるなら言ってみなさいよ」

「………」

「………。うっ」

何というか、いちいちリアクションがガキっぽいな。

そんなことを思いながら、アンリミズを見てみると

「さすが、兄貴。美少女の扱い方も一味違う」

アンリミズの前の席になった徹夜が後ろを振り返りながら、言葉を発してきた。

「僕は六車 徹也。よろしく、アンリミズさん」

「ミステイだよ。よろしくね」

アンリミズと徹也がにこやかに握手をかわす。

そのまま、アンリミズが握ったままの徹夜の手をブンブンと振り回す。

「ん〜っ。これだよ、これ！やっぱり、編入してきた美少女が近くにきたんだから、こういう風に友好的に接してくれるものだよ。あと、アンリミズじゃなくて、ミステイって呼んで」

「え、えっと」

手を振り回されたままの徹也が助けを求めて俺へと視線を送ってきたので、アンリミズの頭にチョップを振り下ろす。

「うなっ」

「静かにしろ」

「ぶ、ぶった！？さ、さつきから君は失礼すぎるよね！」

「アンリミズさん、静かにしてくださいねー」

「は、はいっ！」

にこやかだが、威圧感たっぷりに四国先生が再度、注意をするとアンリミズは背筋を伸ばし、焦りながら返事をした。

一見、ただの優しそうな女性である四国先生だが、底知れぬ迫力を用いて、生徒達を静めることができるつわものだったりする。

アンリミズも四国先生の迫力に萎縮し、大人しく先生の話に耳を傾け始めた。

承 2

「——であるからして、ここではこの法則が適用され、法則から——」

朝のアンリミズの登場後、休み時間の度に彼女の周りには生徒が集まり、彼女を質問攻めしていたが、講義中はよほど朝の四国先生の注意が効いたのか、アンリミズは静かなものだった。

現在は四限の物理の講義中。

俺がいる『未来ノ学園』の高等部は一日、六十分×六の講義で構成され、四限と五限の間に昼飯を食べるための昼休みがある。

「ねえ」

小声で隣から話しかけるが、ちらりと目線を向け、すぐに視線を前に戻す。

「ねえってば」

再度呼びかけられ、脇をシャーペンで小突かれる。

昨日、殴られた箇所にかかったため、思わずシャーペンを強く握り締めてしまう。

「………何だよ」

「えっと」

反応してしまったので、会話に応えることにしたのだが、話しかけてきたアンリミズは戸惑った様子で俺の顔と掴まれたシャープペンを交互に見ている。

シャープペンを強く握り締めたままだったことに気付き手を放す。

「で、何だ？」

「いや、ちよつと話でもしようかな、なんて」

「講義中だぞ」

「……顔に似合わず真面目だよね、わるきち」

「知り合いにはよく言われる」

やはり目つき悪いのは不真面目だと思われるのが一般的らしい。

「わるきち、休み時間になるとすぐどっか行っちゃって全然話せないから講義中じゃないと話せないじゃん」

「俺がいると他の奴等が寄ってこないだろ」

休み時間になると近づきたいけど近づけない、といった感じの視線をクラスメイト達がちらちらと俺に向けてくるので、俺が席を離れると一斉にアンリミズの周りにクラスメイト達が集まっていた。

「みんな、怖がつてるっていうより、近寄りがたいみたいだね。てつつんを助けたのもみんな知ってるからそこまで悪い人じゃないのかな、と思ってもやっぱり目つきが怖いし、雰囲気も刺々しいから」

「助けたんじゃないくて、巻き込まれたんだけどな。ところで、てつつんっていうのは徹也のことだよな？」

「そつだよ。あだ名は仲良くなるための第一歩だからね」

いいあだ名でしょ、と言わんばかりにアンリミズがない胸を張る。

「ともかく、席も譲ってもらったし、隣同士だし、これから仲良くしていきたいなと思って」

「講義聞かなくていいのか？」

「全然、大丈夫。理系科目は講義を聞かなくても困らないし」

「……俺は困るんだが」

「じゃあ、そのときはミステイが教えてあげるよ」

「人に教えられるほど頭良いのか？」

「まあ、そうね。この学園にいる三ツ傘の娘さんぐらいにはいいんじゃないかな」

俺はその言葉に驚いた。

三ツ傘の娘さん、というのは『三ツ傘工業』の社長の一人娘である先輩のことに違いはないだろう。

先輩は『三ツ傘工業』を発展へと導いた天才だ。その天才ぶりは尋常ではない。

小学生になる前には既に院生以上の知識を有し、現在までに画期的な金属精製法の提案に始まり、新しい合金の開発、論文の発表、有名な賞の受賞など絵に描いたような現実離れした実績を残している。

以前に、少しだけ書きかけの論文を見せてもらったのだが、何が書いてあるのだから俺にはさっぱり理解できなかった。

「冗談でもその先輩と同じくらいに頭がいいとは口にするものはこの『未来ノ市』には存在しない。

「あの人は本当に半端なく頭がいいんだぞ？」
「知ってるよ。その上で言ってるの」

思わずマジマジとアンリミズを見つめてしまつ。

「……………本当だよ」

「まあ、そのうちわかるか」

嘘でも本当でも次のテストでわかるだろう。

「んゝ。じゃあ、これならどう？」

アンリミズが自分のポケットに手をつ込み中身を取り出すと、俺に見せるように掌を広げる。

「これが何だ？」

「ほら、朝の煙のやつがあつたじゃん？あれのちょっと違う種類のやつ」

手の上にはカラフルな玉がのっている。

「だから、それが何だっていうんだ？」

「まあ、パツと見た感じはわかりにくいだろうね。一見、ただの煙玉に見えるけど、これ、結構な威力があるへ、じゃなくて、防犯グッズなんだよ」

「だから、それが？」

「実はこれ、ミステイが創ったんだ」

これはつまり、この防犯グッズを創った自分が先輩並に賢いとい

うことを示したいのか。

「そう言われても、その凄さがわからねえって」

「じゃあ、お近づきの印も兼ねて一つあげる」

そう言いながら、黄色い玉を摘んで俺に握らせる。

「色ごとに種類が違っただけど、一番安全なやつをあげるよ。聞いた話だとたびたび喧嘩をするみたいだから、そのときに効果を試してみて。使い方はただ投げてぶつけるだけ」

つき返そうかと思ったが、今の俺は昨日のような連中に襲われる可能性が高いことを思い出して、何もないより何か持っていたほうがいいと思い、素直に受け取り、ポケットに入れた。

それと同時に授業に集中したり、何かをしていることで誤魔化していた俺の身に迫る危機や命の期限が強く思い出されてしまった。

「それを使ってくれば、ミステイの凄さをちよつとはわかってもらえると思うよ」

「………ああ」

「どうかした？」

「何でもない」

一度、強く思い出してしまうとどんどん思考が深みに嵌っていつてしまい頭の中を不安や恐怖がしめるようになってきた。

「………悪い。席外すわ」

「え？」

俺が席を立つと、教師とクラスメイトの視線が俺に集まる。

「どうした、尾形」

「すみません。少し気分が悪いんで保健室に行ってきます」

「……………そうか」

教師は訝しげに俺を見ていたが、特に追及もしなかった。

教室を出た俺は保健室には行かず、理科室などがある特別教室棟の屋上にきていた。

教室棟や部活棟の屋上と比べて、ここは人が来ることがほとんどなく穴場の一つになっている。

特に今は講義中ということもあって、ここには誰もいない。

「はあ」

俺は屋上にきて適当な日陰を見つけてそこで寝転がっていた。

さっきまでは授業に集中したりすることで誤魔化していたが、思いつくとどんどん思考がネガティブになってしまう。

「サボりですか？」

声がしたのでそちらをしてみるが

「——っ」

そこには誰もいないという異常事態に飛び跳ねて体を起こし、警戒心を最高にまで高める。

「私です。安心してください」

風景が揺らいだかと思うと、徐々に輪郭がはっきりとして、雨潟さんが現れた。

その現象に驚いたが、彼女に関しては深く考えてもが仕方ないかと思いながら、警戒を解き、胡坐をかいて座りなおした。

「隣、いいですか？」

「ああ」

今日も白一色の服に身を包んでいる彼女は俺の隣に腰を下ろす。

白一色の服なのに汚れを気にしないのだろうかとどうでもいいことを考えてしまう。

「何でここにいるんだ？」

「言ったじゃありませんか、あなたの護衛についていると」

「ああ、そういえば言ってたな」

朝の会話を思い出す。

「廻さんこそこんなところでサボリですか？」

「……………勉強してる気分じゃなくなったんだよ」

俺は雨瀉さんに向き直った。

「昨日の話を続きをしてくれ。気になってしょうがないし、正直、不安でどうしようもないんだ」
「いいですよ」

あっさりと肯定されて拍子抜けしてしまった。

「……………いいのか？」

「はい」

「……………朝は学園に行けて断ったわりにはすんなりと頷くんだな」

「必要だったのは学園に行ってもらうことでしたから。今は特に断るような理由ありませんし」

「学園に来ることに意味があったのか？」

俺には意味があるとは思えないんだが、

「はい。昨日の話の続きになりますが、『調整者^{リバーサー}』が正しい歴史としているものは基本的に大筋が定まっているもので、細かいところまで明確になっていません。ただの人、一人が多少ずれた行動をしたところで歴史に大きな影響は与えられませんから」

「それだったら俺が学校に来る必要性が感じられないんだが」

「基本的には、ということですから当然、例外がいます」

「俺がその例外ってことか？」

「いえ、廻さんはその例外ではありません。しかし、『調整者^{リバーサー}』が動き出した以上、廻さんにはあまり想定外の行動をとって欲しくないのは確かですが」

「だったら、どういうことだ？」

「例外なのは、ミステイリーネ・アンリミズ様。彼女のことです」
「アンリミズが？」

いきなり今日、編入してきたアンリミズの名前が出てきたことに驚き、戸惑った。

「はい。先程も言ったようにただの人、一人が多少ずれた行動をしたところで歴史にたいした影響は出ません。逆を言えば、ただの人ではない、特別な人がずれた行動をするというのは歴史に大きな影響を与える可能性があるということです」

「その特別な人にあたるのが、アンリミズってことか」

「はい。彼女が今日、この学園に編入してくることは定まった事柄でした。そこで出会うはずでなかったあなたがいないというのは歴史に極僅かですが、ずれが生じてしまいます」

「だけど、極僅かだろ？そこまで気にしなくてもいいんじゃないか？」

「普通ならそうなのですが、『調整者^{リバーサー}』があなたの周りで動き、『イレギュラー時間逆行者』である私もこの時代にきてあなたに接触している以上、少しでも『調整者^{リバーサー}』を刺激はしたくはないんです」
「なるほど」

確かに下手に刺激して奴らの動きが活発になったら不味い。

「そついや、ちょっとした疑問なんだが、アンリミズが何で特別扱いなんだ？別にたいして変わった人物に見えなかったが」

「彼女は特別の中でも重要度の高い人物です。廻さん、昨日、私の話を聞いてすぐには信じられませんでしたよね？それは何故ですか？」

「何故って、そりゃあ、タイムマシンなんて馬鹿げたものがあるな

んて思わなかったし、それに確かあんたがいた未来っていうのは今から五十年も経ってないんだろ？そんな短い間にそこまで技術が進歩するわけがないって考えが普通だろ」

百歩譲ってタイムマシンの存在は認めるとしても、それが今から五十年もしないうちに出来るわけがないというのは俺にもわかる。

「そうです。その考え方が普通です。実際、現在から遡り五十年前から現在までの技術発展のスピードで発展すれば、到底タイムマシンの開発は不可能です。しかし、現在から五年後、その不可能を可能にする人並み外れた天才達が台頭し始めます」

「人並み外れた天才……。先輩みたいな人か？」

心当たりとして、バイトの雇い主にして『三ツ傘工業』を發展させた先輩のことが思い浮かんだ。

「廻さんの周囲で、先輩と呼ばれる条件に該当する方ですと、三ツ傘 知恵様でしょうか？」

「やっぱり先輩もその天才達の一人なのか」

「はい。三ツ傘様は比較的初期から活動していた方の一人です。金属を扱う分野で名を馳せた方で新しい合金の開発では世界中を探しても右に出る方はおられません。私に使われている金属も全て三ツ傘様の物が使われています」

「何というか……、流石は先輩って感じだな」

あの先輩はやはり偉大な人だったらしい。

元々、少し変なところもあるが、賢く、優しい先輩だと尊敬していたので、その思いがさらに強くなった。

「未来では三ツ傘様のように各分野で突出した才能をもち、社会に大きな影響を与えた天才達を『変革の賢人^{ミイミル}』と呼んでいます。ミスティリーネ様もその一人です」

「ってことは、あいつも先輩と同じくらい頭がいいってことか。あいつは何の分野の天才なんだ？」

アンリミズの言っていたことが本当だったことにそう思っていないかったので内心、驚きながらも更に質問を重ねる

「ミスティリーネ様は兵器開発における天才です」

が、軽く聞いた質問に予想外の答えが返ってきて、思わず固まってしまう。

「彼女の創った兵器は従来の兵器とは一線を画し、現在から二十二年後に発生した第三次世界大戦では八割以上の兵器が彼女の設計、あるいは彼女が開発したものや理論を元に開発されたものであるというデータもあります。代表的な物として、携帯型レールガンに始まり、荷電粒子砲等の光学兵器、パワードスーツ、人体強化技術、反物質砲、無人戦闘機」

「ちょ、ちよつと待った！」

スラスラと物騒な単語をあげていく雨瀉さんの言葉を止め、眉間に指を当てて、思考をまとめる。

「まず、兵器っていうのは殺すためのあの兵器でいいんだよね？」

「はい」

信じたくないことをあっさり肯定されて、頭痛を感じるような錯覚を覚えながら、一番気になったことを聞く。

「他にも戦闘機とか物騒な単語があつたが、一番問題なのは、だ。・
・・・・第三次世界大戦が起きる、とか言つてなかったか？」
「言いましたよ」

とんでもない情報を知つてしまい、今度は目眩を感じてしまう。

「何で、あんたはそんな情報をさらつと出すんだよ」

「私にとつては現在、さほど重要な情報ではありませんから」

「重要じゃないって、戦争が起こるんだぞ!？」

「昨日も言いましたが、私の目的は『尾形 廻の命を護る事』です。
未来の大事事件より、目先の些細な問題のほうが優先度が高くなつて
います。衝撃的な情報を前に忘れてるかもしれませんが、あなたは
現在進行形で命を狙われ、歴史通りに進めば明日、死んでしまうん
ですよ?」

そう言われて、その事を思いだし、熱くなった思考に氷水をぶっ
かけられたかのように怒りが静まってい

「あなたは遠い未来のことよりも明日をまず乗り越えなければなら
ないということを忘れないでください」

「確かに、そうだろうけど・・・・。無視つてわけにはいかな
いだろ」

「私からすれば、優先順位の低い事柄です。廻さんが生き残つてい
て、戦争が近くなつたのなら対策は講じますが」

「戦争になれば大勢の命が失われるんだぞ!？何でそんな」

「お忘れかもしれませんが」

彼女は俺の叫びを遮るように言葉を被せてきて、俺の目を真っ直
ぐに見据える。

「私はアンドロイドです。廻さんを護るために作られ、廻さんを護るためにこの時代にきたアンドロイドです。外見上、そうは見えないかも知れませんが、私は機械なんです。情に訴えかけられても、プログラムされた事柄が優先されます。私にとってあなたの命が最優先で、その他は二の次なんです」

真っ直ぐ俺を見据える瞳は恐ろしく冷ややか、いや、冷ややかというより何も感じられない、無機質と言ったほうが正しいだろう。

その瞳が、その言葉が彼女がアンドロイドであるということを俺に改めて思い知らせる。

鳴り始めたチャイムを耳にしながらお互いに沈黙したまま見詰め合っていたが、ふと彼女はその目を笑みの形へと変える。

「それに、戦争とは言いましたが、第三次世界大戦で死亡した人達は過去の二度の大戦に比べて圧倒的に少ないうえに、民間人の死者はほぼいません」

「は？どういうことだ？」

「近代では平和や人権などが尊ばれてますのはわかりきっていることだと思いますが、それは未来においても同じ、むしろ、紛争地域も発展するに伴いその思想が広まっていきました。そんな中で民間人を巻き込んで、土地を荒らしながら兵器を使用するなんてことになったら、民衆の反発が起こることは誰が見ても明らかでした」

確かに平和な今の世の中で戦争なんか起こそうものなら民間人の反発は起こるだろう。

俺だって、戦争という言葉が聞かされただけであれだけの反応を示したんだ。実際に被害が出たらその危機に瀕するとわかった人々が猛抗議することはさけられないだろう。

「そこで、世界各国は戦争をゲームという形にすることにしたんです。簡単に言えば、軍人たちによる、危険かつ野蛮な戦争ゲームです。人は自分にその火の粉が振りかからなければ他人事という方が大多数ですから、この案が受け入れられ、軍人達にはゲーム中に死の危険があり、それを了承する書類を書いたものが参加しました。得られる報酬も破格でしたから辞退する軍人は少なかったそうです」
「確かに、それなら人死には少ないだろうが、場所の問題が解決してないだろう？」

「それも発展した技術が解決しました。さつき、私が姿を隠していた技術もその応用なのですが、空間に特殊な力場を加えることで空間の位相をずらして、現実だけど現実ではない亜空間『イメージナリススペース虚数空間』を作り出す空間技術によって戦場も確保できました」

「・・・・・・何だかそこまで来ると、科学って言うより魔法だよな」

「発展しすぎた科学は魔法と変わらない、なんていう名言もありますから、あながち間違いではないと思いますよ」

驚くより、呆れの感情のほうが強くなってしまっほどに未来の科学は飛びぬけていた。

「話が随分、脱線してしまいましたか、話を戻しますよ？ ミステリー・ネ様が特別だというのはご理解いただけましたね？」

「・・・・・・ああ」

戦争の話を打ち切られたことに不満を覚えたが、そちらが本題な

ので素直に頷くことにした。

「特に戦争というのは社会に対して大きな影響を与えます。勝った国と負けた国では立場が丸つきり変わってしまいますし、その後の発言権にまで影響を及ぼします」

「つまり、戦争で重要な兵器を開発することの天才であるアンリミズの重要性も必然的に上がってくるってことか？」

「その通りです。実際、彼女に接触しようとする『イレギュラー時間逆行存在』リバーサーに対する『調整者』の対応の仕方はかなり厳しいです。兵器製造を担っていただけあって多くの人にも恨みを買いがちである彼女の元にタイムマシンが開発されてから今まで、何人もの人間が利用、あるいは排除しようと近づいたみたいですが、全て排除されています」

何度かアンリミズの命が狙われたことがあるという事実に驚き、その脅威から彼女を護ったのが俺を襲った奴等だと思つと複雑な気持ちになる。

俺を護つてくれると言ってくれている彼女を複雑な気持ちのまま見ていて、ふと肝心なことを聞いていないことに気付いた。

「なあ、そういえば、何で雨瀉さん、いや、雨瀉さんを作った人か？その人は俺を護ろうとしてくれんだ？自分にもあいつらの手が迫る危険性があるっていうのに」

「それは――、」

言葉を途切れさせ、彼女はドアのほうを向いたかと思うとおもむろに立ち上がった。

「その話はまた後にしましょう」

「どうしたんだ？」

「人が来るみたいです。見つかると思面倒なのでまた隠れることにします」

そういえば、さつきチャイムがなっていたなと思っていると、彼女が一瞬だけ青い光を纏った後、その姿が蜃気楼のように揺らいでいき、空間に溶け込むように消えてしまった。

「……本当に魔法みたいだな」

その光景にそんな感想をもらしていると

「わるきちっ」

勢いよく開かれたドアのところに走ってきたらしく息を切らせたアンリミズが立っていた。

「どうした、アンリミズ？」

「え？あ、や、えっと」

走ってきたぐらいだから俺に何か用があるのかと思ったのだが、俺の顔を見ると何故か口ごもって視線を彷徨わせる。

俺は立ち上がったドアに向かって歩いていく。

「というか、よくここがわかったな。あんまり人はこないんだが」「あ、それはてっくんがたぶん、ここじゃないかって言ってたから」「徹也か。まあ、あいつなら俺のいるところはだいたい知ってるか」

俺を慕うあいつは割りと俺の傍にすることが多いので、俺が学校でよく使っている場所も知っている。

俺はアンリミズの前まで足を進めるとそこで足を止めた。

「で、俺に何の用だ？」

「えっと、その」

アンリミズは視線を俺と合わせないまま、迷った後に用件を切り出した。

「あの、ほら、何かミステイと話してるときに急に態度が刺々しくなって出て行ったじゃん？……何か、ミステイが気に障るようなことを言ったのかな、って、思ってた」

アンリミズは段々と声を弱くし、こちらを伺っている。

「もしそうだったら、謝らないといけないと思って……………」

正直、俺は少し驚いた。

再三、自分で言うのもあれだが、俺は顔つきが悪く、態度もいいとは言えない。

そんな相手に対して、初対面でありながらもここまで気を使うものだろうか？

それにさっき、雨潟さんからアンリミズが兵器開発の天才だと聞いたばかりであつたものだから、そんな人物がここまで気を使ったことに対しての驚きも強い。

「……………」

アンリミズは不安そうな顔で俺を見上げている。

俺はボーっと彼女を見ていたままだということに気付き、返事を返した。

「いや、別にお前のせいじゃない。少し嫌なことを思い出したただだ」

「でも、やっぱりミステイが思い出させちゃったんだよね。ゴメン」

そう言って頭を下げるアンリミズを見て、気を使いすぎじゃないかと思う。

「……いや、もしかして、さっきは兵器開発に関わる人間だからという理由でここまで気を使うことに驚いたが、むしろ、そのせいでここまで気を使っているのかもしれない。」

兵器というのは人を傷つけるものがほとんどであり、兵器を誰が一番必要としているかという点、それはやはり軍関係者だろう。

先輩と同じくらい頭がいいのなら、彼女くらいの歳なら既に兵器開発に関わっていても不思議ではない。

開発の中で軍関係者と関わったなら、その顔色を伺うということ覚えても不思議ではないし、それに、兵器を作ったことで自分が作ったものによって傷つく人々、その人達からの恨み言を言われたということもあるかもしれない。

あくまで俺の想像であり、事実かはわからないが、そうだとすれば他者が自分に向ける感情に対して人一倍敏感なのかもしれないし、

もつと穿った見方をすれば、あの人懐っこく、親しみやすいキャラクターも自分を護るための一つの手段なのかもしれない。

そう思うと何だか心なしかアンリミズが小さく見えた。

頭を軽く搔くと、アンリミズの脇を通り過ぎながら肩に手を置いた。

「あんま肩肘張りすぎんなよ」

「え？」

「適度に力抜かないと疲れちまうぜ」

そう言つて肩を叩くとそのまま階段を下りていく。

今日の昼は購買でパンでも買うかと思いつながら、踊り場を降りて、階段を進んでいると

「わるきちっ！」

「どわっ！」

後ろから体当たりをくらい、階段から落ちそうになった。

「何すんだよ！危ないだろうが！」

「ごめんねー」

体当たりをしてきたアンリミズは反省の色が感じられない声で後ろから俺の首にぶら下がりながら謝る。

「とりあえず、降りろ」

「ちよつとそこの下の階まで乗せてよ」

「つつたく」

残り十段もない階段をアンリミズをぶら下げながら下りると、アンリミズは俺の前に回りこんできた。

「わるきち」

「ん？」

「ありがとう」

「………謝ったり、礼を言ったりわけの分からん奴だな」
「ふふふ」

俺が視線を逸らしながらそう言つと、アンリミズはクスクスと笑出す。

「そうだ。わるきち、お昼一緒に食べない？ クラスの人に誘われてるんだけど、どうかな？」

「遠慮しとく。俺が行ったところで空気が悪くなるだけだし、騒がしいのはあんまり好きじゃない」

「そう。じゃあ、仕方ないね。じゃっ、また午後の講義でね」
「ああ」

そう言つて去っていくアンリミズの背中を見送る。

何だか騒がしいのに懷かれてようだが………、まあ、あいつが礼を言つたときみたいにいい笑顔で笑えるなら別にいいか。

「あ、そうだ」

アンリミズが振り返る。

「ミステイのことはアンリミズじゃなくて、ミステイって呼んでよね」

そう言い残して今度こそ行ってしまったアンリミズを見送ると、購買に向かって歩き出した。

承 3

「はい。——すみません。じゃあ、失礼します」

放課後になって、俺は先輩に雇われているのは別のバイトの雇ってくれている人に電話をかけていた。

「終わりましたか？」

「ああ。つつうか、そういうことは先に言っといってくれよ」

「いえ、廻さんも既に承知していることかと思っていました」

午後になってからアンリミズは俺と話そうとしていたようだが、休み時間はクラスメイト達に阻まれ、五限は男女別で体育、六限は四国先生が担当する古典だったため、俺に話しかけることができず、帰り際には学園内を案内しようとするクラスメイト達に連れ去られていつてしまった。

俺は今日は先輩とのバイトとは別のバイトがあつたので、そちらに行こうと学園を出て少ししたところで雨潟さんに声をかけられた。

「狙われている、ということとは昨日の話で理解されていると思ったので、まさか、襲われる危険性のある時間帯にアルバイトに行こうとするとは思ってもいませんでした」

「わるかったな。話が衝撃的過ぎてすっかり抜け落ちてたんだよ」

携帯を鞆に突っ込み、止めていた足を動かし始め、雨潟さんも俺に続いて歩き出した。

「昨日の奴等、また来るんだよな」

「恐らく。……しかし、本来なら『調整者^{リバーサー}』が昨日、あなたに接触することはないと踏んでいたのですが」

「そうなのか？」

「はい。あの時点ではまだ廻さんは歴史に準じた行動をとっていましたが彼らが接触する理由がありませんから」

「そっぴやそっぴやだな」

むしろ、あいつらに襲われたから俺はこんな事態に巻き込まれたんだ。あいつらの行動原理からするとおかしい。

「理由があるとすれば、前日にその私と接触したことぐらいですから、それが原因だと判断しましたが」

「その前日ってただ挨拶しただけじゃねえか。だけど………、確かにそれぐらいしか理由がないか」

「ともあれ、昨日襲ってきた以上、今日も襲ってくる可能性があると考えられます」

「まあ、そう考えるのが妥当だよな」

「それに襲ってくるとなれば昨日、私が撃退しましたから昨日よりも戦力を増してくるでしょう」

「げ、マジかよ……。あんなのが何人も来るのか」

そのことを想像すると気が重くなってくる。

俺が戦うわけじゃないが、大勢に命を狙われるというのは結構きつい。

「何人、という言い方は正しくないと思います」

「いや、人型なんだからあってるだろ」

「いえ、そういうわけじゃなくて、恐らく、増援の多くが非人型であると推測されますから、何匹、何体という単位が正しいでしょう」

「非人型？人以外ってことか？」

「はい。昨日も言いましたが、人型以外の個体も確認されています。そして、戦闘力は非人型のほうが優れていることも確認されていますから、戦力として送ってくるならそちらのはずです」

「……あれより強いのが大量に送られてくるのかよ」

どんな姿の敵が来るのかわからないが、昨日のやつより強いやつが来るというのは俺の不安を増大させる。

「安心してください、廻さん。彼らがいくら襲ってこようと私が迎撃しますから。廻さんには指一本触れさせません」

「けど、そううまくいくのか？」

「大丈夫です。元々、廻さんを護ることになれば『調整者』^{リバーサー}と戦うことは想定されていましたから、私は彼らとの戦闘でも十分に勝てるように設計されています」

「……確かに昨日のあの動きは凄かったが」

俺は彼女の全身を視界に収める。

彼女の体つきはどう見ても、ただの女性のように腕や足は細長く、母性の象徴である胸は豊かだが、全体的に華奢な体つきだ。

昨日の戦闘を見ていなければ、彼女があいつらを撃退できるなど絶対に信じてない。

「確認されている彼らのデータをもとに私と戦闘した場合の結果をシミュレーションしたところ、千体の個体に襲われても九十八%以上の確率で被ダメージを2%以下に抑えながら勝利できるという結果が出ています」

「被ダメージを2%以下って、——ほぼ無傷じゃねえか！」

千体の敵を相手にそれだけのダメージしか受けないとすると圧倒的な戦力差があるということが俺にも理解できる。

「それでも私は三十七年後でも最新鋭の機体であり、博士が研究に研究を重ね、ほぼ確実に廻さんを護るという目的を達成できるとできる明言した対『調整者^{リバーサー}』用の機体でもありますから、その程度の戦果は当然のことです」

「……………そうは見えないけどな」

見た目はどう見ても令嬢風の黒髪美女でしかない。

「この見た目は廻さんを護衛するにあたって、違和感無く社会に溶け込めるような容姿でなければならぬので人型として設計されたんです」

「ん？それだったら女である必要はないんじゃないか？むしろ、男のほうが俺は遠慮なく付き合えると思うんだが」

「いえ、護衛対象、つまり、廻さんが男性なので異性である女性型のほうが廻さんも無下には扱わないだろうという博士の判断です。それにいかにも戦いなれている風貌な男性より優しげな女性のほうが警戒心無く受け入れられるじゃないですか」

「……………確かにな」

いかにも戦いなれている風貌の男性が近くにいたら自分がどのような反応をするかを想像し、確かに近づきがたいと思った。

「そういえば、昼に聞きそびれたが、その博士は何で俺を護ろうとしてくれんだ？」

俺の命を護ってくれるのはありがたいが、理由というのはどうし

ても気にかかる。

「博士が言うには、あなたの死が博士の原動力であり、大きな傷だからだそうです」

「俺の死が…….?」

「はい。あなたの死が今でも博士の記憶に残り、夢にまで出てくるそうです。昔の博士はその死を感じる夢に怯え、その悪夢を振り払うためにまず、己の身を護ってくれる存在を作り上げることに腐心しました。やがて、それは自律行動を行うロボットへと変わり、アンドロイドなどの高度なものへと進化していきました。しかし、どれだけ強力で頼もしいアンドロイドところを作ったところでその悪夢が振り払われることはありませんでした。そんなあるときです。タイムマシンが完成されたのは。博士はそのとき天啓を受けたかのように、廻さんを助けることが出来る、助けたいと思ったそうです」

それは、ずっと俺の死に何か後悔のようなものを感じていたということだろうか。

何度も何度も繰り返し夢に出てくるほどに強烈な後悔を。

「博士はすぐにタイムマシンを利用したいと名乗り出たそうですが、未だに確かなデータが取れていない技術、当時、すでに『変革の賢人』の一人に名を連ねていた博士を失う危険を犯せない上にまずその技術によって得られる恩恵をそうそう分け与えたくない者達はその簡単に博士に許可を出すことはなく、博士は許可が出るのを待つしかありませんでした。そして、もうすぐ博士に許可が出ようとしていたこのことです、『調整者^{リバーサー}』が現れたのは」

そういえば、奴等はそれまで見つけられていなかったんだよな。

「当然、博士に出ようとしていた許可は撤回。彼らのことを探るための調査隊が結成され、彼らの生態が調査されました。少なくとも死者をだしながらもその結果、彼らの行動原理、『歴史を正しく進めようとする』ということが突き止められて以来、元からあった歴史家達から批判も更に勢いづき、タイムマシン技術への取り組み規模は縮小されていきました」

凄い技術なんだが、利用するのが難しいと判断されただろうな

「そんな中でも博士は諦めず、『調整者』^{リバーサー}にも対処できるものの開発を始め、研究、開発、実験を重ねた結果、私を創り出すことに成功し、私を送り出す許可を取り、私をこの時代に送り込みました」

「そこまでするほど、俺の死が重かったのか……………」

誰だか知らないがその博士という人物に重荷を背負わせてしまったことに罪悪感を感じてしまう。

「死ねないな……………。俺だけじゃなく、その博士のためにも」
「はい。私も全力を尽くさせていただきます」

今まで、俺の命が危ないということで、混乱や恐怖で思考が纏まらず、漠然と死に対する恐怖感のみがあったが、他人の人生に暗い影を落としてしまうということを知り、死にたくない、死ぬわけにはいかないという想いが強くなり、このとき『生き続ける』という決意が固まった。

「ところで、明日、何とか生き残ったとしてその後はどうするんだ？その後も奴等が俺を狙ってくるかもしれないだろ？」

決意を固めるとその先のことも考えられるようになり、ふと疑問に思ったことを尋ねてみた。

「可能性がある、というよりもほぼ確実に狙ってくるでしょう。将来、『変革の賢人^{ミイミル}』になる人物の傍にいる人間が死の運命を避けたとなるとその後、『変革の賢人^{ミイミル}』にどのような働きかけがあるか予測が出来ないので、それを避けるためにモ迴さんを殺そうと躍起になるでしょう」

「ってことは、先輩やアンリミズと関わらなければいいってことか？」

「いえ、出会ってしまった以上、縁が出来てしまいましたし、死という絶対的なものによりその縁が断ち切られない以上、襲ってくる可能性は残ります」

「戦い続けるしかないってことか」

「いえ、博士はその対策も立てています」

「へえ、どんな策なんだ？俺も何かしないといけないのか？」

俺のことであるので、何かしらのことを俺がしないといけなくなるだろう。

「いえ、その対策を実行するために廻さんにしてもらうことはありません。しいて言うなら、死ななくてもらうことぐらいです」

「そうなのか？」

「はい。必要な『処置』は昨日、治療とともにすでに施しましたから」

「……昨日、俺に何かしたのか？」

『処置』という不穏な単語に不安になった。

「ちょっとした機械を埋め込ませてもらいました」

「……ま、まあ、俺の命を護るために必要なことなら仕方ないか。……俺の体に悪影響はないんだよね？」

「その点は安心して下さい。廻さんには全くの無害ですから」

「そうか。それで何の機械を俺に埋め込んだんだ？」

「埋め込んだもの自体はたいしたことはありません。廻さんが生きている限り、信号を発し続けるというものです。心臓付近に取り付けていますが、先程もいいましたが無害ですので安心してください」

「心臓って……。まあ、害がないならいいけどよ。そんなんで奴等をどうにか出来るのか？」

「はい。信号が途絶えたら、私の動力炉が暴走し、少なくともアジアを吹き飛ばす大規模爆発を起こしますので大丈夫です」

一瞬、何を言われたのか分からないため言葉が出なくなり、その言葉を理解してくるとそのあまり突飛な事柄に絶句し、歩いていた足が止まり、やがて搾り出せた言葉は

「はあ!？」

と、まあ、何とも言えない驚きだけに満たされた声だった。

「アジアを吹き飛ばすって、おまつ、ちょ、どういうことだよそれ!」

「私に搭載されている動力炉は核を遥かに越えるエネルギーを得ることが出来る対消滅の原理を利用した動力炉ですので、それぐらい

の威力は十分に出せます」

「そういうことじゃなくなてな！どうしてそんな大勢の人を巻き込むようなことになってんだよ！」

俺が襲われときに周りの人を巻き込むわけにはいかないと思い、
人気のない道を選び、進んでいたこの道で俺の叫び声が響いた。

「必要なことだからです」

「だから、どうして！」

「とりあえず、落ち着いてください。それから説明します」

「くっ」

怒鳴り散らしながら問い詰めたい衝動にかられたが、それでは話が
進まなそうなので怒りを押し込める。

「『調整者^{リバーサー}』が正しい歴史にするために行動するというのはもうお
分かり頂けてますね？」

「ああ」

「私達は廻さんの命を明日以降も守りぬかなければなりません。し
かし、彼等はその歪んだ歴史を正すために廻さんを殺そうと動きま
す」

「そうだな」

焦らすように結論を先に言わないので、苛立ちが声ににじみ出て
しまう。

「死んだはずの廻さんが生き続けることはその歪みをどんどん大き
くしていくでしょう。そうなれば、それ相応の戦力を彼等は投じて
きます」

「それを解決する方法がどうして、アジアを吹き飛ばすなんて結果

になんだよっ」

「廻さんが生きていれば、それだけ正しい歴史から逸れていくことになるんです。しかし、廻さんが死んだ結果、それ以上の歪みが発生し、正しい歴史から遠のいてしまうとすればどうでしょう？」

冷静に思考することが出来ない頭で彼女の言葉を吟味していく。

「廻さんを殺した結果、絶対的にありえてはならない事象が起きてしまうとすれば彼らの動きをけん制できると博士は予想しました」

「……つまり、大勢の命を人質にして、俺の命を永らえさせることを奴等に認めさせるってことか」

「端的に言えば、そうなります」

「だけど、それはっ！それは——！」

その理屈が正しいことは分かる。

俺が死ぬことが、俺が生きていることよりも奴等にとって都合が悪くなるとなれば、俺という小さな存在の命ぐらいは認めるかもしれない。

しかし、もし失敗したとき、俺が死んだときは関係のない無数の人々を死に追いやることになる。いや、俺が生きていたとしても、常に無数の命を人質にして生きながらえるなんていい気分ではない。

さっきは、俺の死が俺と雨瀧さんを創った博士に大きな影響を与えていると思っていたが、この状態ではそんなレベルの話ではすまない。

俺と世界が一蓮托生となっているのだ。

俺の命にそんなに価値があるわけでもないのに、こんな方法をと

ることになるなんてあまりに卑怯で、あまりに俺が汚なく、惨めに感じてしまう。

「葛藤されているようですが、このような手段しかないんです。あなたの命を守るためには」

「だからってなあ！」

彼女の胸倉を掴みあげ、混沌としたその胸のうちの想いをぶつけるかのように睨みつける。

睨みつけるがそれ以上、言葉が出てこない。

理屈では確かに正しい。

そして、彼女と彼女を創りだした博士は俺を守るための最善の行為としてこんな方法をとったこともわかる。

それだけ博士という人物が俺を守ることに本気なのだという事も、そのために作られた彼女がそのことに対して真剣に行おうとしていることも。

「——くそっ」

彼女の胸倉を掴んでいた手を放し、彼女から距離をとるように足早に歩みを再開させた。

そんな俺の後を彼女も歩みを再開し、ついてくるのを感じるが、俺の心が荒れ狂っているのがわかっていいのか、彼女は話しかけてこなかった。

人気のない道を歩きつつ、場所的にも多少暴れても周りに迷惑にならない場所を目指した結果、現在は街の発展に取り残された『未来ノ市』ではここしかない田園地帯を夕日に照らされながら歩いていた。

「・・・・・・・・」
「・・・・・・・・」

お互いに無言のまま、黙々と歩き続けていた。

俺は先程のことについて、ずっと考え続けていて、彼女は何を考えているのか、いや、そもそもアンドロイドである彼女に思考というものがあるのか疑問だが、黙りこくった俺に対して話しかけずに黙々としてきていた。

そんな二人の間に流れる沈黙を先に破ったのは俺だった。

「・・・・・・・・なあ」
「何でしょうか？」

今までと変わらない声音で俺の呼びかけに雨瀉さんが応える。

「俺の命のために、多くの命を人質にとるっていうやり方は正直、気に入らない」

「はい」
「けど・・・・・・・・、それしか方法がないんだろ？」
「はい」

色々と不満はあるし、気に入らない。が………、

「受け入れるしかねえよな」

卑怯だと、汚いだと思おうが、そうしなければ死んでしまう。

俺は大勢の人のために生を諦められるほどできた人間ではない。

死ぬのは怖いし、死なないですむならそうありたい。

そんなどこにでもいる人のように生にすがりついていたただの人間だ。

「死ななければ、何の問題もないんだろ？」

「そうですね。廻さんが死ななければ誰一人犠牲になることがなく、廻さんは生きながらえることが出来ます」

「逆に俺が死んじまえば、動力が暴走する雨潟さんを始め、無関係な大勢の人達が死ぬってわけだ」

重い。

俺の命を同じ天秤にのせられてしまった命があまりに重過ぎる。

「責任重大だな。こりゃ何としてでも生き残らないとならないか」

「そうしてもらわないと、私も使命を果たせずに困ってしまいます」

「雨潟さんも死んじまうんだから困るってどころじゃないだろ」

俺のその言葉に、すぐに返答がくると思っていたのだが、なかなか返ってこないで首を後ろに振り向かせてみると、そこには初めて見る雨潟さんの悩んでいるような表情があった。

「どうした？」

「いえ……、少し気になっていたことがあったのですが聞いてもいいでしょうか？」

「ああ」

雨潟さんに質問されるとは思わなかったため、何だろうとは思いつつ質問に耳を傾ける。

「それでは聞きますが、何故、私を『雨潟さん』と呼ぶのでしょうか？」

「は？」

質問の意図が理解できずに間の抜けた声を出してしまう。

「いや、何でもなにも、雨潟さんは雨潟さんだろ？」

「確かに最初にそう名乗りましたし、対外的には雨潟 つむぎという名前を使っていますが、廻さんもご存知の通り、私はアンドロイドです。識別名称として『つむぎ』という名を持っていますが、雨潟、それも敬称をつけて呼ぶのはどうしてなのでしょう？」

「えっと、つまり、どういうことだ？」

「ですから、何故、私を『つむぎ』と呼ばないのでしょうか？」

「俺と雨潟さんはそんなに親しくないじゃないか？それなのに名前と呼び捨てるのは俺はちよっとどうかと思うぞ」

「確かにあまり親しくはないかもしれませんが、それでも私を苗字で呼び、敬称をつけるのはおかしいではありませんか？」

「いや、別におかしくはないだろ。そんなに親しくない人なら苗字に敬称をつけて呼ぶのが普通だと思うが」

「私は人じゃなくてアンドロイドです」

「それが——、いや、ちよっと待ってくれ」

彼女の言葉がどういう意味なのか、俺なりに考えてみる。

彼女は自分に対して俺が『雨瀉さん』と呼ぶことに疑問を抱いた。

それは自分が苗字に敬称をつけて呼ばれるのがおかしいと思ったからであり、俺は親しくない相手にそうするのは当たり前だと思っている。

しかし、彼女は親しくないからといって自分が苗字と敬称をつけて呼ばれないのはおかしいと思っている。

それは自分が人間ではなくて、アンドロイドであるからで――

「あー、つまり、人間ではなくアンドロイドである自分を苗字と敬称で呼ぶのはおかしい、ってことか？」

「そうです。いったい、何故なのでしょうか？」

どうやら根本的なところで俺と彼女の間でずれがあったらしい。

俺は彼女を親しくない間柄の人物であるから『雨瀉さん』と呼んでいたわけだが、彼女は自分をアンドロイド、人間ではなく、むしろ物に近いという考え方を持っているようで自分の正体を知っている俺がアンドロイドに対して識別名称で呼ばず、名前と敬称をつけていることがおかしいと感じたらしい。

正直、外見や表情などを見ていたら彼女は人と全く変わらないように俺には見えるので、俺としてはアンドロイドというより、人間

という意識が強い。

確かに彼女に対して『作り出された』などの物的な考え方をしていることがあるが、そのときは彼女がアンドロイドであるということが意識されているからであり、ただ接しているだけでは人間という意識が大きい。

なので、『雨漣さん』なのだが、彼女は自分がアンドロイドであるという意識が強いために『つむぎ』と名称で呼ばれるのが自然だと感じているようだ。

そういえば、映画や漫画などでもアンドロイドなどの人型のロボットは登場当初、自分は人間ではなく物という意識が強く、物語が進む中で人間のような感情などを得ていくという描写が見られることがあったな。

なるほど。確かにそう考えてみれば、俺が知っている彼女の今までの行動も俺が知らないことも多かったせいか、淡々と説明しているということが多くどこか機械的な感じが否めない。

「何でそう呼んでいるかって言えば、俺の中で雨漣さんはアンドロイドというより、人間っていう意識のほうが強いからってことになるな」

「人間、ですか？私はアンドロイドなのですが」

「そうは見えないってことだ」

これから長い付き合いになるし、一蓮托生の身だ。彼女がうまく社会に溶け込めるようになるためにも少しずつ人らしさをしていったほうがいいだろう。

「ともかく、親しくない間柄の人間には俺は苗字と敬称で呼ぶし、雨潟さんをアンドロイドと思えないからこれからも同じ呼び方で呼ぶ」

「ですが」

「反論は受け付けない。それに雨潟さんも自分がアンドロイドだっていうことにそんなにこだわらないようになってほしい。社会に溶け込むためにもそういう考え方だとうまくいかない部分が出てくるだろう？」

「・・・・・・はい。わかりました」

どこか納得いかないような様子ではあるが、俺の言葉にも一理あると感じたのか彼女は頷いてくれた。

俺がその結果に満足していると、

「ところで、もう一つ、聞いてもいいでしょうか？」

「ああ。いいぞ。どんどん聞いてくれ」

こうして彼女が疑問に思ったところを改善していけば、より人間らしい思考になってくれるだろう、と考えていたのだが。

「何故、このような人気のない場所に来ているのでしょうか？アパートまで帰るのなら遠回りになっていると思うのですが」

「そりゃ、俺が襲われるかもしれないんだろ？周りに人がいたら巻き込まれるかもしれないだろ？」

「いえ、その点に関してはあまり問題ありません。むしろ、人気のないところに来ると——っ！廻さん、私の後ろに下がってください」

彼女が俺の前に出ながら前方を見据えている。

「どうしたんだ？」
リバーサー
「調整者」がきました」

承 4

「奴等が！？どこだ！」

来るとは予想していたが、いざ来ることがわかると緊張感が一気に高まっていく。

「前方のほうからセンサーに反応が出ました。見晴らしがいい場所なので私にはもう見えています。が、廻さんの目だともうすぐ、目視が出来るはずです」

「数はどれくらいなんだ？昨日より多くなってるんだろ？」

「センサーの反応を見る限り、既に百を超えています。更にセンサーの感知圏内に入ってくる数は増え続けています。そして、目視で非人型の個体が多数確認できます。人がいない場所ですから遠慮なく戦闘に向けた個体を投入してきたようです」

「人がいない場所だからってどうということだよ！？」

「何度も言いましたが、彼等は歴史を正しく進めることが行動原理です。人型以外の個体が人気のある場所に現れて騒ぎになれば、彼ら自身の存在によって歴史が歪んでしまいます。ですので、人気のある場所では人型の個体が主に活動するということがわかっています」

「な！？それじゃあ、俺の行動は裏目に出たってことか！そういうことは言っておいてくれよ！」

「すみません。非人型が人気のある場所では出にくいと廻さんが理解してくださっていると思っていましたので。私のミスです」

それでさっき、疑問に思っていたのか。

「まずは彼らを隔離します。亜空間展開装置、起動。^{リンク}
『虚数空間』開きます」

キイイイイイン

甲高い音が聞こえたかと思うと、一瞬の違和感の後に世界が黒く染まった。

「何だ!?!」

イマジナリースペース

「『虚数空間』に任意の対象、私達と敵を移しました。この中でならどれだけ暴れても現実に影響を及ぼすことはありません。元々、無関係な人を巻き込まないように街中で襲われたときに私達と敵だけをこの空間に移して戦闘するつもりでした」

「ほんとに俺の考えは無駄だったんだな。すまなかった」

「いえ、私の説明不足でした。そろそろ、廻さんにも目視できる範囲内に奴等がきます。危ないですから私の前には出ないで下さい」
「わかった」

彼女の後ろに隠れながらも前を見ていると段々と敵の姿が見えてきた。

「あんなにいるのかよっ」

遠目からでもわかるほどの大軍勢。黒い壁が迫ってくるようなその光景に戦慄が走る。

しかも、徐々にその姿もはっきりしてくると、その異形の軍勢の姿に更なる恐怖が俺を襲う。

敵は昨日のような人型を見つけるほうが難しく、多くが見たこともない獣だったり、腕が異常に多いもの、四肢のバランスがおかしいもの、捻じ曲がった翼をもつもの、巨大なものなど常識ではありえない姿であり、そのどれもが一斉に空と大地を埋め尽くしながら俺たちに向かって進んできている。

「総数五百四十三体と確認。その大半がやはり異形ですね」

「ごひゃ——っ！？本当に大丈夫なのか！」

「先程も言いましたが、シミュレーション上は千体以上の敵と交戦しても私は勝利できるというデータがあります。開口^{オープン}」

雨潟さんの左右の空間に彼女と同じ大きさ程の歪みが発生し、穴が開く。

それぞれの穴の中心に手を突っ込み、穴から引き出された『ソレ』を見て

「は………？」

こんな状況でありながらもそんな間の抜けた声が出てしまった。それぞれを片手で持ったためなのか、『ソレ』の横からそれぞれ伸びているグリップとその機能を發揮するためのトリガー。彼女の身長を優に超える全長を持ち、その太さも俺の胴よりも太いと思われる白い本体。そして、先端から伸びているのは円状に配置された十の筒。

「^{リンク}起動」

『ソレ』は内部から青い光を放ちながら、作動音を鳴り響かせる。どんどん音を大きくしていき、そのトリガーが引かれるのを待つ。

「『乱れ葉』 正常に稼動」

両手の『ソレ』を前に向け、先端の十の筒が二つ、計二十の筒、砲身が迫り来る敵の軍勢に向けられる。

「いきます」

両手のトリガーが引かれ、二つの『ソレ』、巨大なガトリング砲がその威力を発揮した。

ドオオオオオオ！！

ガトリング砲『乱れ葉』が作業音を一際、大きくするとほぼ同時に超高速で連続して砲身から青い光の弾を放出する。

連続するのが早すぎて一つの轟音が延々と続いているような錯覚に陥る。

その巨大な砲身と大きな轟音に見合うだけ威力を見事に発揮し、先程までは前方に敵の軍勢による黒い壁で一杯だったのだが、今度は砲身から射出された青い光で一杯になっていた。

光の弾の群れは敵を蜂の巣にし、どんどん敵を駆逐していく。

雨潟さんはその巨大な砲身を操り、一箇所だけに狙いを定めずはこちらに突出してきた集団を集中的に叩いていた。

その様子を見て、このガトリング砲の威力にも驚かされるが、その巨大な砲身をそれぞれ片手で軽々と操る雨潟さんの力にも驚かさ

れた。

しかし、確かにガトリング砲の威力は凄まじいが、相手は物量に物を言わせて徐々にこちらに接近をしてきて、やがてそのうち一体が飛び出してきた。

「雨漉さん！」

「はっ！」

俺が彼女のピンチだと思い、声をあげるが、彼女は上空の敵に向けていた左のガトリング砲を飛び出してきた敵の頭上に叩きつけた。

ズドン！

大きな音をたて、砲身とともにその敵の頭部が地面にめり込まされた。

彼女はそんなことに構わずに叩きつけた砲身をすぐに敵に向けなおして、敵を掃射していく。

「・・・・・・・・」

砲身を叩きつけた結果、陥没した地面と見事にペシャンコになっている敵の頭部を見て、その怪力ぶりに閉口してしまう。

間違っても彼女を怒らせないようにしようと思っていると

「重力場制御、起動^{リンク}つ、開口^{オープン}！廻さん！」

「うおっ！」

突如、青い光を纏った雨漕さんは左手のガトリングを空間に開いた穴に放り込むと俺を左手で抱え、空高く跳躍した。

右手のガトリング砲で進行方向の敵を撃ち払い、その穴を抜けて暗い空に飛びだした。

「しっかり私に掴まっけていてください」

空中で不自然に静止すると

「『乱れ葉』、散開^{フライ}」

彼女の右手のガトリング砲がそれぞれ先端に銃身をつけた十の棒状の端末に別れ、銃身とは逆の先端から青い光を放出しながらバラバラに飛んでいく。

飛んでいった端末はそれぞれの銃身から青い光の弾を打ち出し、連射力や威力は一つだったときよりも弱くなっているが、空間を駆け巡り、様々な角度から弾を放つそれは確実に敵を仕留めていつていた。

「開^{オープン}口」

右手に残ったグリップ部と本体の一部を穴に放り込み、新たな武器を引っ張り出す。

今度はライフルを二周りほど大きくした白い銃であり、取り出す。

「『貫葉^{リンク}』起動。——正常に稼動。いきます」

近づいてきた敵に素早く狙いを定めて引き金を引く。

銃口から放たれた青いビームが敵の頭部を見事に吹き飛ばし、墜落していく。

空中の敵を優先的に狙い、次々と敵を打ち落としていきながら、対処しきれずに近づいてきた敵はライフル『貫葉』で殴打してその怪力で叩き落していく。

そうして雨潟さんが戦っている間も青い軌跡を残し辺りを飛び回る端末達は次々と空中の敵を打ち落とす。

地上にいる敵からは遠距離攻撃が可能なものは体の一部、触手のようなものを伸ばしたり、火を吹いてきたり、何かを投げたりして空に向かって攻撃をしているが、空にいる俺達までの距離が遠く、悠悠回避できる。

「うぷ」

しかし、俺は空中で振り回されたことで悲鳴はかみ殺したが、吐き気が段々と込み上げてきた。

「我慢してください。もう少しですから」

言いながらもライフルから青いビームを次々と放ち、敵を打ち落としていく。

「っていつか、さつきから何で飛んでるんだよ？」

「重力の強さや方向を制御することで重力を小さくし空に軽々と飛び上がったたり、空中で重力を零にすることで浮遊し、下とは別の方

向から重力が加わるようにすることで飛行を可能にしているんです」

ほんとに何でもありだな、未来の科学。

「空の敵は掃討できましたね、^{オープン}開口」

ライフルを穴に放り込み、また別の武器を右手でつかみ出す。

大きさはガトリング砲『乱れ葉』と同じくらいの大きさ。しかし、グリップは下側につき、十の銃身ではなく、大きな砲門が一つ。

「『^{リング}落ち葉』起動」

肩に砲身を乗せ、地上から攻撃してきている敵に『落ち葉』、バズーカの砲口を向ける。

「正常に稼動。——いきます」

ドオン！

青い光の砲弾が発射され、地表にいる敵にぶつかると砲弾が爆発した。

青い爆発は周りの敵を巻き込んで被害を撒き散らす。

連射性は今までの銃器の中で一番劣っているが、一発の威力は最も高い。

地上から攻撃をかわしながら順次、砲弾を落として敵を吹き飛ばしていく。

更には、未だに飛び回っている端末達も少しずつ敵を撃退している。

始めは限りなく多かった敵の集団はすでになりに少なくなつてしまつた。

「残りは一気に片付けます」

雨潟さんは更に上空に上がり、敵の攻撃が更に届きにくくさせると砲身を下に向けた。

「『落ち葉』^{チャージ} 充填」

砲口から青い光が溢れ、それはどんどん大きくなっていく。

この間、下から攻撃がきてはいたのだが、端末達に迎撃される。

「五十……六十……七十……八十」

砲身からは溜められたエネルギーがギュオンギュオンと音を立てて、今か今かと解放されるときを待っている。

「九十……百。エネルギー充填完了。廻さん、強い衝撃がきますので注意してください」

「言われなくても」

エネルギーを充填させている様子を見れば、今まで以上のとんでもない砲撃を放つのは簡単に予想できたのでしつかりとしがみつく。

「『落ち葉』^{ファイヤ}開放！」

俺たちと地上の間で敵の攻撃を迎撃していた端末達が退避すると、砲身に溜められたエネルギーが開放される。

ズドオオオオオン！

砲口から砲口以上の直径の青いビームが発射され、それが大地に突き刺さる。

「ふっ！」

雨瀧さんはそのまま砲口をずらすことでビームで地表を薙ぎ払った。

「うおおおお！」

俺はその間、砲撃の凄まじい反動によって吹き飛ばされそうになるのを彼女に強く抱きついて防いでいた。

砲撃が終わり、衝撃がなくなつて俺が一息ついていると

「敵性勢力の全滅を確認。掃討完了」

「掃討完了？もう全部倒したのか！？」

ゆっくり降下していく中で下を見て、そのあまりの高さにびびるがそれでも本当にあの大群を撃退することが出来たのか確かめたく

て地表に視線を向ける。

最初のうちは砲撃のせいで舞い上がった砂埃のせいで地表は見えなかったが、徐々に晴れてきて地表が見えるようになってその光景に空を振り回されたことで湧き上がってきた吐き気も吹き飛び、果然とするしかなかった。

「おいおい、マジかよ……」

地表は砲撃によって穴だらけになっている上に最後の砲撃で大地を深く大きく抉ったらしく、巨大な傷跡を残し、控えめに言ってもまるで戦場の跡のような状態になっていた。

俺が呆然としているうちに地面までの下降が終わってしまった。

「重力場制御、解除^{ダウン}。廻さん、立てますか？」

「あ、ああ。大丈夫だ」

纏っていた青い光を霧散させた雨漣さんから離れ、自分の足で大地に立ち、改めて周りを見渡すところ为先程まで何の変哲もない田園だった名残などほぼ見られないほどに荒れ果てていた。

「^{オープン}開口」

その傍らで雨漣さんは穴を開くと右肩に担いでいたバズーカをその中にしまい、飛んでいた端末達が穴の中に自分で入っていく。

「では、通常空間に帰還します。——亜空間展開装置、解除^{ダウン}」

キイイイイイン

『イメージナリクスベース虚数空間』が展開されたときと同じ甲高い音が聞こえたかと思うと、一瞬の違和感の後に目の前の景色が一変する。

「……………すげえな」

『イメージナリクスベース虚数空間』を展開したときは空を含め周りが暗くなっただぐらいの変化しかなかったが、逆に戻ってきたときだとこの技術の凄さがよくわかる。

先程まで見るも無残に変わり果ててしまった辺りの風景は、元の夕日に照らされたのどかな田園風景へと元通りになっていた。

「『リバーサー調整者』がやってくるのは一日に一度だけなので、今日はもう襲撃はないと安心して大丈夫でしょう」

「一日に一度？そんなこと、初耳だぞ？」

「昨日は話す前に説明を打ち切ってしまいましたし、今日はそれを話す流れになっていなかったので、まだ廻さんには言ってますませんでした」

「だったら、昨日、言ってくれよ。と思わないでもなかったが、昨日の俺にそこまでの余裕があるかと言われれば、ないだろう。」

「にしても、一日に一度しかこれない上に、奴等がこっちにいれるのは夕方から夜までなんだろう？ほんとに訳のわからない連中だな」
「何かしらの理由があるのだとは思われていますが、そこまでは解明されていません」

服についている埃を払いながら雨瀉さんが俺のふとした疑問に答える。

全く、傷を負っていない上に息切れもしていない様子の彼女はとも先程まで恐ろしい火器を使って、一人軍隊が如く暴れまわっていたとは思えない。

それに比べて、ただ彼女に捕まり護られていただけの俺の顔は見事に青ざめていて、強張っていることだろう。

それを情けないとは俺は思わない。むしろ、口を普通にきけていることを褒めたいぐらいだ。

「帰りましょうか。廻さんもあんな戦場において疲れているようですし」

「ああ」

何事もなかったかのように微笑む彼女。

その実、恐ろしいほど強力な火器や怪力を有しているわけだが、俺は恐ろしいという感情よりも頼もしいという感情のほうが大きかった。

何てたって、この彼女が俺のことを護ってくれて言うんだから、並大抵のことでは俺が死ぬという事態には陥らないだろう。

承 5

戦場の空気にあてられ、多少足がおぼつかなかったが、それでもアパートが見えてくると無事に帰ってくる事が出来たんだな、と何とも言いがたい想いが浮かび上がってくる。

「お兄ちゃん！」

今日もアパートの入り口で俺を待っていた命が俺の姿を見るなり、嬉しそうに駆け寄ってくる。

「あ、つむぎさん、こんにちは」

命は隣に雨潟さんがいることもわかると彼女に挨拶をする。

「こんにちは、命ちゃん」

挨拶をした後、命は何故か俺と雨潟さんを見比べて、何か言いたそうにしているが、それを口にしようとしない。

「では、廻さん。私は先に行きますね」

「ん。ああ。じゃあ、話したいこともあるからまた後でな」

「はい」

雨潟さんが命の脇を通って、アパートのほうに向かい、距離が離れると命が口を開いた。

「お兄ちゃん、何でつむぎさんと一緒に帰ってきたの？」

「何でって、そりゃ」

素直に俺の命が危機にさらされていて、それを狙ったわけのわからない生物から俺を護ってもらったため、ということを口に出来るわけもなく

「偶然だよ、偶然。帰り道で会って帰る方向が一緒だからだ」

「お兄ちゃん、今日、バイトじゃなかった？」

「何で知ってんだよ？」

「一昨日、お兄ちゃんの家テレビ直したときにカレンダーに書いてあった」

「ああ、そうか。まあ、今日、バイトはちょっとした用事があって休んだんだよ」

「バイトを休んで、つむぎさんと一緒に帰ってきたの？」

「だから、偶然だったの」

「・・・・・・じゃあ、何で後でつむぎさんとお話があるの？」

「それは」

明日こそが俺が死ぬとされている日であり、何か対策を立てるための相談をしようと思って言ったのだが、それも言えるわけがなく、どう誤魔化したものか首を捻ったが

「ってか、何でお前にそんなことを言わないといけないんだよ？」

「それはっ、それは、・・・・・・もう！お兄ちゃんのバカ！」

命にポカポカと殴られる。

全く痛くはないが、何で怒っているのかわからないので困惑する。

「何だよ？ いったい、どうしたんだ？」

「ふーんだ」

そつぽを向いて拗ねているという意思表示をする命にどうしたものかと悩んだが、ふと昨日から異常事態ですっかり忘れていたが、命が行きたいと言っていた隣のテーマパークのチケットを先輩からもらっていたことを思い出した。

入れたはずのポケットに手をつ突っ込むと、昨日から出来事でだいぶくしゃくしゃになっていたが、それでもちゃんとそこにチケットがあることが確認できた。

「なあ、命」

「ふーんだ」

「お前にプレゼントがあるんだが」

「ふ、ふーんだ」

そつぽを向きながらも気になるのか、俺に対してチラチラと視線を向けてくる。

「実は」

これで命の機嫌が直るだろうとポケットからチケットを出そうと思ったとき、ある考えが閃いた。

しかし、この考えを実行するためには命にチケットを渡すのは躊躇われてしまったため、ポケットに手を入れたままの姿勢で固まってしまった。

「………実は？」

「うっ、いや、実はな」

そのまま何と言つべきか、言いあぐねていると命の目がどんどんジト目になつていき、それでもなお俺が何も言わない、何もしない状態が続くと毗がつりあがつていき、

「お兄ちゃんのバカーーーーーー！！！」

「いてっ！」

俺の脛を蹴り上げるとアパートの命が住んでいる部屋へと戻つていつてしまう。

「お兄ちゃんなんかもう知らない！これからはお父さんに遊んでもらうもん！」

ドアを開け、こちらを見ながら怒鳴り、舌を出すと部屋に入り、ボタンと荒々しくドアを閉じてしまった。

「確かに俺が悪かったけどよ。あそこまで拗ねることないだろ」

蹴られた部分を軽くさするとさつき思いついたことに関しても含めて、明日の相談をするために雨潟さんの部屋のほうにまで移動する。

「というか、翔太郎さん帰ってきてんのか」

命の父親である天理あまり 翔太郎さんは長距離トラックの運転手であり、家にいないことが多い。

翔太郎さんがいない間はアパートの管理を命の母親である天理あまり 鶴子つねこが一人で行っている。

天理一家とはそれなりに仲がいいので、当然、翔太郎さんとも仲がいいのだが、今日帰ってきているとは知らなかった。いや、もしかすると、昨日、俺が雨潟さんに運ばれた昨日にでも帰ってきていたのかもしれない。

そんなことを考えながら、雨潟さんの部屋の前に着き、このアパートにはインターホンがついていないのでドアをノックしようとしたときにタイミングよくドアが開いた。

「どうぞ、中へお入り下さい」

「あ、ああ」

タイミングよく出てきたことに驚きつつも、そういえば、センサーを持っているらしいからそれで俺がドアの前まで来たのを察したのだろうと考えた。

女性の部屋にしては少々殺風景で物が少ない部屋の奥に進んでいく。

「そちらにお座り下さい」

彼女が手で指し示した先には座布団が用意されていて、俺はそのままその上に座った。

「それで、お話というのは明日のことについてでよろしいでしょうか？」

彼女は俺と向かい合う位置にあった座布団に座るとそう切り出した。

「明日が俺の命日なんだろう？それをどうにかするために対策を決めとかなきゃならないだろ」

「そうですね。ある程度、行動の指針を決めたほうがいいでしょう」
「で、だ。雨潟さんは俺が死んだってのは知ってるだろ？その死因や場所がわかれば、だいぶ対策が打ちやすくなると思うんだが」

俺の至極真つ当な意見に彼女は困ったように眉を顰めた。

「それが、ですね。確かに廻さんが死亡されたときの調書が残っていて、そこから死んだ場所などは割り出せたのですがそれが妙なことになると思います」

「妙なこと？」

「はい。まず事故にしては原因がわからず、殺人にしては犯人も捕まっておらず、どういった経緯で死んだのが当時の警察ではわからなかったみたいです」

「迷宮入りってやつか。とりあえず、わかってることは？」

「死亡推定時刻が明日の午後六時ごろと見られ、場所は昨日私たちがいた田園の一角です。廻さんが死んだと推測された日の翌日の朝、第一発見者が死体を見つけ悲鳴をあげ、それを聞きつけた近所の住民が腰を抜かしている第一発見者と田んぼの真ん中で死んでいる廻さんを発見しました。警察が死体を解剖に回した結果、心臓麻痺とされています」

「心臓麻痺？今まで特に心臓が悪いなんて言われたことはないぞ」

「はい。それは警察もちゃんと調べたようです。そして、廻さんは特に何も問題ない健康体であるということも証明しました。いいですか、どうも心臓麻痺という鑑定自体が違う可能性が高かったみたいです」

「解剖では心臓麻痺だったんだろ？」

「いえ、死んでいるということはわかったんですけど、何が原因で死んだのかわからない。と言った感じで、とりあえず一番それっ

「ばい死因にしてみたんです」

「適当に検死したんじゃないんだろうな」

「いいえ。私も資料にあった発見当時の遺体の写真を見てみたのですが本当に傷一つなく安らかな様子で廻さんが眠っているだけのよ
うな状態でした」

つまり、俺は死因がいまいちはつきりしていない綺麗過ぎる死体
になったわけか。

「当初、容疑者がいたらしいんですけど、廻さんが亡くなるのと同
時に失踪。その後の行方が全くわからなくなったそうです」

「そいつの名前は？」

「不明です」

「不明？」

「ですから、わからないんです。確かに調書に書いてあるはずなん
ですけど、私が調べたときにはそこだけが取り除かれていました」

「誰かがその部分を持ち去ったってわけか。調書に触れられる奴と
なると警察関係者が俺の事件に関与してたのか？」

「誰が隠蔽を行ったのかはおろか、いつ隠蔽が行われたかも分かり
ませんでした」

予想外に俺の死に関しての謎が多く、部屋に来る前よりも考える
ことが増えてしまった。

「ん？じゃあ、博士はどうなんだ？俺の死を強烈に覚えているって
ことは俺の死に関する何かしらのものを見たりしたんじゃないか？」

「いえ、それが……。博士は事件当時の一ヶ月前後の記憶
を失っているんです。廻さんの推測通り、おそらく犯行に関わる何
かを目撃したとは思われていたのですが、そのときの精神的シヨッ
クが原因で自身の心を護るために忘れてしまったらしいです。それ

でも、廻さんが死んだというイメージは振り払えなかったようですが」

「手詰まりか」

「はい。ですので、博士は廻さん行動を微調整して死を防ぐという手段をとらずに、周りを巻き込むという選択をしたんです」

俺の命を爆弾にして奴らを牽制するしか手段がないってことか。

「あれ？待てよ。もうその起爆装置とリンクしている機械が俺の心臓に埋め込まれてるんだろ？」

「はい。昨日、治療のついでに埋め込みました」

「じゃあ、何で今日、襲われたんだ？爆弾が抑止力になるなら今日、奴らが襲ってくることはないと思うんだが？」

「廻さん、あちらが私達の動きを常時監視でもしていないかぎり、爆弾のことを知るのとは不可能ですよ？」

「あ、そうか」

爆弾のことを俺が知ったのも少し前の出来事だ。それなのに、奴らがそのことを確実に知ることが出来るという可能性は低いだろう。

「しかし、先程の戦闘中では廻さんに埋め込んだ機械からの微弱な電波が発せられてましたからあちらがそれに気づけば迂闊に手を出せないでしょう」

「けど、気づかない可能性もあるだろ？」

「それはそれで大丈夫です。明日以降、彼らが襲ってきたときにそうであることを伝えればいいだけです。早く知らせすぎて対策でも練られたら駄目ですからね」

「爆弾を封じる手段が奴らにあるのか？」

「ないはずですが、念には念をおしたほうがいいでしょう。今後、対策が練られるとしても一朝一夕でどうにか出来ることでもありません」

せんし、それまでの間に廻さんには奴らが手出しできないように自分の存在の重要性をあげてもらいます。」

「重要性をあげるってどういうことだ？」

「例えば、『変革の賢人^{ミイル}』の誰かと結婚することです」

「はあ！？」

いきなりの発言に思わず、大声を出してしまう。

「け、けけ、結婚って」

「『変革の賢人^{ミイル}』は世界にたいして大きな影響力を持っています。当然、その伴侶ともなれば相手にとっても廻さんの影響力は強くなります。また、『変革の賢人^{ミイル}』の方々は尋常ならざる天才であり、天才である故の苦悩や孤独というものを抱えています」

一昨日にも先輩にも似たようなことを言われたな、と思い出しつつ話を聞く。

「ですので、伴侶に選ばれる方というのは何かしらの思惑で婚約させられた方でない限り、その方の苦悩などを受け止めてくれる方であり、そういった人に惹かれやすいのです。自分を受け入れてくれる方であるからこそ愛情も深くなり、その影響力も一般的な夫婦に比べて大きいと言えます」

「ま、まあ、その推論が正しいとしてだ。それだと俺が『変革の賢人^{ミイル}』の誰かと付き合わなくちゃならないだろ？自分で言うのもなんだが、俺みたいな人相の悪い奴を相手にする奴がいるとは思えないぞ」

「そんなことはないと思いますよ。目つきは少し悪いとは思いますが、全体の顔立ちとしてむしろ整っている方ですよ」

「そ、そうか？」

雨瀉さんのような美人に褒められ、それが自分にとって僅かながらもコンプレックスになっていた顔のこととなるとどうにも気恥ずかしさを感じる。

「幸い、廻さんの周りには『変革の賢人』^{ミミル}の方々が複数いますし、憎からず思われているようなので他に方法がないわけでもないですが、結婚をするという方法が一番適していると思われます」

「……ちなみに聞くが、他にどんな方法があるんだ？」

恥ずかしさで赤くなっているのを自覚しながらも他の方法がどんなものかを尋ねた。

「他の方法は無理だと思いますよ。世界を統一してその頂点に立つことや第三次世界大戦において英雄的活躍をするなどですから。言っておきますが、これらの場合、私に頼っても無理ですよ？技術発展を促進することにはなりますが、その分対応策も早く出来てしまいますから」

「……それは確かに無理だ。」

「と、とりあえず、先のことはさておき、明日のことなんだが」

結婚という話が現実味を帯びてきて、『変革の賢人』^{ミミル}になるであろうという二人、先輩やアンリミズの顔が浮かび上がってくるのを必死に振り払いながら話題を変える。

ポケットからさつき、命に渡すことを躊躇ったチケットを取り出して、広げる。

「明日、ここに行かないか？」

「——以上が今日の出来事です」

『そうか。特に問題もなく終わったか』

「しかし、やはり詳しい死亡状況が分からないというのは対応しにくいのは事実です」

『そう言われても覚えていないものはしょうがないだろうが』

昨日と同じく、皆が寝静まり夜も更けた頃、つむぎは未来と通信をして創造主である博士と連絡をとっていた。

『私が目覚めたのは廻が死体で発見された三日後、それも病院のベッドの上だ。周りも私を気遣って情報を遮断してたから、当時のことを知ることは無理だった。ったく、あのときは訳も分からず入院させられてやってらんなかったぞ』

嫌そうに顔をしかめる女性は相変わらず目の下に隈を作ったまま、ボサボサの髪を放置している。

「私が知っている通りの状態でしたら仕方のないことだと思います」
『それは今は私も分かってるっての。寝てるときはずっとうなされていて、たまに自覚症状もなく暴れ回っていたらそりゃ、精神を病んだかと思って病院にぶち込むわな。まあ、そんなことはどうでもいい。武装はちゃんと稼働しているんだよね？何か問題はないか？』
「十全に稼働しています。実際の戦闘でも十分にその威力を発揮しました」

『エネルギー形成機』『木の葉』と近接武装『葉切』は今日は使わな

かったようだが？」

「それは昨日、確認しましたから本日はこちらに来てから使っていなかった武装のチェックも兼ねてそちらの武装を使いました」

『全武装問題ないんだな？』

「はい」

『ならいい。しかし、気を緩めるなよ。明日が本番なんだからな』
「承知しています」

そこで博士は言葉を切るが、通信を終了しようとはしない。

どうしたのかとつむぎが尋ねようとしたとき、先んじて博士が口を開く。

『まあ、こんなことは万が一にもないとは思うが、一応言うておく』
「何でしょうか？私は全身全霊を賭して廻さんを護るつもりですが」

つむぎは失敗を気にされているのかと思った。

『テーマパークに、二人で、行くからと言って護衛をおろそかにするなよ。お前は、護衛対象の、廻を護ること、だけ、を考えていればいいんだからな』

「はい？もちろんです」

つむぎは所々をやけに強調し、妙に力のこもった博士の言葉に疑問を持ったが、当然のことを聞かれたのであっさりと答えた。

その答えを聞くと博士は通信を切った。最後に

『——女性型を創ったのは失敗だったかもしれん——』

そんなことを博士が呟いたのを聞き取ることは出来なかった。

転 1

『未来ノ市』の急速な発展に乗り遅れまいと周りの市町村も様々な取り組みを行った。

そのうちの 하나가『未来ノ市』に集まる人をターゲットにした施設であり、俺たちがやってきたテーマパーク『フューチャーパーク』もその施設の一つだ。

以前にあったテーマパークをほぼ造りかえ、周りの土地も巻き込みつつ更なる規模に拡大されたこのテーマパークは自らの街の名前ではなく、明らかに『未来ノ市』を意識した施設名をつけていることあたりからも発展の恩恵にあやかろうとしているのが目に見える。

「やっぱり人が多いな」

「そうですね。これだけの人がいれば、『調整者^{リバーサー}』も動きにくいでしょう」

今の俺たちの服装を雨漕さんは初めて会ったときと同じ白の長袖でくるぶしまで隠す長いワンピース。俺は動きやすいズボンとＴシャツの上にジャケットを羽織っている。

ズボンのポケットには昨日、アンリミズからもらった防犯グッズ（？）など制服のズボンに入れてあったものをそのまま入れてある。

昼を過ぎたあたりにやってきた俺たちはまず人がどれくらいいるかを確認していた。

俺は奴らが目立つのを嫌うということをチケットを命に渡す寸前に思い出し、人が多く集まるここなら奴らの活動を制限できるのではないかと考え、雨潟さんに提案した。

人が巻き込まれるのは嫌だが、それも『イメージナリースペース 虚数空間』が解決してくれるので俺はこの案を考えることが出来た。

それにここは俺の遺体が発見される田園からはほど遠い場所にある。発見された現場にはなるべく近づかない方がいいだろうし、それならいつそ隣町まで行くのも悪くない。

そういうわけで先輩が俺にくれたチケットは俺にとって役に立ってくれた。実際、ここに入るのに入場料を払わなくてすんだのも俺の寂しい財布事情からするとかなり嬉しかった。

「それじゃ、早速噂の絶叫マシンにでも乗るか」
「廻さん、あまり遊びすぎないでくださいよ」

昼頃に来たのは夕方頃に来ると思われる奴らを確実にここで迎え撃つためという理由もあるが、雨潟さんに楽しんでもらいたいという別の理由もある。

昨日も思ったが、彼女の容姿は人間とほぼ変わらないのだが、その行動が淡々と機械じみている。

もっと人間らしさを知ってもらうためにもまずは彼女に楽しいということを知ってもらおうべく、このテーマパークを利用しようと思いついた。

この理由に関しては雨潟さんに教えておらず、戦う前に下見をし

ておいたほうがいいと言っている。

変に身構えてしまうよりも、自然と楽しんだ方がいいと思ったからだ。

そんなわけでまずはこのテーマパークの目玉とも言える世界屈指の絶叫アトラクションの数々へと挑んでいった。

一時間後、俺はベンチでうなだれていた。

「大丈夫ですか、廻さん？」

その隣で雨漉さんは俺の背中をさすりながら顔色をうかがっている。

「な、なんとか」

俺たちは定番のジェットコースターとフリーフォールにこの一時間の間に乗った。

人気アトラクションであるため待ち時間が長く、この二つしか乗れなかったが、その待ち時間も納得できるほどの期待を裏切らない素晴らしいできのアトラクションだった。

そう……、素晴らしいできの絶叫アトラクションだった。

一つ目のジェットコースターの時点でその洗礼を十二分に体験し

た俺は懲りずにフリーフォールへと挑戦し、見事にノックダウンされた。

昨日の戦闘中、結構振り回されていながらも多少気持ち悪くなった程度ですんだので何とかなるだろうと高をくくっていた自分を罵ってやりたい。

それに引き替え

「？」

チラツと視線を雨瀉さんに向けると彼女は見事にけろりとしている。

あれだけの絶叫アトラクションにも関わらず、全くダメージを負った様子はない。

というか、よくよく考えてみれば、昨日は俺を掴みながら飛び回っていたのだから俺に負担がかからないようにある程度の加減をしていたはずだ。

そもそも激しい戦闘を想定しているであろう彼女にあの程度は本当にたいしたことがないのかもしれない。

そう考えるとアトラクション系では彼女は楽しめないだろう。

「よし、じゃあ。次に行くか」

「また何かに乗るつもりですか？あまり激しいのは止めた方がいいと思いますよ？」

「いや、今度は別のところに行く」

そう言って歩き出した俺の後を雨潟さんがついてきた。

このテーマパークは動物園もその中に建造していて、アトラクションがあるエリアからは少々距離があるが、割と大きい動物園であり、家族連れに好評らしい。

俺達はその中でも奥まったほうにあるある一角に向かった。

「あの、ここは？」

「見て分らないか？」

「いえ、ここがどういうところなのかは分かりますが、その、あまり廻さんのイメージに合っていないと言いますか、意外に思いましたので」

俺もそう思う。

俺たちがいるのは、よくある動物たちとの触れ合いコーナーというやつであり、客には人気のスポットの一つであり、特にちびっ子達はおおはしゃぎしている。

そんな中に目つきの悪い俺が来たので、距離を置かれることが顕著になるがわりといつものことなのであまり気にしない。

アトラクションでは雨潟さんにたいした影響はなさそうなので、それならば動物に触れることによって癒し的なものを感じ取ってもらうことにした。

「まあ、ともかく、触れあってみようぜ」

俺が動物達に近づくと、動物達は俺から逃げるように移動していく。

俺の目つきは動物にまで有効なのだろうかと思っていると、動物達の中から一匹の鹿が俺に向かって進んできた。

怖がらせないようにスツと手を伸ばすと鹿はその手に顔を近づけ、臭いを嗅ぎ、続いて舌でなめてから顔を手にすりあわせてきた。

俺は大丈夫だと思い、鹿に近づいてその体を撫でる。

鹿は俺の手を嫌がることもなく、俺にされるがままになっている。

自分から近づいてきて、俺に心を許してくれている鹿を夢中で撫で回していると、ふと目の端に雨潟さんが映った。

雨潟さんは視線の先には毛がモコモコした羊が寝ていた。

子供達は寝ている羊よりも起きて動いている羊のほうがいいのかそちらのほうに集中していて寝ている羊には誰一人かまっていない。

「・・・・・・・・」

雨潟さんはその羊をジッと見ていた。

全然起きる気配のないその羊にたいして雨潟さんはゆっくりと近づき、これまたゆっくりと手を伸ばしていく。

そして、手が毛に触れると少し手を引く。まだ羊が起きていないことを確認するともう一度羊に触れ、今度はさっきより強めに触り、また手を引いて起きていないことを確認する。

その動作を何度も繰り返して行っている、どんどん大胆になっていくが、相変わらず羊は寝たままでは起きることはない。

最終的には雨漉さんは少し考えた後に羊へと抱きついていった。

羊はそれでもなお起きることはなく、眠り続けていたがそれに抱きついていく雨漉さんはその羊毛の感触を堪能しているようだ。

「――」

どこことなく嬉しそうな笑みを浮かべている彼女を見て、ここに連れてきて正解だったなと思った。

「すみませんでした」

「いや、別にいいって」

あれからずっと羊毛の感触を堪能していた雨漉さんを鹿を撫でることに飽きた俺が邪魔する気にもなれず、近くの乗馬体験コーナーでしばらく遊び、結構時間を潰しても雨漉さんが来ないため様子を見に行くと相変わらず寝たままの羊と相変わらず羊毛の感触を堪能している彼女がいた。

流石に長いことを時間を使い、日が沈む時間も近くなってきたので

そのままでは不味いと思い、彼女に呼びかけると、ずっと夢中になっていたことに気づいた彼女は平身低頭してずっと謝っていた。

「そんなによかったのか？」

「はい。それはもうとてもいい感触でそもそも私はあのようになにかでふわふわでもこもこで柔らかいものに触れたことがなくて羊毛という物がどういうものかは情報としては知っていましたが実際に羊を見たときにあまりにもこもこしているのになんて触ってみたらそれはもう柔らかくですねあの羊毛もずっと寝ていて起きないものですからじっくりたつぷり十分にその羊毛の柔らかさを堪能できその柔らかさと言えばとても心地よく私に睡眠という機能がついていたなら間違いなくあそこで寝てしまおうと思ってしまっぐらいのものでしてあのふわふわふかふかもこもこはアンドロイドである私すらも虜にする至高品であると言って間違いないと思われ周りに気がつかなくなるほどのあのふわふわふかふかもこもこは私にとっていいものであるとは言えないのですがやはりその感触というのは抗いがたい物がありました。いつまでも触っていたいと思うようなあのふわふわふかふかもこもこ感。誰しもを夢中にする麻薬のような中毒性があるのではないかと」

「よし、落ち着こうか」

「というか今、一息で言っただけでなかったか？あ、機械だから呼吸は必要ないのか？」

「す、すみません」

彼女は自分が夢中で話していたことに気づき恥ずかしそうに、再び頭を下げる。

こうして見ると、彼女は機械のように感情がないんじゃないかと、

どうも感情が育っていないだけのように見える。

だとすれば、きっかけさえ与えていけば、彼女はどんどん人間らしくなっていくだろう。

「謝ることじゃないって。むしろ、人らしいところがあって安心した」

「人らしい、ですか？私はアンドロイドですよ」

「アンドロイドにこだわる必要もないだろ。人らしくなって欲しいとは思うけど、まあでも、人であれ、と強要するわけでもないけどな」

そこら辺は雨潟さんが決めることだ。

俺は人らしさを教えるし、人らしさが芽生えるような機会を設けることはするが、それを雨潟さんがどのように受け止め、どう活用するかは彼女次第だ。

「完全にアンドロイドであろうとしても、人であろうとしても、結局は『雨潟 つむぎ』っていう個人だろ？アンドロイドだとか、人間じゃないからって選択を狭めるないで自分らしくあることが大事なんじゃないか？」

きつとそれが一番素敵で満足できる生き方なんだと思う。

「自分らしく、ですか」

「どうしてもアンドロイドでありたいって言うなら、俺はそれでもいいが、そのときでも多少は周りに合わせるために人間らしさっていうのを知るのも悪くはないことだろ？」

そのとき、近くの売店の棚に売ってあるものが目に入った。

「ちょっと待っててくれ」

「廻さん？」

彼女をその場に残して、売店にあつたその商品を手に取り、値段を見ると買えない値段ではないので即断してレジへと持っていくた。

店員の声を背にそれを持って雨潟さんのところに戻る。

「ほら、これはその第一歩のためのプレゼントだ」

「えっと」

彼女に渡したのは、羊のぬいぐるみ。

デフォルメされた羊は寝ているように閉じた目と伸ばされた丸っこく短い四肢、体は羊毛でもこもこしているデザインになっていて、その姿はまさしくさつき、雨潟さんが抱きついていた羊そのものだった。

後で知ったのだが、あの羊はほぼ毎日寝ていて、起きていてもほとんど動かない怠け者であり、そののんびりした姿で人気があり、グッズ化していてこのぬいぐるみもそのグッズ化したものの一つらしい。

「さっきの羊とそっくりなぬいぐるみだから気に入るかと思ったんだが、気に入らないなら帰ってから命にやってもいい」

彼女はしばらくぬいぐるみを見つめ、毛の部分をむにむにと数回揉むと

「・・・・・・・・いえ、ありがとうございました」

彼女は大事そうにぬいぐるみを抱え込み、笑顔で礼を言った。

転 2

陽が沈み始め、あたりも暗くなってきた頃、俺達はテーマパーク内の大通りの端によりながら移動していた。ちなみに、ぬいぐるみは戦闘の邪魔になるので、雨瀧さんが空間に穴をあけて、そこに放り込んだ。

「……………いつ来てもおかしくないよな」

「はい。時間的にも既に五時半を過ぎましたので時間通りに殺さないならそろそろ襲ってくる頃です」

「この人ごみの中から誰が敵なのかわかるのか？」

「センサーで人間と彼らを判別できるので大丈夫です。センサーの範囲内に入ればすぐに——、来ました！」

「どっちからだ？」

「正面から近づいてきています。ですが、これは……………」

「どうかしたのか？」

「いえ、それが、敵の反応がたった一つなんです」

「一つ？」

昨日、あれだけ大勢を倒したのに今度は逆にたった一人なんて、どういうことだ？

そんな疑問が浮かび、考えていると

ズオオオオオオオ

体の底を震わせるような低い音が聞こえたかと思うと、一瞬の違

和感の後に世界が変わる。

白い世界に。

真っ白というわけではないが、俺たち以外のあらゆるものが白っぽく変わってしまった、昨日の暗い世界が黒が溢れた世界だとすると、こちらは白が溢れた世界だ。

「これは!?!」

「『イマジナリースペース虚数空間』!?!——いえ、違う!これはいつたい?」

俺だけでなく雨潟さんも動揺している。

「雨潟さんがやったんじゃないのか!?!」

「違います!私にもこの状況がどういいうことかわかりません!ですが、得たいが知れない状況ですので私の傍から離れないで下さい!」

コツコツ

俺たち以外いなくなってしまったこの白の世界で一つの足音が響く。

雨潟さんは音が聞こえてくる前から今、音が聞こえてきている前方を睨みつけている。

「わかりませんが、恐らく、これは『リバーサー調整者』の仕業ですつ」「その通りだ」

前方からやってきた者から返事が返ってくる。

向こうから返事が返ってくるとは思っても見なかったようで、雨潟さんが驚いている。

「機械を相手するのに現実空間では目立ちすぎるのでな。隔離させてもらった」

前方から歩いてくるのは男。

歳は二十代前半だろうか、金髪碧眼の若い男。吊り上り気味の目だが、その身なりから雰囲気が出合っさって俺とは違い凛々しい雰囲気。容貌の男が中世のコスプレのような格好で歩いてきていた。

「……まさか、そちらに知性があり、このような技術を持っているとは思いませんでしたよ、司祭様」

「そう決め付けたのはそちらの勝手だ。それとこの服は以前に司祭をやっていたときの名残だ。今は司祭ではない」

どうやらあの服は司祭が着る服らしい。

「さて、御託を長々と並べている暇はないのでな。早々にその男を神の御許へ送ってやる」

「オープン
リンク開口、起動」

雨潟さんが空間に穴を開け、そこから一昨日も使っていた薙刀『葉切』を引き抜き、刃に青い光を纏わせる。

「ま、待てよ！」

俺は今にも戦いを始めそうな二人に声をかける。

「何だ？死にたくないというなら、そのようなことは認めんぞ」

「お前らは知らないだろうけどお前が俺の生きたいっていう意思を無視して殺した場合、大爆発が起きて大勢の人が死ぬことになるぞ」

こうして口にしてしまうと我ながら卑怯で悪役くさい台詞だが、言っておかなければ大勢の人達の命が危険にさらされる危険があるので相手にそのことを伝えなければならぬ。

「ふん、そのようなことはすでに知っている」

「だったら」

「だが、それがどうした？」

男は見下すような目で俺を見つめながら、そう吐き捨てた。

「な！？お前等、歴史を正しく進めるために行動してるんだろ！だったら、俺を殺したら自分達の行動理由に背くことになるだろ！」

「いいや。お前如きを殺したところで世界は変わることはない。そのことはその機械もわかってるのだから？」

「……………彼の言うとおりです、廻さん」

武器を構え、相手を警戒したまま雨漕さんが答える。

「どういうことだよ！」

「私達は周りを巻き込むことでこちら側に廻さんを殺すことを躊躇わせるようにしました。しかし、周りを巻き込むことが出来ない状況を相手が作り出せるのならば、周りを巻き込むことが出来なくなり、廻さんを殺す事に問題がなくなってしまうんです」

「そういうことだ」

「そんな……」

「すみません。事前に情報が得られなかったとはいえ、相手がこちらと同様の技術を持っているとは完全に想定外でした」

「じゃあ、どうするんだ!？」

「幸い、ここにいるのは彼一人のようですので力尽くで撃退します」
「ふん、やれるものならやってみろ!」

男が右腕を横に振るうと、いきなりその目の前の空間から複数の赤い光弾が高速でこちらに接近して来た。

「っ!」

それに対して雨瀉さんは『葉切』を右手一つでもち、もう片方の手を前に向けた。

掲げた掌に青い光が集まると、次の瞬間には前方に青い光の壁が出来ていた。

「はあっ!」

その次の瞬間にはどこから取り出したのか、剣を持って男がその壁に切りかかった。

バチバチバチ!

青い壁と少しの間だけ拮抗したが、よく見れば刃に赤い光を纏ったその剣は壁を切り裂き、雨瀉さんへと剣が迫っていく。

「ふっ!」

彼女は右手一本で操った『葉切』を剣の横に叩き込み、起動を逸らす。

続いて、彼女は左手の掌を男に向ける。

もう一度、掌に青い光が集まり、今度は光が炸裂し、男を吹き飛ばす。

「オープン開口、リンク起動！」

穴から左手でガトリング砲『乱れ葉』を引っ張り出すと、すぐさま起動しトリガーを引く。

ズドドドドドド！

青い光弾が群れとなって宙を舞っている男へと襲い掛かる。

「ふん」

男は空中で赤い光を身に纏い、体勢を整えると青い光弾の群れに片手を向けて、赤い壁をその前に発生させることで攻撃を防いだ。

「『フライ乱れ葉』オープン散開！リンク開口、起動！」

『乱れ葉』が十の棒状の端末に別れ、青い軌跡を残して飛んでいく。

同時に残った本体を穴に放り込み、ライフル『貫葉』を引っ張り出す。

すぐさま空中で赤い壁の向こうにたたずむ男に狙いを定めて、ライフルを連射する。

それと並行して、飛んでいるそれぞれの端末が壁を回りこんで男に狙いをつける。

「ぬるい」

男が身に纏った赤い光が一層強くなると、壁を解除して男を狙っていた端末の一つに飛んでいく。

「加速した!？」

俺が驚いている間に男から逃げようとした端末は男にすぐに追いつかれ、切り裂かれ爆発する。

更に男を狙う他の端末に対して、赤い光弾を発射して牽制しながら、雨潟さんが放った青いビームを切り裂く。

「廻さんはここにいてください。重力場制御、起動^{リンク}」

雨潟さんも青い光を纏い、空中に飛び上がっていく。

「はっ!」

「ふっ」

雨潟さんが片手で勢いよく振り上げた一閃は、男の剣で受けられる。

男が軽く力を込めると雨潟さんがあっさりと押し負けて、『葉切』

を押し込まれている。

そのまま押し切られるかと思ったが、男が急に上空へ上昇した。

その直後に、男がいた場所に青い光弾が飛んでいた端末から打ち込まれた。

「邪魔だ！」

男が持っていた剣を端末の一つに高速で投げつける。

その剣が端末を貫いて、男が無手になっているうちに雨瀉さんと端末達による集中攻撃が行われる。

「はぁ！」

男の両手にそれぞれ赤い光が集まり、光が赤い光を纏った剣に変化し、両手に持った二本の剣を高速で振るい、迫っていた攻撃を全て切り伏せた。

「なっ」

一斉攻撃が二本の剣で全て叩き落されたことに雨瀉さんが驚いていると、その隙に男が急降下しながら、二本の剣を叩きつける

「ぐっ！」

右手の薙刀『葉切』で防いだものの、上空からの落下による勢いも二本の剣に加算され、そのまま地面に向かって押し込まれていく。

左手のライフル『貫葉』で胴体に殴打を叩き込もうと振るうが、男が右手に持った剣で防がれる。

下に向かっていく速度は落ちたが、力は相手のほうが上回っているため変わらず二人は下に落ちていく。

男が右手の剣を彼女の胴体に突き出すが、その寸前であらぬ方向を向いていた『貫葉』からビームが発射され、その反動で剣をかわしながら落下軌道から離脱する。

雨潟さんは距離をとり、銃撃で対応しようとするが、男もすぐに雨潟さんに追いつき、二本の剣を巧みに操り、剣戟を繰り出している。

雨潟さんは剣戟を『葉切』でさばきながら何度も距離をとり、『貫葉』と端末による銃撃で応戦している。

状況的には雨潟さんのほうが劣勢である。

速度と力は相手の男のほうが上であり、両手の二本の剣から繰り出される剣戟に対応し切れておらず傷がどんどん増えていく。

それに対して男は遠距離攻撃があまり得意ではないのか、距離をとり銃撃で対処しようとする雨潟さんに執拗に接近戦をしかけている。銃撃のほとんどをかわしたり、剣で切り裂いたりすることodefいでいるため、傷自体はあまりない。

俺は流れ弾に当たらないように注意しながら、戦う二人を見上げていた。

何もできないこの状態に歯がゆさを感じ、雨瀉さんの勝利を祈ることしか出来ない。

同じような攻防を何回も繰り返し、どちらもこの硬直した状況を打開するべく、チャンスをつかがう中、先に男が仕掛けた。

「はぁ！」

周りの空中に赤い光を集め、周りに剣を十本ほど浮遊させると、手に持っていた二本の剣を飛び回っている端末に投げる。

それが当たるかを確認するよりも早く次の剣を手に取り、また投げるといったことを繰り返す。

最後の二本を投げずに両手に構えたときには、二機を残して端末は撃墜させられていた。

その間に雨瀉さんは攻撃を仕掛けるということはせずに

「オープン開口、リンク起動」

『葉切』と『貫葉』を穴に放り込み、右手でガトリング砲『乱れ葉』、左手でバズーカ『落ち葉』を引つ張り出す。

ズドドドドドド！

ズドン！

威力は低いが多数の光弾と威力は高いが連射性の低い光弾による弾幕が張られる。

流石にその数の光弾は剣で捌ききれずに回避行動と片手を空けて、赤い壁を張ることで弾幕から逃れている。

男は弾幕を掻い潜り、近づこうとするが、雨潟さんが二つの巨大兵器を持つているせいで移動スピードが落ちているにも関わらず、その弾幕の壁の厚さから接近することが難しく、先程より接近する回数が減っている。

多少は無理をして弾幕の雨を突っ切ろうとするときもあるが、いやらしいタイミングで残っていた二機の端末が妨害するように攻撃を仕掛けているせいで今度は男が劣勢に追い込まれていた。

男の戦略ミスのおかげでどうにか優勢に立ち、このまま押し切りたいところだが、いつまた流れが変わるかわからないのでどうにかここで決めたい。

が、終幕は唐突に訪れる。

「——っ！生体反応！？廻さん、気をつけてください！誰かが傍にいます！」

「何だって!？」

急いで周りを確認するが、周りには白っぽい建物などが相変わらずあるだけで、それらしき姿は見えない。

雨潟さんはあいつを釘付けにするためにこちらにはこれそうになり。

いつたい、どこから来るのかと警戒心を高めていると

「お兄ちゃん？」

聞こえるはずがない声に一瞬、思考が凍りつき、その後、すぐに声の方へと振り返る。

上の二人がいる位置からは建物が邪魔して見えにくくなっているその位置にいたのは俺の予想通りの人物で、いつもは天真爛漫に明るいその表情が今は不安からか曇っていて、くりつとした目の端には薄っすらと涙が溜まっている。

「やつぱり、お兄ちゃんだ。ねえ、ここ何処なの？いきなり、お母さんとお父さんがいなくなって、周りが変になったと思ったら凄いい音がして、ピカピカ何かが光って」

知り合いを見つけたからか幾分かホッとしたような様子を見せつつも、不安を隠せないまま俺のほうへと近づいてくる。

「空間歪曲！いつたい何を！」

叫び声に頭上へと視線を戻すと、男は剣を捨て両手を前にかざしていた。

両手の前の空間が歪んでいて、そこに向かって『乱れ葉』から放たれたと思われる青い光弾が向かっていく。

「お兄ちゃん？」

再び、視線を変えると

「——っ!!」

建物の影にいるせいで上空の戦闘が見えていないその人物が今まさにさしかかろうとしている建物の角でその人物から見えない位置に、上空に開いているのと同じような歪みが存在していた。

それが何かと考えるよりも早く、直感的に理解した俺は遠ざけようと口を開こうとするが、それすらも既に間に合わない判断すると、その人物に向かって走り出し、

「え？」

そこにいた天理 命を突き飛ばし、歪みから飛び出た青い光弾をこの身に受けた。

転 3

天理 命という少女は恵まれていると同時に不幸な少女であった。

彼女の両親はとても仲がよく、命のことを可愛がっていた。

しかし、父親である翔太郎が友人に騙されて、多額の借金を肩代わりさせられてしまつて以来、貧しい生活を強いられた。

貧しくとも仲が良い夫婦である二人の絆は壊れることはなく、むしろ逆境をとみに生き抜いていこうと絆が深まりはしたのだが、翔太郎は月々の返済と生活費を稼ぐために仕事を多くこなすようになり、家には不在になりがちになっていた。

そんな家族を自分も助けようと恵まれた才能もあり独学で工学知識を身につけた命は家の電化製品の修理や他人の電化製品を有料で修理し、金を稼ぐことで家族を助けていた。

そんな命は小学校では男子、女子問わずに人気がある。年齢にそぐわない落ち着きや生まれ持った容姿、性格、そして優秀な頭脳は皆の憧れの的であった。

しかし、小学校の男子の中には好きな子に素直になれずに苛めてしまふ子供もいた。

そんな子供があるとき、他人が捨てていた電化製品を命が譲ってもらつ現場を見てしまい、その子供と一緒にいた友達二人と共に命に対して馬鹿にする言葉をぶつけた。

良くも悪くもそれまで人気者で人の悪意に触れたことがなかった命はその状況に怯え、ぶつけられない怒りを感じることしか出来なかった。

しかし、そんなところにやってきた人物がいた。

入居者が出て行ってしまい誰もいなかったアパートにこの一週間ほど前から新しく住みだした住人、尾形 廻だった。

廻が偶然、通りかがったときにこの現場に出くわし、世話になっている大家の娘ということで助けてやろうと思い、命の周りにいる少年たちに声をかけた。

少年たちは廻の顔を見て、その目つきから不良と勘違いし、あつという間に逃げ出してしまった。

廻は自分の目つきの悪さが役立ったことに喜べばいいか、嘆けばいいのかどうでもいいことを考えながら残った命へと声をかけた。

正直、命は廻のことが苦手だった。理由は言うまでもなく、目つきや雰囲気怖いからだ。しかし、助けてもらったお礼を言わないのは礼儀に反すると思い、素直にお礼を述べた。

廻がどうしてこうなったのか聞くと、命は経緯を説明した。

ちょうどその時、廻の部屋のパソコンの調子が悪かったため、修理が得意という命に修理を頼むことにした。

命が譲り受けた物を廻が持ってやりながら、アパートに帰り、命の家に荷物を置くと廻は自分の部屋に招き、パソコンを見せた。

それをあつという間に命が直すと廻は命を褒めながら頭を撫でてやった。

そこで命は廻が怖い人ではないのかと思うようになり、そう思うとさつき助けたもらったときの姿が颯爽と駆けつけてくれたヒーローのように思え、今頭を撫でてくれる手を温かいと感じた。

子供であるがゆえにヒーローのように現れた廻を慕うようになり、それが小さな小さな淡い恋心の芽生えでもあった。

ゆえに、目の前の光景を信じたくはなかった。

「お兄ちゃん………?」

目の前には体中から血を流しながら倒れている廻の姿。

段々とその周囲を漂う白い光の残滓が薄れていく。

命には訳が分からなかった。いきなり変な場所に迷い込み、知り合いを見つけたと思ったら突き飛ばされて、そして、目の前を青い光がたくさん通って、廻が血を流して倒れている。

訳がわからないが、廻が血を流して倒れたまま動かないことはその眼にしっかりと映り

「い、いやあああああああああああああああ!!」

現実を否定するように悲鳴をあげるとぶつつりとその意識が途絶えた。

あまりにショックな出来事を目前に心が意識を保つことを拒否してしまっただ。

そして、同様に混乱の渦に陥っていたのが、青い光弾を撃った本人であるつむぎだった。

悲鳴が聞こえたので視線を向けてみれば、そこには血を流して倒れふす護るべき存在。

その近くに残る歪みのあとを発見したことでその高性能な頭脳がああなっただ経緯を推察してしまう。

そして、その経緯を察したことで電腦にノイズが走り、攻撃の手を止めてしまう。

「終わりだ」

「——っ！」

ハッとしたときには既に遅く、右手の『乱れ葉』ごと胴体を真横に切られ、地面に落ちていく。

斬った男はその様子を見届けることなく、気絶した命に近づき、彼女を抱える。

「ここまでは予定通り。あとは爆発が外に出ないように空間を維持したまま、この子供を外に放置し、偽装した男の遺体を浮かべれば

任務完了か」

確認するように男は独り言を呟くと、その姿が蜃気楼のように揺らいでいき、その空間からいなくなつた。

右手と胴体を深々と切られ、体の内側で配線がショートを起こしていながらも、地面に墜落したつむぎは意識を保ち、左手で体を支えながら立ち上がった。

「廻さん……………」

倒れている廻のほうを見ながら、つむぎは生まれて初めてとなる弱い声を出していた。

その機械仕掛けの胸中によぎるのは、自分らしくあれとアンドロイドの自分に言う廻、プレゼントをくれたときの廻、この二つを始めたにたった三日、実質二日の間しかなかったが、その間の廻の様子が思い出されていた。

「ごめんなさい」

使命を果たせなかったことによる博士への謝罪ではなく、護れなかったことに対する廻への謝罪がこぼれた。

そして、廻が死んだことによって動力炉の暴走が始まると思い、諦めて俯く。

が、しかし、いつまで経っても暴走が起こる気配がない。

「何で……」

白い空間でつむぎはその現実には戸惑いながらも、何故爆発が起きないのかを考え、ハッとして倒れている廻の元へ壊れかけの体を引きずっていく。

「もしかして」

倒れている廻を仰向けにして、胸に手を当てる。

トクントクン

「やっぱり生きてます!」

微かにだが、手から感じられる鼓動につむぎは信じられないものを感じつつもこの奇跡に感謝を禁じえなかった。

一番威力低い『乱れ葉』の光弾とはいえ、生身で受けたら普通なら生きているはずがない。

そのことがデータで誰よりもわかっているがゆえにつむぎの驚きは大きかったのだが、驚いて呆然としているよりしなればならぬことを考える。

「出血量が多い、それに衝撃で骨折も。早く治療しないと死んでしまいます。……私の修理も含めて『隠れ家^{ラボ}』に避難したほうがよさそうですね」

つむぎは左手に廻を抱きかかえるとちゃんと動けるように体のバランスを把握する。

「この空間から出られるかどうかわかりませんが、——亜空間展開装置、起動リンク」

つむぎは甲高い音を聞きながら、塵気楼のようにその白い空間から消えていった。

聞きなれない物音が耳に響き、ゆっくりと目を開けていった。

「……知らない天井だ」

前に雨漣さんの部屋に運ばれてきたときと違い、今度は本当に俺が全く知らない天井だ。

「起きましたか、廻さん」

雨漣さんの声が聞こえたので、体を起こしそちらを向こうとしたのだが

「いつてえ！」

全身から痛みが走り、身悶えるはめになった。しかも、身悶えてもまた痛みが走るといふ無間地獄だった。

「動かないほうがいいですよ。出来る最高の治療を施しましたが、死ぬ一歩手前だったんですから」

「死ぬ一歩手前？」

意識を失う前に何があったのかをゆっくりと思い出していく。

確か、雨潟さんとテーマパークに行つて、絶叫アトラクションに乗つて、動物と触れ合つて、ぬいぐるみをプレゼントして、敵が襲つてきて――

ガバツと痛みを無視して起き上がる。

「命は！？命は大丈夫だった、の、か？」

命があつた場に現れたことを思い出して、その無事を確認するために声がしたほうを振り返つたのだが、

「命ちゃんは無事です。恐らく今は親元に帰っているでしょう」
「な、ななな、何で風呂に入ってたんだ、あんたはー！」

そこで見たのは服を脱いでバスタブに溜まつた緑色の液体に浸かっているつむぎの姿だった。

叫びながら首を違う方向へ向ける。

「これですか？一応、修理の一環です。私に使われている金属は少々特殊で、ある程度の自己再生能力を持っているんです。この液体はその再生を早める効果があります」

「へえ、そうなのか。――じゃなくてな！男の前で女が無闇に肌

を晒すんじゃない！」

「大丈夫です。私は気にしませんから」

「俺が気にするんだ！」

「しかし、これは修理なのでそう言われても困ります」

「別の場所で行ってくれよ」

「廻さんの看護もしないといけなかったので、ここで修理をしていたのですが」

それを言われると、反論のしようがない。

「ところで、ここは何処だ？」

「ここは『隠れ家^{ラボ}』です。アパートのあの部屋では入らない機材や見つかると思うものなどはここに置いてあります」

周りを見てみると多くの機械が置いてあり、配線が床の至る所に張り巡らされている。

天井からのライトによる光で辺りを見渡すのには困らないが、俺の見える範囲に窓らしい物が一切見えない。

体を無理矢理動かしたことで痛みが走るが、不意をつかれたのでなければ我慢できないこともない。

そして、痛みを再認識したここで痛みを感じるようになった原因を思い出した。

「よく生きてたな、俺」

正直、自分でも死ぬと思っていた。

確かに死ぬのは怖いが誰かを、特に知っている人間を見捨てる気にはなれなかったの。でつい体が動いて光弾に身をさらしたがこうして再び、目を開くことが出来るようになるとは思わなかった。

服はどうやら使い物にならなくなったよう。で上下ジャージに着替えさせられている。

「普通なら死んでました」

「じゃあ」

「廻さんはいったい何を考えているんですか？私があなたを護るために敵と戦っているのにそのあなたが自分の命を投げ出して私のしたことが徒労になってしまふではありませんか。奇跡邸に助かったからいいようなものの。今後はこのような行動は慎んでください」

言葉を遮り、いつもより硬めの声音でまくし立てるように俺に言葉を送ってきた。

「……あゝ、怒ってるのか？」

「怒ってません。注意しているだけです」

「その、悪かった」

「謝らなくても結構です。行動で誠意を示してください」

なんだか急に人間っぽくなったなと思っていると、頭に何かが当たった。

「いてっ」

「廻さんの治療をしたときに見つけたのですが、それ、どこで手に入れたんですか？」

投げつけられたらしく、俺の頭に当たり地面に落ちたそれに視線

を落として、拾い上げる。

「ああ、これは確か雨潟さんに会った日に人が落としたのを拾ったんだよ。これがどうかしたのか？」

投げつけられたのは十字架を模したシルバーアクセサリーであり、ヤクザらしき人物に連れて行かれた男が落としたものだった。

制服のポケットに入れっぱなしだったのだが、テーマパークに行くときにアンリミズからもらった防犯グッズ（？）を私服のポケットに入れるときに制服のポケットに入っていたそれを他のものと一緒に突っ込んだので、一緒に私服のポケットに十字架も入れてあった。

「それは未来で出来た武装の一つです」
「・・・・・・は？」

思わず雨潟さんのほうに振り向いてしまう。
彼女はバスタブの縁に左腕を重ねて、その上に顔を置いている。
肩から下はバスタブに隠れて見えないが、上は白い素肌が露出していて若干液体で湿っていることもあり、艶やかな印象を受けてしまう。

「名称『ストレンジス』。ミステイリーネ様が開発された人体強化技術が利用されている私がきた未来では研究者なら手に入れようと思えば、簡単に手に入る代物です」

「こ、これがか？」

その姿を思わず凝視してしまいそうになるが、自制心を振り絞って視線を何とか逸らすことに成功する。

「はい。廻さんが生き残ったのは『ストレングス』の緊急防護機能が働いたからです。それのおかげで本来なら耐えきれない光弾をギリギリで耐えることが出来たようです」

「……………とんでもないラッキーだな」

もしこれ持ち主であつた男に会わなければ、もしこれを拾わなかったら、もしこれを持って行つてなかったら、もしこれで耐えきれない威力の攻撃だったら、幾つもの偶然が積み重なりこうして命を繋いでいられるのだから幸運以外の何者でもないだろう。

「そうとなると、四日前と一昨日に廻さんが襲われたことにも納得がいきます。恐らく、あのときの『調整者^{リバーサー}』は廻さんの命が狙いではなく、この時代にあつてはならない『ストレングス』の回収が目的だったでしょう。三日前の彼らを私があつさりと撃退してしまいかつ私が未来の技術で創られた機械を廻さんに埋め込んだために一昨日はあんな大袈裟な軍勢になったのでしょうか」

「そういえば……………、確かに初めて俺を襲った奴らは何か探してみたいだったな」

鞆を漁っていたし、よく考えてみれば奴らの力ならあつさりと俺を無力化できるのだからあんな風にいたぶる必要はない。あれは単に俺が奴らの行動を邪魔しないように大人しくさせるためだったのではないだろうか。

「って、ちょっと待て。——三日前？あの男に襲われてから一日経ったのか？」

「丸一日というわけではないですが、日付が変わって現在の時刻は午後一時をまわったところです」

「そんなに時間が経ったのか」

「はい。状況はかなり不味いです。昨日、相手は廻さんが死んだと思いい、私の爆発に巻き込まれないように早々に離脱したのですが、私達がこうして生き延びていることはすでに知られ、夜中のうちにダミーの施設が次々と破壊されました。ここにたどり着く前に朝を迎え、一度撤退したようですがあと数時間もすれば再び日が沈み始め、私達を排除するための活動を再開するでしょう」

「不味いどころじゃないだろ。絶体絶命じゃないか」

予想以上にまずい状況に表情が青ざめていくのが分かる。

「それまでに動けるようにはなりそうなのか？」

「私の修復自体はもうすぐ終わります。が、『乱れ葉』は一機が大破、もう一機が中破し、そちらの修復は間に合わないので昨日のように弾幕を張って対抗するといった手段がとれないず、こちらがかなり不利であると言わざるを得ません」

「そうか……」

どうやってあの男に対抗するか必死に考えを巡らす。

あの男の恐ろしいところはその近接戦闘能力の高さだろう。近接戦闘に限っていえば、完全に雨瀉さんより上の強さを持つあの男を迂闊に近づかせれば反撃するチャンスがない。しかし、距離をとるうえにもあの男のほうが速いためすぐに距離を詰められてしまう。

あいつに勝つためには雨瀉さんがどれだけうまく間合いをとることが出来るかにかかっていると言っても過言ではない。

「すみませんでした」

俺が考え込んでいると、唐突に雨瀉さんが俺に謝ってきた。

「何のことだ？」

「策が無駄になってしまったこと、護るはずだったあなたを撃ってしまったことです」

「あれは、しょうがないだろ。相手がああいう技術を持っていることは分からなかったんだし、俺が撃たれたのもあいつが何かやったせいだしな」

予想が出来ていなかったことが起こってしまったことは仕方のないことだろう。

「ですが！」

雨潟さんが珍しく大声を出したので、そちらを向くと、彼女はやや俯きがちになり、左手で掴んだバスタブの縁を強く握りしめていた。

「ですがっ、あの男は去り際にこう言っていました。ここまでは予定通り、と」

「予定通り？」

そんなはずはない。

未来から俺を護るためにやってきた『時間逆行存在』^{イレギュラー}である雨潟さんがここにいるのだから、予定通りに進むはずがない。

「恐らく、私が未来から送り込まれることも歴史の一部なのでしょう」

しかし、俺のそんな考えは打ち砕かれていく。

「待てよ、未来からの存在はあり得ない因子ってやつなんじゃないのか？」

イレギュラー

「確かに未来からやってきた『時間逆行存在』は本来の歴史をねじ曲げてしまうあり得ない因子です。ですが、歴史をねじ曲げようとするのが歴史によって定まっていたとしたらどうですか？・・・

・私を創った博士は『変革の賢人^{ミイミル}』の一人です。その影響力は大きく、行動が常人より細かく定められています。未来において博士が過去を変えようとするのが定められた歴史なら、それによって送り込まれた私もこの時代で登場すべき存在ということになり、歴史に組み込まれることになるのではないのでしょうか」

「それは」

「そう考えると、あの男がすぐに廻さんを狙わずに私との戦闘に応じたのにも説明が付きまします。しかるべきタイミングで私があなたを撃つように待っていたのでしょう。つまり」

雨瀉さんは完全に下を向き、俺からはその表情は見えない。

「私はっ、あなたを護る存在ではなくて、あなたを殺す存在だったんですっ！」：

震える声でそう叫ぶ彼女はまるで子供のように迷子の子供のように弱々しく見えた。

俺を護るための存在として生み出されたはずが、歴史が定めたのは俺を殺す役割という正反対だったことを知り、その根本のアイデンティティを破壊された彼女はアンドロイドであるが故に存在意義を否定されたダメージは人一倍大きく、どうすればいいのか分から

なくて、真つ暗な闇の中に取り残されたかのように途方にくれているのかもしれない。

俺は声と同様に静かに肩を震わせている彼女に近づいていく。

必然的に何も身に纏っていない彼女の姿も目に入ってくるのだが、今はそんなことは気にならない。

俯いて震えたまま俺が近づいたことにも気づかない彼女に俺は

その頭にチョップを振り下ろした。

「あうっ!？」

多少は硬い感じはしたが、肌や髪に触れた感触はやはり人のように柔らかかった。

彼女はいきなりチョップされたことで戸惑った表情で目の端に水滴を溜ながら俺を見上げる。

だから、俺は言っただけだ。

「そんなことはどうでもいい」

俺の言葉に一瞬啞然とした後に立ち上がり、俺をにらみつける。

「どうでもいいって何ですか！？私はあなたを殺すものなんですよ！実際にあなたを撃ったんですよ！」

「でも、俺はこうして生き延びてんだからどうでもいいだろ」

「ですが！撃ったという事実は変わりません！」

「わざと俺を撃ったわけでもないし、今後、俺を殺そうとするわけでもないんだろ？」

「それはそうですが！」

「だったら、もう十分だろ。謝ってもらったし、敵になるわけでもない。他に何の問題がある？」

「私は！私はっ！廻さんを護るために創られたのに！それなのに！」

「ああ！ぐだぐだうるさいんだよ！」

俺が叫ぶと彼女はビクツと肩を震わせる。

「だったら、護ればいいだろう！」

「え………？」

「俺を撃ったとか！殺すことが役割だったとか！そんなもう過ぎたことはどうでもいいだろう！今からあんたがどうするかだろう！そんなに俺を護ることにこだわるんだったら今後俺を狙う奴等から護ればいいだろう！」

俺の叫びに目を白黒させながら彼女は呆然と聞いている。

「っーかよ。歴史を変えようとしているんだから、歴史に決められた役割なんか気にする必要ないだろ？雨瀉さんが俺を殺す役割だったとしても、それを護る役割に変えてやればいいだろ」

俺がこうして生き延びている以上、ちよつとだが歴史はずれ始め、あの場で俺を殺すはずだった彼女の役割は避けられたのだから、今後敵の襲撃を退けることで護る役割を果たせる。

「情けない話だが、俺だけじゃこれから俺の命を狙ってくる奴等を退けることなんて出来ない。雨瀉さんの力が必要なんだよ」

「……………」

「そっいゃ、今までちゃんとやってなかったな。頼む——、俺を護ってくれ」

俺はそう言っ、頭を深く下げた。

俺は彼女の答えが返ってくるのを頭を下げたまま待つ。
しばらくの沈黙の後に彼女はゆっくりと口を開く。

「私は……………」

彼女の体の震えは止まり、

「私はあなたを護ります。それが私の存在意義で、それは私の想いです」

凜と、はつきりと、心の籠った、決意を示した、宣誓をした。

「——ありがとう」

その頼もしい宣言に俺は口の端が僅かに吊りあがったのを感じた。
今まではただ単に状況に流されて彼女に護られてきたが、このとき、初めて彼女との間に信頼の絆が出来たように思えた。

「……………あの、いつまで頭を下げてるんですか？」

「いや、さつきまでは勢いもあつたし、ほとんど雨瀉さんの顔に集中してたから気にならなかつたんだが……、今、顔を上げたら、なあ。ほら、何も身につけてないだろ？」

深く頭を下げているため、バスタブの縁とその内側にある白い素足が見えているのだが、その上も何も身につけていない状態では俺は顔を上げることが出来なかった。

「——っ。そ、そのまま、後ろを向けばいいじゃないですか？そのままですよ？」

「そ、そうだな」

一気に何とも締まらない雰囲気へと変わってしまった。

転 4

『隠れ家^{ラボ}』があつたのは人気のない工業地域の一角の地下であり、三日前に俺が襲われた場所に割りと近い位置だった。

予想していなかった三日目の襲撃の現場に駆けつけることが出来たのも、『隠れ家^{ラボ}』の設置で偶然近くにいたからだっただろうだ。

「あゝ、いてえ」

上下ジャージ姿の俺は『隠れ家^{ラボ}』の近くの路地を体の痛みを感じながら歩いていた。

雨潟さんは最終調整があるらしく、恥じらいを覚えた彼女は様子を見ないように俺に言ってきたので、だったら俺は体を慣らすために外へと出ることにした。

ただし、ちゃんと日が沈み始める前に戻ってくるようにしっかりと念を押されたが。

右手首には『ストレングス』をぶら下げていて、その十字架部分が薄く白い光を発している。

『ストレングス』には自然回復を促す機能が備わっているらしく、簡単に『ストレングス』の使い方を教えてもらい、こうしてその機能を活用していた。

「ん？」

『隠れ家^{ラボ}』を設置しただけあって、ここには人気があまりない。
ましてや、今日は日曜なので人が来ることなど皆無に近いはずなの
だが

「・・・・・・・・きなくせえ」

少し先にある車が通れる通りの倉庫の前に一台のワゴンが止めて
あった。

こっそりと様子を伺っていると、明らかに見張りと思われる人物
が怪しげな黒服の男が二人立っていた。

ただでさえ厄介なことを抱えているに変なことに巻き込まれるの
はゴメンだと思い、踵を返したのだが

「――」

聞こえてきた声に足を止める。

「・・・・・・・・まさかな」

気のせいだと思ったが、どうにも気になってしまい、見つからな
いように迂回して、中の様子が伺える窓を見つけた。

そこからこっそり中を覗きこむ。

「だから嫌だつて言ってるでしょ！」

「君の拒否権などないとこちらも何度も言っているのですがね」
「何でいるんだよ・・・・・・・・」

中には予想通り、アンリミズの姿があった。

しかし、その手足は縄で縛られ、ここから見える限り五人の黒服の男に囲まれている。

「リーダー」

「何だ？」

「警察がこちらに向かっているそうです」

「警備の穴をついたとはいえ、そう時間も稼げないか。では、予定よりやや早いが場所を移動するぞ」

一人の男がアンリミズに話しかけていた男に報告すると、リーダー格の男の指示で他の男達が動き出す。

「君も来てもらおうか」

「嫌よ！」

リーダーが懷から拳銃を取り出し、アンリミズに突きつける。

アンリミズは怯まずにリーダーを睨みつける。

その様子にリーダーはアンリミズに近づき、グリップの底で頬を張る。

「うっ」

「いつまでもそんな口を聞いていられると思わないことだ。拠点に戻れば、拷問にかけて無理にでも私達の組織の武器開発に協力してもらう」

そういえば、アンリミズは兵器開発の天才だったな。

何処の三流映画だ、と軽く現実逃避をしながら、三流映画だと俺がアンリミズを救出する役かと気付く。

再び、中を覗くと男達がアンリミズの両腕を捕まえ、引きずっていかうとする姿が見える。

正直、さっき拳銃を見たときにあまり驚かない自分がいた。

まあ、雨潟さんの武装のほうがよくばど物騒だから感覚が麻痺しているのかもしれない。

しかし、もし相手にするとすると少し喧嘩が出来るだけの一般人である俺は明らかにその筋の人間だと思われる男達を普通なら相手に出来ないだろう。

・・・・・・そう、普通なら。

右手首にぶら下がっている『ストレングス』を見る。

使用方法を聞いたときにその効果の程を試したのだが、流石は異常に発展した未来の技術だけあって洒落にならない効果を発揮した。

「放っておくわけにはいかないよな」

ワゴンが置かれている入り口が見える角に移動して、様子を伺う。

アンリミズを除いているのは合計七人。

全員が銃を持っているとしてもここから入り口までの距離ならど

うにかなるだろう。

「………^{ブースト}強化」

『ストレングス』の十字架部分が白く光るとふっと体が軽くなった。

手を閉じたり開いたりしてその調子を確認すると、タイミングを待つ。

アンリミズが入り口から出てきて、ワゴンまでの中間距離に來ると

「——っ」

一気に躍り出て、間合いを詰めていく。

俺のいた角の方向を見ていた男がすぐに気づき、懷に手を伸ばす。

「だれえ！」

「しっ！」

言い切るよりも速く、異常な速度で接近した俺はその男の胴体に前蹴りを打ち込む。

そして、足から相手の骨を何本も折った感触を感じた。

人間は脳のほとんどを使っておらず、肉体にもリミッターをかけているという。

『ストレングス』は脳を活性化した上にリミッターを外し、その動きに耐えられるように筋繊維や骨などをそれに耐えられるように強化し、更には痛みも感じにくいようにするものらしい。ちなみに、動力は膨大なエネルギー量は得られないものの辺りの空気を僅かに取り込み分解することで半永久的に動くエコなものだそうだ。

つまり、『ストレングス』は人が出せる限界の力を引き出せるのだ。それに加え、その動きによる空気摩擦などを防ぐために体表に保護スキンも張るらしい。

未来において、その保護スキンは攻撃を防御する際には紙のように意味を成さないのだが、現代技術においてはそこその防御力を発揮する。

続いて、いきなり状況についていけずやっとなにに手を伸ばすアンリミズの両脇にいる男の腕を捻り上げ、アンリミズを解放させるとそのまま腕を引っ張って二人を地面に叩きつける。

続いて、近くにいた一人の腹に右拳を突きこみ、少し離れたところにいる男二人にも拳を叩き込み、リーダーに攻撃しようとする流石はリーダーだけあって反応もよく、素早く銃を構え、早撃ちで発砲した。

弾丸が飛んでくるのを目で確認しながら、拳で弾丸を叩き落とすと二発目を打つ前に回し蹴りを脇に叩き込む。

最後に銃をこちらに向けようとしていたワゴンの運転席に乗っている男に近づき、窓ごと顔面を殴り飛ばす。

顔を殴るときは力加減をして殺してしまわないように注意する。

一瞬のうちに七人を無力化すると

「^{ダウン}解除」

十字架の光が消えると、体が少し重くなったように感じ、通常の状態へと戻ったことを確認する。

銃弾を叩き落したり、窓をぶち破ったりしたのだが、保護スキンのおかげで傷一つついていない。

「こんな圧倒的な力を持っていたはずなのに何故、元の持ち主が『リバーサー調整者』らしきあのヤクザもどきに負けたのか疑問に思ったが、雨潟さん曰く、あくまでこれは身体能力を限界まで引き上げるものであり、恐らく研究者あがりのその男では戦うといった経験がなく、十分に使いこなせなかったことが原因ではないか、とのことだった。

改めて、未来技術の凄さを感じていると

「わ、わるきち？」

「つと、大丈夫だったか、アンリミズ？」

踵を返すとへたり込んでいるアンリミズに近づき、手足を縛っている縄を解いていく。

「どうして」

「どうしてここについていう質問なら、偶然だ。で、どうして助けたのかって質問なら見過ごすわけにもいかなかったからだ」

アンリミズはポカンとした様子で俺が縄を解く様子を見ている。

「これでよし。立てるか？」

「あ、うん」

俺が手を差し出すとその手を取って立ち上がる。

「じゃあ、俺は行くな。こいつらの話だともうすぐ迎えが来るらしいから大丈夫だろう？」

「え、あ」

「それと、俺がここにいたことは秘密にしてくれよ。面倒なことに巻き込まれるのはごめんだからな」

「ちょ、ま」

「じゃあな」

アンリミズに落ち着く間も与えずに、一気に捲くし立ててその場を足早に去っていった。

助けはしたものの事情聴取でもされて、踏み込んだことを聞かれたら誤魔化せる気がしないので捕まる前に逃げることにした。

足早にそこから去る俺はその後ろ姿をアンリミズがポーツと見ていることに気付かなかった。

結 1

「・・・・・・・・」

もうすぐ陽が沈もうとする時間帯、俺と雨潟さんはある廃工場の中で敵を待ち構えていた。

しかし、雨潟さんは無言で俺に圧力をかけてきていて、気まずいことこの上ない。

俺は上下のジャージ姿で『ストレングス』と短い棒を所持している。

雨潟さんは白いロングスカートに白いシャツという格好にそれぞれの手にライフル『貫葉』を携えている。

「いや、悪かったって」

「悪いとは言つてません。すでに私も廻さんも歴史の歪みそのものですから何かしらの変化が起こってしまうのは避けようのないことです」

『隠れ家^{ラボ}』に戻った後、アンリミズを助けたことを話したのだが、どうやら放っておいても逃げ出している途中で包囲され、犯人達は捕縛、アンリミズも無事に救出されるはずだったらしい。

つまり、俺がしたことは余計なお世話だったということだ。まあ、後悔はしていないが。

「じゃあ、どうしてそんな不機嫌なんだよ？」

「別にそんなことはありません。それよりも、体のほうは大丈夫ですか？」

「ん、ああ。痛みが完全に抜けたわけじゃないが、動く分には問題ない。そっちこそ大丈夫なのか？」

「それこそ問題ありません。破損した部位はしっかりと修繕しました。『乱れ葉』が直らなかつたのは残念ですが、それは予想されていたことです」

「そうか」

「……………廻さん」

雨瀉さんが不安げな表情でこちらを見る。

「本当によろしいのですか？」

「ああ、こうでもしないと勝ち目がなさそうだからな」

「確かにこの作戦なら勝率は上がりますが、そのぶん廻さんも危険にさらされますよ？」

「それで怯えて隠れていても殺される可能性があがるだけだろ。それに昨日の戦いでは見てるだけで齒がゆい思いをして今日も見ているだけっていうのは俺が納得いかない。——何より、護ってくれるんだろ？俺のことを」

「あ」

「俺は多少危険な目に晒されてもあんたが護ってくれるって信じるさ」

「……………はい」

俺たちがそんな会話をしていると

ズオオオオオオオ

体の底を震わせるような重低音が響くと、一瞬の違和感の後に世界は黒が薄まった白の世界へと移り変わった。

「来た！」

「上です！」

前方の天井を突き破り、剣を持った昨日の男が赤い光を纏いながら床に舞い降り、地上に立つと光が霧散した。

「まさか、あれで生きているとはな。予定通りに進んだかと思っただが、こんな事態になるとは思いもしなかったぞ」

「そう簡単に死んでやらねえよ」

「いきがるなよ。多少、寿命が延びただけのこと、今日ここでお前は死ぬ」

「それはどうか。形成^{セット}」

右手に持っていた短い棒の先端から白い光が伸びた。

『ストレンジス』と同じエネルギー、空気を分解するエコなエネルギーを使用したビームサーベルだ。

『隠れ家^{ラボ}』に置いてあった装備の一つで、『葉切』には威力は劣るが、あの男と斬りあう分には問題はないそうだ。

「貴様が戦うつつもりか？」

「そういうことだ」

嘲笑を浮かべる男に対して、俺は強気を保つ。

「^{ブースト}強化」

『ストレングス』が光り、ふっと体が軽くなる。

「強化装置か。だが、そんなものを使った程度でこの私に勝てるつもりか？」

「やってみなくちゃわからないだろ」

実際は強化してもこの男には適わないだろうと雨潟さんからも言われている。

俺と男の間で緊迫感が徐々に高まっていく。

「待ってください」

そこに雨潟さんの声が割り込む。

「——— 少しでも教えてほしいことがあります」
「質問による」

雨潟さんは少しだけ躊躇った後、意を決して口を開いた。

「私は、昨日、廻さんを殺すはずだったのですか？」

推測はしていたが、確証はなかったことを聞き

「そうだ。お前は昨日、その男を殺した上で暴走し、その男の体」と消滅するはずだった」

推測を肯定された。

改めて、聞かされると辛いものがあるのか、僅かに顔を歪ませた。

「その後、こちらで用意した偽者の死体を発見させ、未来のものであるお前の記録を処分すれば全ては歴史どおりになっていた」

「私は未来から来た存在なの？」

「お前は特例だ。未来で作られ、過去に歴史を刻まれる唯一の例外だ。それが歴史が正しく進むために必要なことであつたからな」

「そう、ですか」

彼女は一度俯き、顔を上げると右手の『貫葉』の銃口を男に向ける。

「なら、私はその運命に抗います。私は廻さんを護るために生まれ、護るために生き、護るために戦う存在であると、歴史に刻みつけてみせます」

その目に迷いはなく、その声に動揺はない。

そうであると自分が決めた確固たる存在理由を宣言した。

「今日、ここで死ぬものにはそんなことは出来はしない」

「お前に決められる筋合いはない！」

そう叫びながら俺は飛び出した。

「おらっ！」

「はあ！」

俺が振り下ろした白いビームサーベルは男が振り上げた赤い光を

纏った剣に正面から激突。

「ぐっ」

あさつりと弾き返されたこの状況はやはり相手のほうが俺よりも力が上であることを如実に表していた。

素早く切り返される相手の剣が俺の胴を分断せんと迫るが

「！」

俺の後ろから伸びてきたビームに男は攻撃を中止して回避せざるを得なかった。

俺はその間に体勢を立て直して、再び切りかかっていく。

今度はそれを男は右にかわして、俺に切りかかろうとするが、

「くっ」

避けた先でまたしても襲ってきたビームに攻撃を中断する。

俺達が考えた作戦は至って単純だ。

一人で勝てないなら二人で挑めばいいといった極めて単純な作戦。

俺が前で接近戦を挑めば、雨潟さんはさっきのように銃撃で相手の動きをけん制する。

「ならば、お前からだ！」

雨瀉さんに接近しようとする男に対して、雨瀉さんが足止めのために銃を乱射する。

そう簡単に当たるわけもなく、かわされ、切り伏せられどんどん近づいていく。

「行かせるか！」

しかし、回避や迎撃で鈍った移動速度なら俺でも追いつくことが不可能ではない。

男が雨瀉さんに狙いをつけるならば俺がその妨害をする。

単純だが、単純ゆえに効果が出やすい。

「ならば！」

赤い光を纏う剣をもう一本作り出して、両手で二本の剣を持って俺に襲い掛かってくる。

一本でさえ苦戦するのに二本など相手に出来るわけもなく、後退して回避し、

「ロング長剣！」

ビームサーベルという実体をもつ剣ではないという性質上、出力を調整すればその長さを変えることぐらいわけではない。

伸びたビームサーベルで男の間合いの外から横薙ぎに切り払う。

「くっ」

赤い光を身に纏い空に飛んで回避しようとする男だが

「させません！」

頭上をビームで防がれてしまい、飛ぶタイミングを逃して赤い光が霧散し、ビームサーベルを片方の剣で受ける。

受け止めながら俺との距離を詰めようとするが、ビームによるけん制でまたしてもそのタイミングを逃し、俺はその間に剣を引き戻す。

「図に乗るなよ！」

男が再び赤い光を纏うと先程より速くなり、俺に突っ込んできた。

「——ショート短剣！」

今度はビームサーベルが短くなり、小回りが利くようにする。

あの速さを相手に小回りの利かない長剣で相手にしていたらあつという間に切り裂かれてしまう。

高速で間合いに俺を入れた男は二本の剣を上下左右のあらゆる方向から繰り出してくる。

俺はその攻撃を必死で防ぐことしか出来ないが、俺がこうして粘っているうちに雨潟さんから援護がくる。

援護のビームを避けた男は俺の相手をする事と止めて、先に雨潟さんを倒すべく高速で突っ込んでいく。

「重力場制御、起動^{リンク}」

しかし、雨潟さんと男をその内側に収めた青い光の円が出来たかと思うと、次の瞬間、その円の内部の地面が陥没する。

「ぐう！？」

「くっ」

明らかに鈍った二人の動き。

「貴様！」

「動きにくいでしょう？今、この円の中の重力は外よりずっと重くしました」

動きは鈍ったが、雨潟さんは銃口を男に合わせて引き金を引く。

「くっ」

ビームは重力の影響などものともせず突き進み、動きが鈍ったにも関わらず男は剣で切り伏せたり、回避することに成功する。

しかし、それで終わりではない。

「長剣^{ロング}！」

ビームサーベルを異常に長くした俺は重力場の外から男に切りか

かった。

「くそっ」

男は悪態をつきながらもその攻撃をかわし、剣を手放す。

すかさず、雨潟さんはビームを放つが

「ふっ！」

両手を突き出した男の目の前の空間が歪む。

命のときと同じものだと思した俺はその噴出口を探し、雨潟さんの背後に歪みを見つけた。

「後ろだ！」

「っ！」

気付いた彼女はそこから移動し、そして予想通り歪みに飲み込まれたビームは雨潟さんの後ろにあった歪みから出てきた。

出てきた歪みが消えたと思ったら、その間に男は自分で目の前の歪みに入った。

次は何処に歪みが出るか、辺りを見渡すがどこにも見えない。

どこに行ったのかと疑問が浮かび

「上です！」

彼女の叫びに上を見上げるよりも早く前方へと飛び込んだ。

後ろで剣が床を切りつける音を聞きながら前転をして、そちらに
向き直る。

「ショート短剣！」

「ダウン重力場制御、解除」

俺がビームサーベルを短くすると同時に青い光の円が解除された。

男は重力場から解放されて、元の速さに戻り、俺に向かってくる。

俺に向かってこられると、俺は短剣で防戦するしかなくなる。

右からの横薙ぎに始まり、左、上、下、左、右下、上、左上、右、
下と次々と二本の剣が繰り出される。

雨潟さんの援護を待っていたのだが

「くっ！剣が！」

その叫びに一瞬、気をとられた瞬間に剣ではなく、男の脚が俺の
脇腹に突き刺さり、後ろへと蹴り飛ばされ、地面を転がる。

「げぼっ！がはっ！」

恐らく折れた肋骨の痛みを無視して、起き上がり膝を立てると男
が目の前に立ち、剣を振り下ろそうとしていた。

「死ね！」

「ぐあっ！」

何とかビームサーベルを上に掲げ、受け止めるがその剣でビームサーベルごと押さえつけられているところにもう一本の剣が俺に迫る。

「させません！」

しかし、ビームが迫ってきたことで男は攻撃を中断し、距離をとり、俺の前に右手の武器を『葉切』に変えた雨潟さんが割り込んできた。

「大丈夫ですか!？」

「肋骨が折れたが、まだいける」

『ストレンジス』のおかげで痛みを感じにくくなっているおかげでまだ戦闘は続けられる。

「さっきはどうしたんだ？」

「射線上に剣を精製されまして、それに妨げられました」

「あいつも段々、こっちの攻撃に慣れてきたってことか」

男はこちらの様子を伺っているようですぐには攻めてこない。

「どうしますか?このままでは押し切られますよ?」

「とりあえず、今までの戦法では駄目だよな」

どうするべきかと考えていると、男が両手を前に掲げ、目の前に歪みを作り出す。

俺と雨潟さんは何処に出口が出来るか周りを見渡し、

「後ろだ！」

俺が後ろに歪みを見つけたのだが

「いえ、前です！」

そんな声がしたが歪みからは剣の切っ先が飛び出してきて、俺がそれをビームサーベルで弾くと剣だけが転がって

「きゃあ！」

俺が振り返ると、俺と男の間に割って入った雨瀉さんが歪みを通らずに突進してきた男によって横に弾き飛ばされて、俺は咄嗟に遠ざかろうと脚を動かすが、僅かに間に合わず左腕が斬られる。

「ぐうっ！」

俺が痛みに顔を歪めている間にも男は剣を繰り出そうとしてくるが、弾き飛ばされた雨瀉さんからのビームを後ろに飛びながらさけ、避けながらも俺に向かって赤い光弾を放ってきた。

俺は転がりながらその光弾をよけるが、そのよけた先に今度は剣が飛来してきた。

俺はその剣に対して傷ついた左腕を叩きつけて軌道を逸らすことで何とか回避した。

左腕はこれでビームサーベルをに握れなくなっただが、命を奪われるよりはましだ。

「はあああ！」

弾き飛ばされていた雨瀉さんが男に一人で突進していく。

俺が危機的状況になっているので、注意を引きつけるために向かっていったのだろう。

しかし、一対一それも接近戦では彼女に分が悪いことは昨日の戦闘から分かりきっている。

このままではすぐに二人とも殺されてしまふと感じ、状況を打開できる策を必死で考える。

このまま勝負を長引かせたらまず間違いなく勝てない。

だったら、一発逆転を狙わなければならない。

厄介なのはあの二本の剣と身体能力だ。

普通なら遠距離武器を持っているこちらのほうが有利なのだが、その身体能力で距離を無理矢理詰めて接近戦へと持ち込んでくる。

かといって、無理に距離をとっても空間を移動してくることが出来るあの男にはそれも意味をなさない。

どうすればいい、と必死に考え、怪我を負った自分が何を出来るのか考えたとき、自分が持っているものについて思い出した。

それが実際、どういうものなのか分かっていなかったのだが、こ

の戦闘の前に使えそうなものとして雨瀉さんにそれがどういうものなのか調べてもらい、その結果は……。

左手をポケットに突っ込みながら、頭の中で作戦が組み上げられていく。

勝算は低いが、このまま戦い続けるよりはまだましだ。

「ロング
長剣」

ビームサーベルを右手で持ち、左手は握りこぶしにして戦っている二人のところへ向かう。

「うおおお！」

「む」

俺の大上段からの振り下ろしを男は片方の剣で防いだ。

「はあっ！」

その隙に『葉切』を横に振るうが、もう片方の剣で防がれ、彼女は『貫葉』を至近距離で放とうとするが、それよりも早く男は彼女から離れていった。

俺はその隙に雨瀉さんの傍に駆け寄った。

彼女は僅かな間だけ、一対一で戦っていたのだが、斬られた傷が体中の至る所に出来ていた。

「大丈夫か？」

「廻さんのほうこそ」

お互いの有様を確認して、いよいよ本格的にまづくなってきたと
感じる。

「なあ、——つて、——」

「それでしたら、——」

「——で——だよな？」

「——から」

「だったら——」

視線は敵に向けたまま小声で確認を取り、作戦を伝える。

「そんな無茶です。失敗する確率のほうが大きいですよ」

「だけど、他に何か方法があるか？」

「それは」

「ないだろ？どの道、このままじゃ俺たちの負けだ。だったら、賭けてもいいだろ？」

「………わかりました。私も協力し、全力を尽くします」

「よし、じゃあ」

相手の様子を見て、タイミングを計る。

これをしくじれば俺に待っているのは死。

緊張が相手にも伝わり、俺達が何か仕掛けるのを悟ったのか、慎重にこちらの出方を伺っている。

俺たちの間の緊張はどんどん高まっていき、やがてそれが

「行くぞ！」

破裂する。

飛び出した俺を援護するように後ろからビームが飛び交う。

男もこちらに向かいながらビームをよけたり、斬ったりしながら近づいてくる。

まず、向こうから赤い光弾が飛んでくるが、俺は上半身を倒して身を更に低くすることでかわした。

続いて俺がビームサーベルを横薙ぎに振るうが、それを相手は跳躍することでかわし、同時に剣を俺に振り下ろしてくる。

「^{ショート}短剣！」

ビームサーベルを短くするとそれを受けて、すぐに切り返した。

そして、その切り反しに反応して剣で防ぎ、もう一本の剣で俺を貫こうとしたとき、俺は男の顔を目掛けて左手で握っていたものを投げつける。

男は反射的にそれを切り捨てる。

自分の目の前でアンリミズ印の閃光弾を。

「ぐわっ!？」

切られた瞬間、爆発的に光があふれ出し、俺達の網膜を焼く。

俺は事前にどうなるかわかっていたから目をつぶることでそのダメージを軽減した。

それでも見えにくいのが、目の前の男ほどではないだろう。

男は目を押さえたまま、覚束ない様子で剣を振るうが、俺はそれをのりくらりとかわしていた。

だが、予想以上に男の回復が早く、徐々にその焦点が戻り始めている。

どうするかと考えていると傷だらけの左腕が目に入り、即決して左腕を目の前の男のほうに振るう。

「ぐあー！」

すると、上手い具合に目に血が入ったようで、再び男の視界は見えにくくなり、剣がぶれる。

「くそっ！」

男が苦し紛れに前方に赤い光弾を放つが、俺はそれに当たることはなく、かわす。そして、再び視力が戻ってきたときには男の後ろに回り込み、羽交い絞めにする。

「くっ、そこか！」

背中に張り付いている俺に攻撃しようとするが、一歩遅い。

「俺達の勝ちだ」

「何？」

「——九十……百。エネルギー充填完了」

男が前を見るが、そこにいるはずの雨瀧さんの姿はない。

彼女はその上空でその身に青い光を纏いながら、バズーカ『落ち葉』を構え、エネルギーの充填を完了していた。

「撃てえ！」

「な！馬鹿か！巻き込まれるぞ！」

「『落ち葉』^{ファイヤ}開放！」

青い巨大なビームが俺と男に目がけて発射される。

このタイミングならもう歪みによる回避や防御は間に合わない。

「——同時に亜空間展開装置、^{リンク}起動。『^{イマジナリースペース}虚数空間』開きます」

キイイイイイン

「な！うおおおおお！」

甲高い音を聞きながら最後に見えたのは、青い光に吞まれる寸前の驚愕の表情をした男の姿だった。

さっきの相談内容はこうだった。

「なあ、『落ち葉』のエネルギー充填って、どれくらい時間がかかる？」

「それでしたら、一分もあれば」

「この白い空間は『イマジナリースペース虚数空間』で脱出できるんだよね？」

「はい。昨日はそれで出れましたから」

「だったら、俺が閃光弾を使って不意をついて一分を稼ぐからその間にエネルギーを溜めて撃ってくれ。そして、そのとき、俺は奴の近くにいたろうから『イマジナリースペース虚数空間』に逃がしてくれ」

俺が一分、男を足止めして雨潟さんがエネルギーを充填していることに気付かれないかがこの作戦の肝であり、最も危ない部分だった。

そして、俺は見事賭けに勝ち、暗い『イマジナリースペース虚数空間』へと退避していた。

少し立っていると空間が歪み、そこから雨潟さんが現れる。

「——敵の排除を確認しました。私達の、勝ちです！」

雨潟さんが嬉しそうに報告をしてくれる。

当然、俺も強敵を相手に生き延びたことに対して喜びが込み上げてきて、

「よっしゃああああああー！！」

結 2

「——以上が報告出来ませんでした昨日と今日の報告です」

『そうか……』

『隠れ家^{ラボ}』の一角でつむぎは博士への報告を行っていた。

前日はほうほうの体で『隠れ家^{ラボ}』に逃げ帰ってきて、治療などを行っていたのでそんな暇がなかったのだ。

『私の想いすらも歴史にとっては予定調和だったわけか』

「……そのようです。博士の思いも私の存在も廻さんを死へと導くものでした」

『廻はどうしてる？』

「出血が多すぎたため、戦闘終了直後にお倒れになりました。現在、治療を終了し、睡眠についています」

『そうか——、生きているんだな』

「はい。生きています」

二人のその言葉に込められた思いは共に安堵であり、嬉しいと分類されるものだった。

『しかし、気を緩めてはいられないぞ。お前の報告にあった知性をもち、不可思議な技法を用いるような『調整者^{リバーサー}』がまたやってくるかもしれない』

「はい。正直、同じレベルの存在が続けてやってきたら勝てる気がしません」

『それほどか。それに不可思議な技法、これも確かなのか？』

「間違いありません。起こしている現象は似たようなものでしたが、センサーが測定していた結果から利用しているエネルギー、発動の体系は全く違うものであると判断できます」

「確かに赤いエネルギー光など聞いたことがない。それに機器もなしに私達と同じような現象を起こしているとなると学会が大騒ぎになるぞ」

今度の二人の言葉に込められている感情は緊迫と戦慄。未知なる強大な敵にどう立ち向かうべきかその考えで不安になってしまっている。

「今後、彼らと戦うことになるとして、現状のスペック、武装ではいささか心許ないです。どうにかならないでしょうか？」

「そうだな。武装についてはミステイに相談する。あれも今回のことを知れば、喜んで手を貸すだろう。しかし、スペック面となると体をいじらんとならんからな。ソフトウェアをアップデートすることで最適化は出来るが、大幅な性能上昇は見込めん」

画面の向こうで博士は困ったように眉を顰める。

博士としても、そのような脅威が現れた以上、つむぎを強化したとは思っただが、現状、そう簡単に出来ないのが問題だった。

「まあ、その対策もこちらで考える」

「ふむ、ならばその話、私も一枚噛ませてもらおうか？」

博士がバツとつむぎからは見えない画面の向こう側の博士がいる部屋の入り口を振り返った。

「………勝手に入ってくるんじゃない」

『知らぬ仲でもないだろうに硬いことを言っな』

画面の中に新たに茶髪を肩口まで伸ばし、鋭い目つきの上に眼鏡をかけた、スーツとヨレヨレの白衣を身に纏った女性が現れた。

つむぎは記憶しているデータからその人物が誰かを割り出した。

「初めまして、三ツ傘様。私は機種識別名称、特殊戦闘型汎用アンドロイド『つむぎ』と申します」

『ああ、初めまして。君が例の機体か』

そう言いながら画面越しのつむぎを三ツ傘 知恵はマジマジと上から下までジッと見つめた。

『なるほど、流石はこの子が自信を持って過去に送り込んだだけはある。よく出来ているじゃないか』

『おい、お前。何でお前がこいつのことを知っている？一応、こいつの開発は極秘プロジェクトなんだが？』

『何でも何も、数年前から戦争ゲームをやるわけでもないのに私の所の金属を大量に取り寄せていれば、何か作ろうとしているのは分かる。幻影に怯えるばかりだった君が精力的に何かをしようとしているのだ。昔、世話を見た者として気になり、調べるのは当然だろ？』

『ちっ、余計なお世話だったの』

『そう邪険にしないでもらいたいものだな。私の研究室で実験開発中の物を分けてやろうと思っているのだから』

『何？』

博士は怪訝そうな顔で知恵の顔を見る。

『三号は私にとっても亡くすには惜しいと思っていたからな。彼が生き延びることが出来るというなら私も喜んで協力しよう』

『……まあ、くれるってんならもらってやる』

『是非とももらってくれ』

「ご協力ありがとうございます、三ツ傘様」

『ふむ……。しかし、これでミス博士も加わるとなると、つむぎ君の開発には『変革の賢人^{ミール}』のうち三人も関わることになるのだね。いやはや、それにふさわしいだけの成果は出ているのだがね。『調整者^{リバーサー}』の知的個体の確認、未知のエネルギー、未知の技術。ふむ、上に報告すれば、もう少し大規模に進められるのではないかな？』

その知恵の提案を博士はあっさりと否定する。

『いや、そんなことしたら過去改変が『調整者^{リバーサー}』が現れる前みたいに行われるようになる。それは私の望む所じゃない』

『それもそうか。過去改変が行われるようになれば、真っ先に私達は狙われそうなものだからな』

『そういうことだ。上にも適当に誤魔化して報告しておくさ』

『となると、当面は私とミス博士、そして、首謀者である君、命博士の三人でつむぎ君を改良していくことになるのか』

『首謀者とか悪そうに言うな』

博士、天理 命は嫌そうに吐き捨てる。

『しかし、意外なものだ。色恋になどさっぱり興味がないかと思えば、髪の色が脱色してしまうほど想っていた三号が死んで、四十年近くも初恋の想いを持ち続けているとは。存外、一途であったのだな』

『るっせえ。私も今回の件でわかったが、ガキが目の前でちよつと

いいかななんて想ってた男が無残に死ねところを見れば、そりゃトラウマにもなるだろ。一途とかじゃなくて呪いだ、呪い」

そう言いながらも、耳が赤くなっていることに知恵とつむぎは特に触れなかった。

『では、私は一度自分の研究室に戻って、件の開発中の品を持ってこよう』

「よろしくお願いいたします」

つむぎがそう言つと、知恵はジッとつむぎを注視した。

「あの、何か？」

『いや、何。君から返事が来るとは思わなかったのね。ふむ、そうか……。一つ、聞いてもいいかな？』

「何なりと」

『君は、どうして三号、尾形 廻を護るのかな？』

「それが私の存在意義であり、使命であり、そして、私の思いであるからです」

つむぎはその問いに即答した。

一度は揺らいでしまった自分の存在意義だが、その護るべき対象である廻に諭されて以来、この想いはより一層強く刻み込まれていた。

視線をふとずらすとその視界にはこの『隠れ家^{ラボ}』の中では異彩を

放つ、廻にもらった羊のぬいぐるみが目に入り、意図せずつむぎの表情が微笑みへと変わる。

その答えと表情に知恵は愉快そうに笑い、命は苦そうな顔をしていた。

『ふふふ。いや、やはり三号は面白い。ああ、こちらで生き残っていないのが非常に惜しく感じられる』

『……間違った。やっぱり女性型はやめるべきだった』

その二人の様子につむぎは首を傾げるのだった。

あの男を撃退してからというもの、なんだか清々しい気分になり、あの戦闘から二日後の火曜日、俺は学園へと足を向けていた。

やはり自分の死というのは俺にとってとんでもないストレスであり、それを覆した今、俺の気分は稀に見るほどの上機嫌になっている。

昨日は逆にまた襲ってくるかもしれないと戦々恐々としたものだったが、何事もなく夜が明けて、運命を振り払ったのではないかという結論を俺と雨潟さんで出した。

なにやら新しい武器も用意したとのことだったが、それを使う機会に恵まれなくて万々歳だ。

一応、雨瀉さんは今日も俺の護衛についているとのことだったが、俺はすっかり晴れた気分で何の憂いもなく学園へと向かっていた。

肋骨のほうはともかく、流石に散々痛めつけた左腕は一日休んだくらいでは治らず、今日も包帯を巻いているが、これも三日としないうちには治る見込みだ。

「帰りは命の見舞いにも行くか」

今朝、家に帰り、そこで会った命の母親である鶴子さんに会い、命のことを聞くとこう返ってきた。

この前の土曜日は珍しく父親である翔太郎さんが帰ってきていて、家族揃って遊びに行こうという話になり、俺と同様、命がテーマパークに行きたがっていた覚えていた鶴子さんの意見であのテーマパークに来ていたそうだ。

しかし、突然、命が迷子になり、係員と協力して探したところ倒れている命を見つけ、異常にうなされていたので病院に搬送されたそうだ。

鶴子さんに見舞いに行ってくれと頼まれたが、もとよりそのつもりだし、そもそも俺のせいでそんな状態になっているのだから謝りにも行かないといけない。

そんなことを考えながら教室のドアを開ける。

「おはよう」

俺がそう教室全体にさわやかに声をかけながら入ると、教室がざ

わめきに包まれる。

いつもならあり得ない俺の言動に動揺しているのだろう。

若干、失礼だと思わないでもなかったが、今日は機嫌が良いのでそこはスルーする。

「わるきちっ!？」

そんな中で一人だけ、異なる反応をアンリミズがしていた。

彼女は俺を見るとすぐに駆け寄ってきた。

「昨日はいつたいどうしたの？心配したんだよ？」

「心配？どうして？」

アンリミズが俺の命を狙われたことを知っているはずがないのそんなことを言われ、疑問を浮かぶ。

「それは、日曜日、あんなことがあったから」

周りに聞こえないように小声でそう言われ、あの男のことをかと思いつたが、その直後、そういえばアンリミズを誘拐犯達から助けていたことを思い出した。

あの子の戦闘が色濃く記憶に残りすぎて、すっかり忘れていた。

「ああ、そうだったな。あの後、大丈夫だったか？」

「うん。あの後、すぐにSPとか警察の人が来てくれたから。あ、もちろん、言われた通り、わるきちのことは言っていないよ」

「そっか、ありがとな。あんな無理なこと言って」

「うっん、全然いいよ。わるきちには助けてもらったんだから黙ってるぐらいのことなんてどうってことないよ。——って、わるきち、腕どうしたの？」

アンリミズが包帯を巻かれた左腕を見て、驚きながら俺に問いかけた。

剣で斬られました。なんて言えるわけないので

「ちよつとな」

適当に誤魔化したのだが、それをどうやら彼女は勘違いして受け取ってしまったらしい。

「もしかして、あのときに？　そういえば、窓を叩き割ってたもんね」
「あゝ、いや、そうじゃなくてだな」

俺がその誤解を解こうとしたのだが

「三号、いるか？」

教室の扉から先輩が顔をのぞかせ、言いそびれてしまった。

「何すか、先輩？」

「何だ、ではない。昨日はどうしたんだ？　いつもの場所で待ってたというのに来ない上に連絡一つよこさないとは」
「あ」

すっかり忘れていたが、昨日は先輩のバイトがあったことを思い

出した。

「すみません。すっかり忘れてました」

「ふむ、三号にしては珍しいな。——む？」

そこで先輩の視線が俺の左腕にいき、更に俺の近くにいるアンリミズに向いた。

「ミスではないか。君もこのクラスだったのか？」

「うん。そうだよ。わるきちと同じクラスなんだ」

「あれ？二人とも知り合いなのか？」

お互いに知り合いらしい二人の様子を疑問に思い、聞いてみた。

「ああ、ミスは中々の才媛だな。優秀な者同士、仲良くしたらどうだ、と父に紹介されたのだ」

そう言えば、二人とも将来は『変革の賢人^{ミミル}』と呼ばれる天才だった。

「しかし、その腕……。まさか、一昨日の事柄に巻き込んだのではないだろうね、ミス？」

「あ、いや、これは」

「だったら、何？」

「もしそうであるならば、そういったことは極力控えてもらいたい。多少、粗暴そうに見えようとも三号はれっきとした一般人なのだから巻き込むのは関心できんよ」

「だから」

「一般人？ふーん、知らないんだ？」

「何をだ？」

「別に、何でもないよ。ね、わるきち」
「ん、あ、ああ」

全く俺の話を聞く気配がなかったのだが、いきなり話を振られ、思わず頷いてしまう。

「?.....まあ、とにかく注意してくれたまえよ、ミス。それと三号、今日の放課後なのだが、昨日の予定をそちらに移すという事でいいな?」

「はい。大丈夫っす」

「では、今日の放課後に」

「わるきちっ!」

腕をいきなり引つ張られたかと思うと、頬に何やら柔らかい感触があたる。

先輩はそれをキョトンとした表情で見えて、俺もそれが何なのかすぐには分からなかったが、アンリミズが少し背伸びをして、俺の頬に顔を突き出していたことから遅れて、何をされたかを理解する。

「一昨日のお礼だからね!」

赤くなりながらもそんなことを言うアンリミズにどう言えばいいの困っていると

「——っ」

ゾクツと背筋が寒くなり、辺りを見渡す。

しかし、周りではアンリミズの突然の行為で騒いでいるクラスメイトとキヨトンとした表情からニヤニヤした顔つきへと表情を変える先輩しかない。

しかし、何かプレッシャーのようなものを間違いなく感じるため何なのだろうとキヨロキヨロ周りを見渡すがやはりおかしなプレッシャーを放つ人物の姿はない。

何故かイイ笑顔の雨瀉さんが脳裏に浮かび上がるが、その理由も分からず混乱するしかなかった。

「これはいったいどうする？」

「どうするも何も手出しが出来んよ」

「その通りだ。奴とミステイリーネの因果が強く結びついてしまった以上、下手に手を出せば歪みが余計に大きくなってしまう」

どことも知れない空間で複数の声が響き渡る。

「当日であれば、まだどうにか誤魔化せたものの『^{ヴァーチェ}力天使』がしくじったせいでそれも不可能になった」

「『^{ヴァーチェ}力天使』一人に任せるからこのようになったのでは？」

「しかし、あの時点であの世界に『^{ヴァーチェ}力天使』の他に受け入れる余裕はなかっただろ」

「ならば、『^{ヴァーチェ}聖霊』の軍勢で押しつぶせばよかったのでは？」

「『聖霊』相手ではあの機械人形に退けられるだろう」

「そもそもあの男が未来の物を持っていることを何故知らせなかった？」

「『聖霊』に処理を任せていたのだ。誰が所持していたなど特定で
きん」

「ならば、お前の責任ではないか！」

「黙れ！任務を達成できない無能な『力天使』^{ヴァーチェ}を遣わしたお前の責
任だろうが！」

「何だと！」

怒号が飛び交い、責任のなすりつけあいがそこらかしこで行われ
た。

「静かになさい」

しかし、その騒ぎもこの一声で一気に沈静化する。

「我々は全知全能ではないのです。いずれ、このようなことは起こ
つていたでしょう。それがたまたま今回だった。それだけのことで
す」

「しかし、『智天使』^{ケルヒム}様。あの世界が正すことが難しくなったこと
は事実です。いったいどうなさるおつもりですか？」

「『主天使』^{ドミニオン}、あの世界は今、どうなっているのかしら？」

「はい。あの世界は現在、不安定な状態になっています。しかし、
このまま歪みが広がればおそらくは並行世界の一つとして処理され、
安定化するのではないのかと思われます」

「並行世界だと？何故そのような変化になる？」

「恐らくは世界の重要因子にたいして緩やかに接触、改変をもたら
したことで大規模の欠落を押さえることが出来たからではないかと
推測されます」

「大規模の欠落が起こることはないのですか？」

「いえ、先程も申し上げましたが。あの世界は不安定な状態にあります。これからの変化次第では大規模な欠落が起きる可能性も否定できません」

「ならば、早急に対策を！」

「落ち着きなさい。それにどのような対策が立てられるというのですか？下手に刺激すればそれこそ大規模欠落の引き金になりかねません」

「では？」

「そうですね。しばらくは様子を見ましょう。状況次第では強制排除も視野に入れます」

結論が出て、皆が方々に散った後、そこには『ケルビム智天使』と呼ばれた者だけが残っていた。

「世界の予定調和を乱す者、そなたは我らに新たな世界を見せてくれますか………？」

誰に向けたわけでもない呟きがその空間に響いた。

あとがき

というわけで、『予定調和を乱す者』でした。

この作品は電撃大賞に応募した作品です。ネットで公開するのとは別に自分の作品がどれくらい通用するのかとここ『小説家になろう』で頂いた読者から反応を見て思い立ち、初めて投稿した物です。

正直、調子に乗っていたと思わざるを得ませんでした。

この作品、読んでいただけたならわかるりますが、駄作具合が半端ないです。

特徴がない、面白くない、何がしたいのかわからない、という散々な物です。

予想にたがわず、一次も抜けることができずに終わりました。応募した時点で無理だろうなと思いましたが、それでも時間をかけて作った作品の結果を目にするとショックでした。

反省点が多々あったことはもちろんですが、特に反省しなければならなかった点は時間配分です。

締めきりギリギリになってようやく完成したため誤字・脱字の確認を怠ってしまったことはもちろん、最後のほうのクオリティが下がってしまったことは大いに改善していかなければいけないと感じました。

……まあ、でもご存知の通り今年の電撃の締め切りは四月で、その後の五月末、六月末にも別のところへの応募で作品を書き

上げたときもギリギリになってしまったのですが。

さて、反省という名の言い訳はともかく、今回この作品を掲載しようと思ったのは最初のショックが抜け（五月末の作品の落選も決定してそちらのショックが今は強くなった）今後この作品を改稿してまた応募することはないだろうなと思ったので、このまま誰にも見せないままにしておくよりは誰かに見てもらい、僅かながらでも意見や感想が得られれば幸いと思ったからです。

ここに掲載するにあたって改めてざっと目を通してみると、ここまです酷かったかと思い知りました。下手すると既にここに掲載している他作品以下のできじゃないだろうかこれは。

面白みに欠ける作品でしたが、目を通していただきありがとうございました。

ちなみに、どうでもいいことですが、少しだけ先の構想を考えていましたのでそれも掲載しておきたいと思います。

今回の話を一巻とすると、

二巻では話の最後に出てきた組織からのアプローチ。組織から新たなキャラが主人公のもとを訪れ、彼らの存在がどういったものなのかというのを掘り下げつつ、組織内での静観派と排除派の争いに主人公とヒロインが関わっていきます。

三巻では主人公が先輩やクラスメイトの伝手で次世代型VRゲームのテストプレイに参加し、そこに未来から介入してきた存在によって閉じ込められてしまいます。ゲームの外と中でのそれぞれの動きを描きたいと思っていました。

これより先で考えていたのは、未来の科学者から過去の自分に人格を転送した結果、現在と未来の人格の二つを持ち合わせるようになるだとか、主人公を要にした新世界創造計画の暗躍というものです。

では、今度こそ本当にこのような駄作に目を通していただきありがとうございました。気分が向けば、五月末に落選した作品を掲載することもあるかもしれません。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8616v/>

予定調和を乱すもの

2011年8月16日17時27分発行